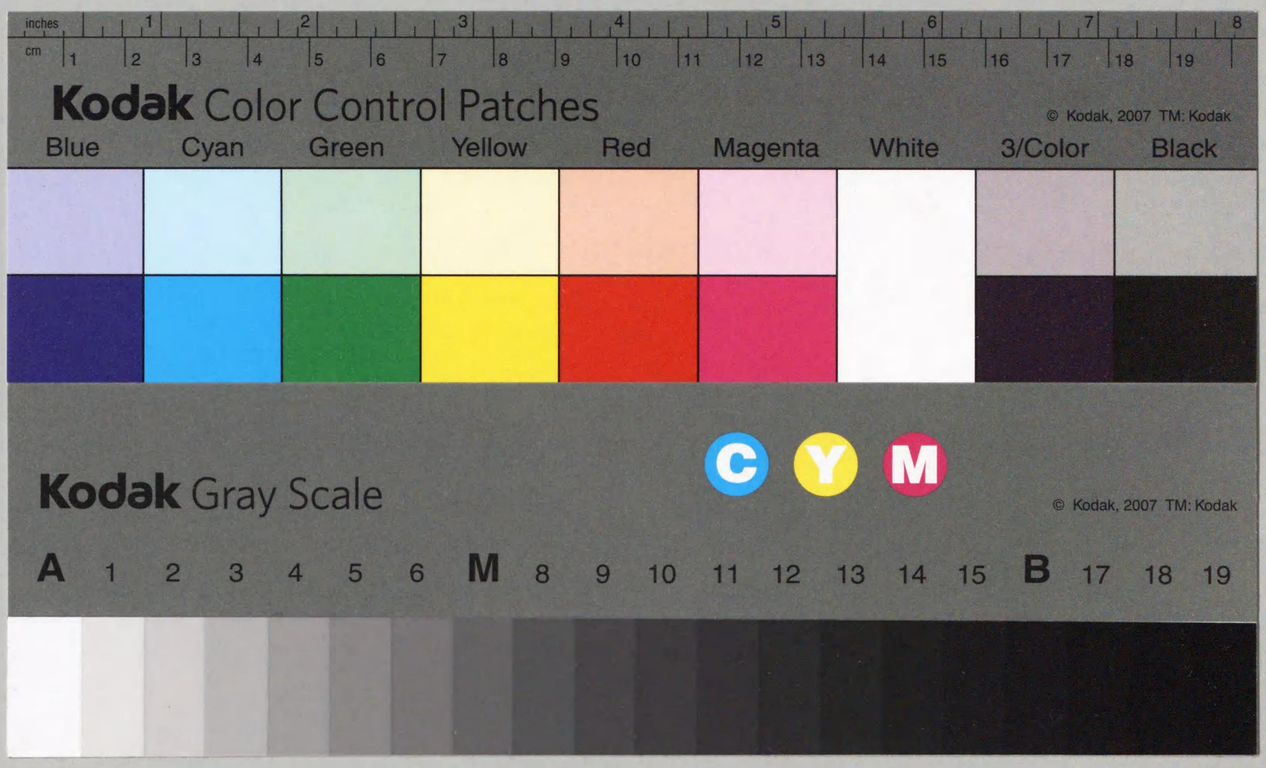


521
I858n
00683875

日本建築の研究 上

工學博士 伊東忠太著

龍吟社

521
I858n

521/

國會圖書館
41.1.-7

住友彬氏寄贈書

683875

序

我が國の建築を歴史的に研究することは、日本文化の正しい姿を把握する上に極めて必要である。固より建築の歴史的研究は種々の角度から行はれるのであるが、予は、社會の文化を背景として研究するのが、最も興味あり、且つ有意義なことであると思ふ。

予は不肖ながら、五十年來常にこの觀點に立つて、日本建築の研究に從事して來たのであるが、學問的にも技術的にも頗る得るところが多かつたと思ふ。

『法隆寺建築論』を始め予が從來發表し來つた幾多の論文乃至講演資料は卽ちその所產であること勿論、この他紀行、隨想、雜筆等感ずるまゝに筆を執つた短篇までを集むるときは、相當の多數に登るのである。謂ふまでもなく、これ等の文獻は予個人のためには予の學界生活を顧みる上のよき伴侶であるが、學界より觀るときは、日本建築研究の資料であるとも言ひ得るのである。卽ち年來予が舊稿の整理を念願とせる所以であつた。

然るに、昭和十年、予は圖らずも舊稿整理の機會を與へられた。それは、予の知友後輩の諸氏によつて「伊東忠太建築文獻編纂會」が設けられ、予の舊稿を上梓せんとの企てが起された

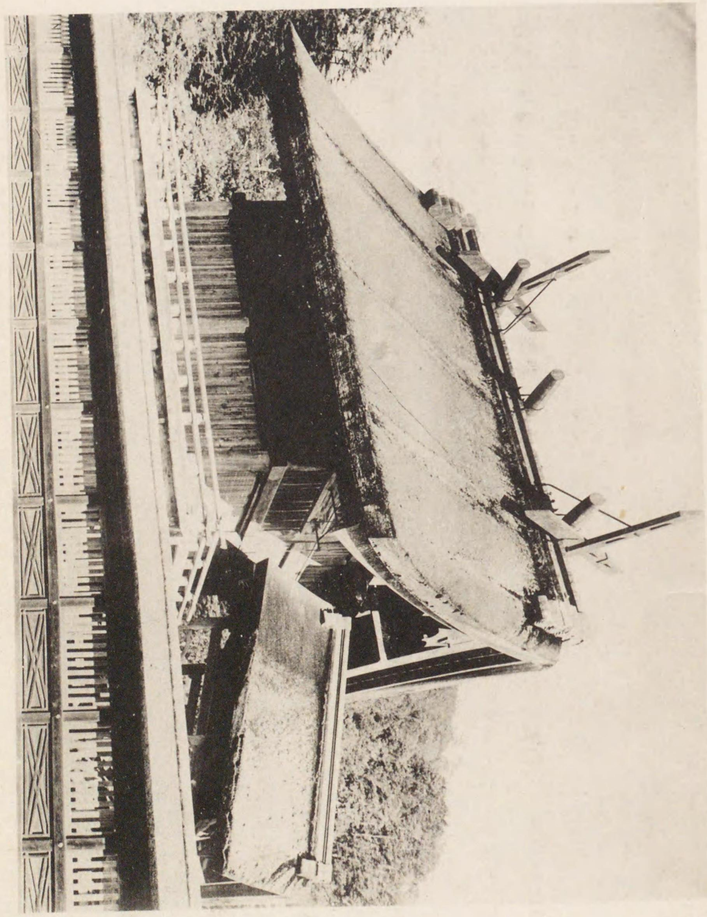
からである。偶々書肆龍吟社の協力を得、『伊東忠太建築文獻』全六卷が編纂され、同好の諸氏に頒布せられたのであるが、生前圖らずも自己の全集を手にするを得た欣びは固より、發起人編纂員諸氏に對する予の感謝は洵に限り無きものがあつた。

今回、龍吟社に於て再び右六卷の版を新たにして弘く世に行はんとの企てが起され、先づ『日本建築の研究』上下二卷が發兌されることになつたのは予の欣快とするところである。本書は卽ち『伊東忠太建築文獻』全六卷中の第一卷並に第二卷にして、上卷には主として總論を收め下卷には主として各論を載錄してある。孰れも昭和十年迄に發表せる舊稿のみであるから、聊か新鮮味に缺くるところがあるのは遺憾であるが、予の日本建築に關する研究中の主なる文獻は殆ど總て兩卷に收錄されてゐる。

今や、國民擧つて日本の正しい姿を把握し、日本文化を中外に顯揚することの極めて切要なる時、本書が聊かたりとも日本建築の研究に資し、延いて日本文化の闡明に寄與するところがあれば、予の最も欣幸とするところである。

昭和十七年五月

著者識

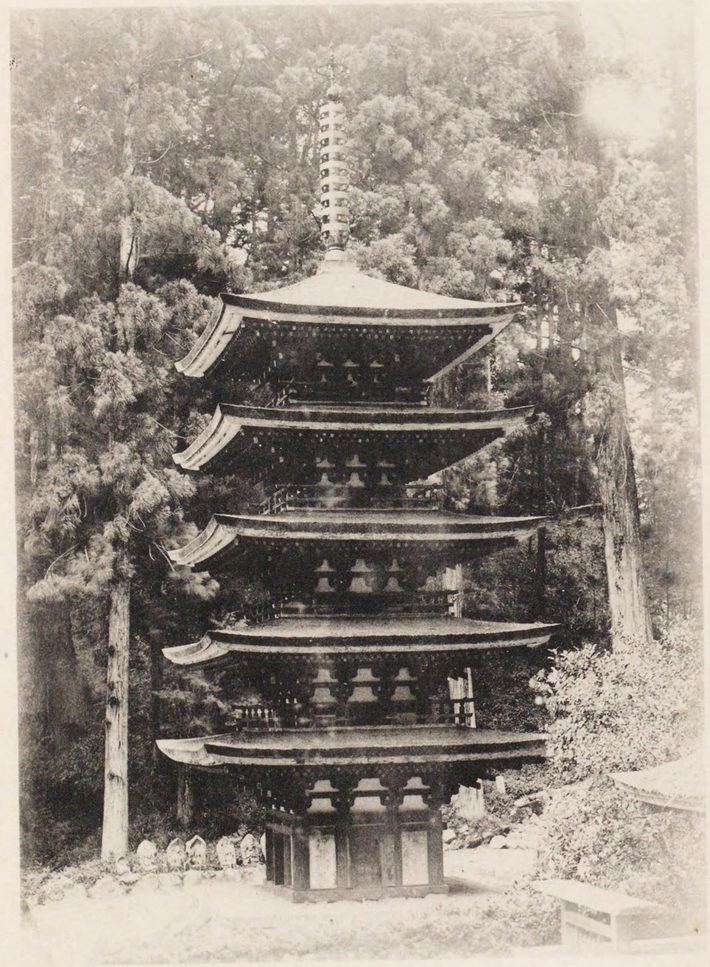


殿正社大雲出雲　出圖一第

第二圖　大和　法隆寺金堂

第三圖　大和　藥師寺三重塔

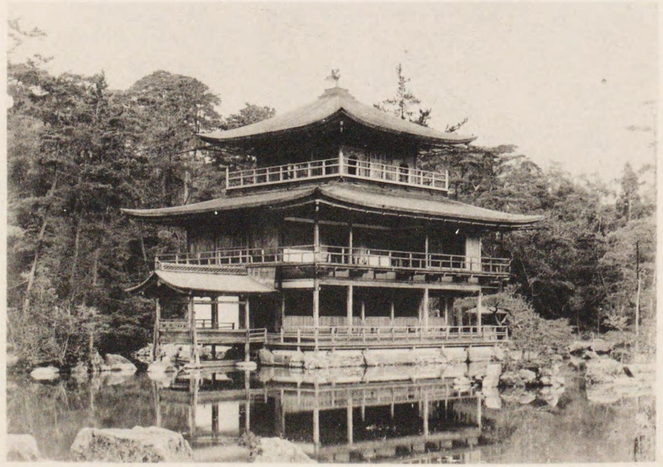
第四圖　奈良　招提寺金堂



第五圖　大和　室生寺五重塔

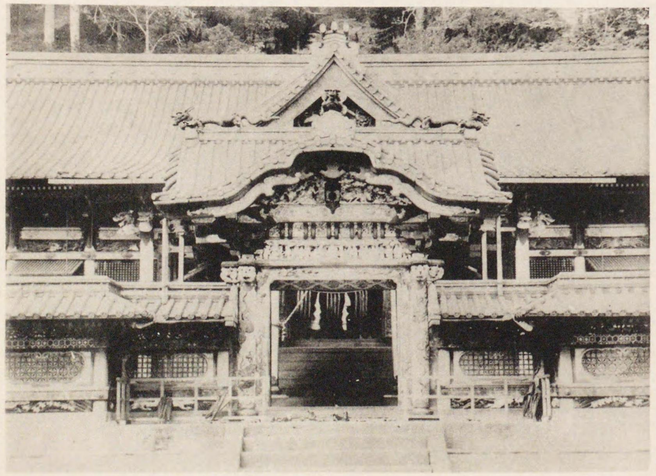
第六圖　山城　宇治平等院鳳凰堂

（上）第七圖　近江　石山寺多寶塔



（下）第八圖　京都　鹿苑寺金閣

（上）第九圖　名古屋城天守



（下）第一〇圖　日光東照宮唐門

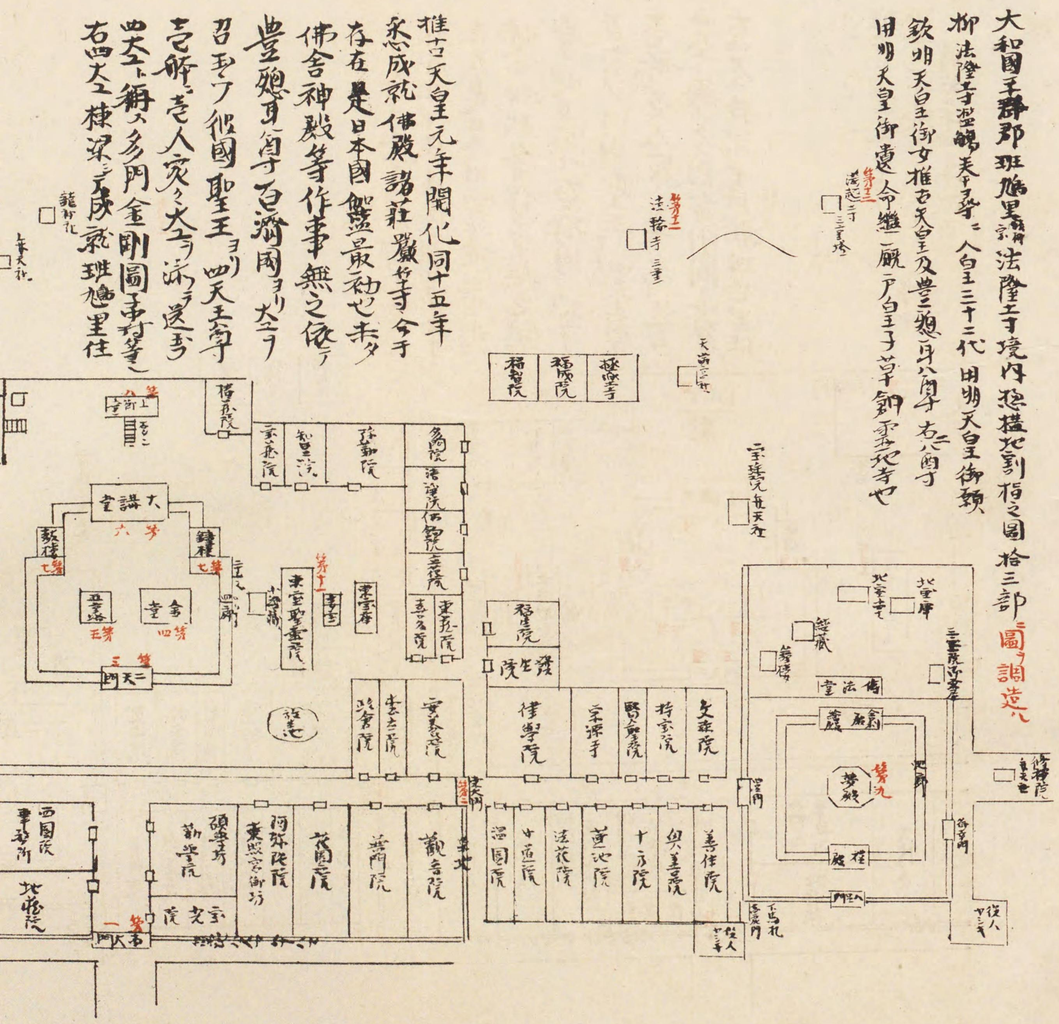
第一一圖　明治神宮正殿

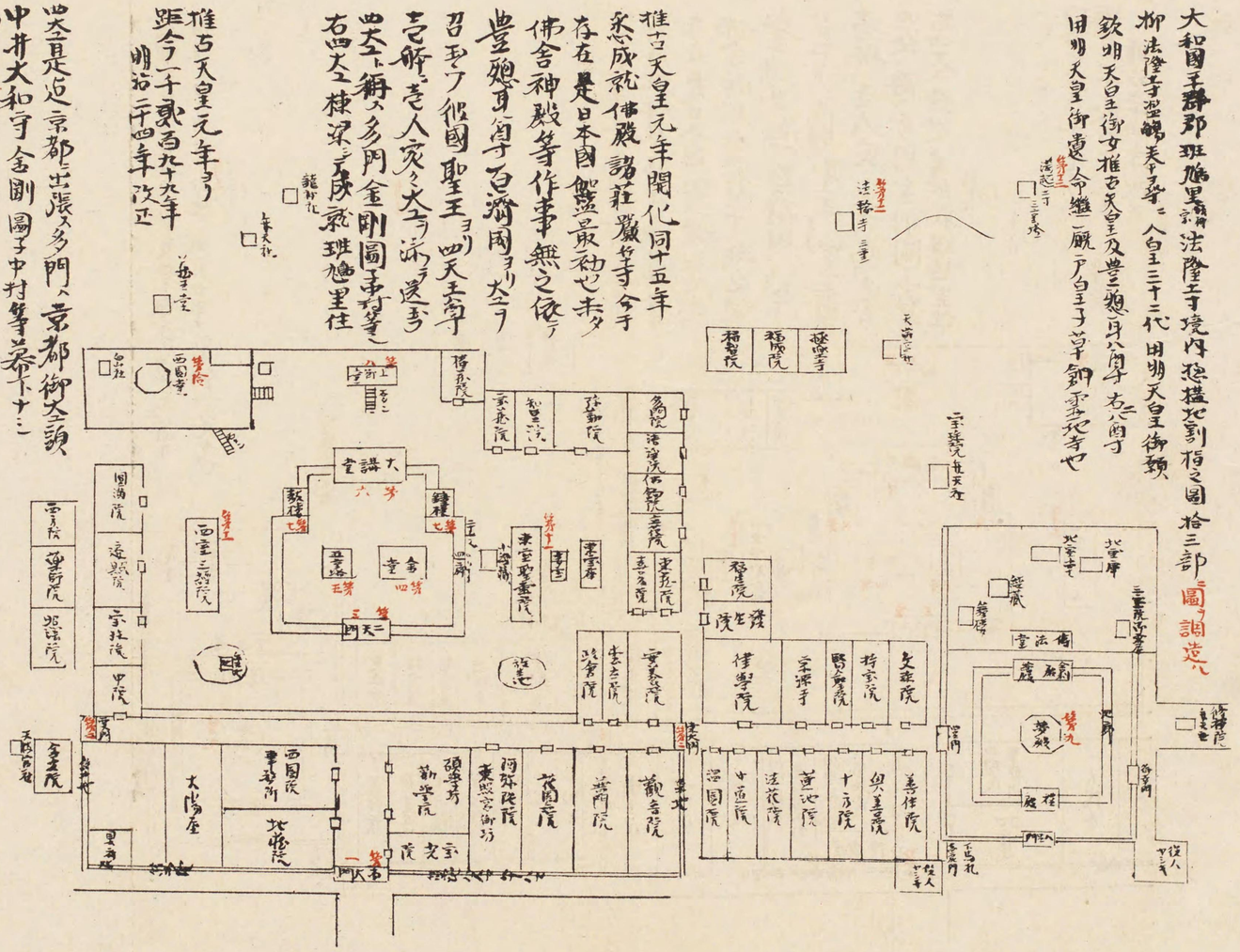
第一二圖　東京　震災記念堂

大和國平群郡班鳩里所在法隆寺境内想像復舊之圖 拾三部 圖ヲ調製ス

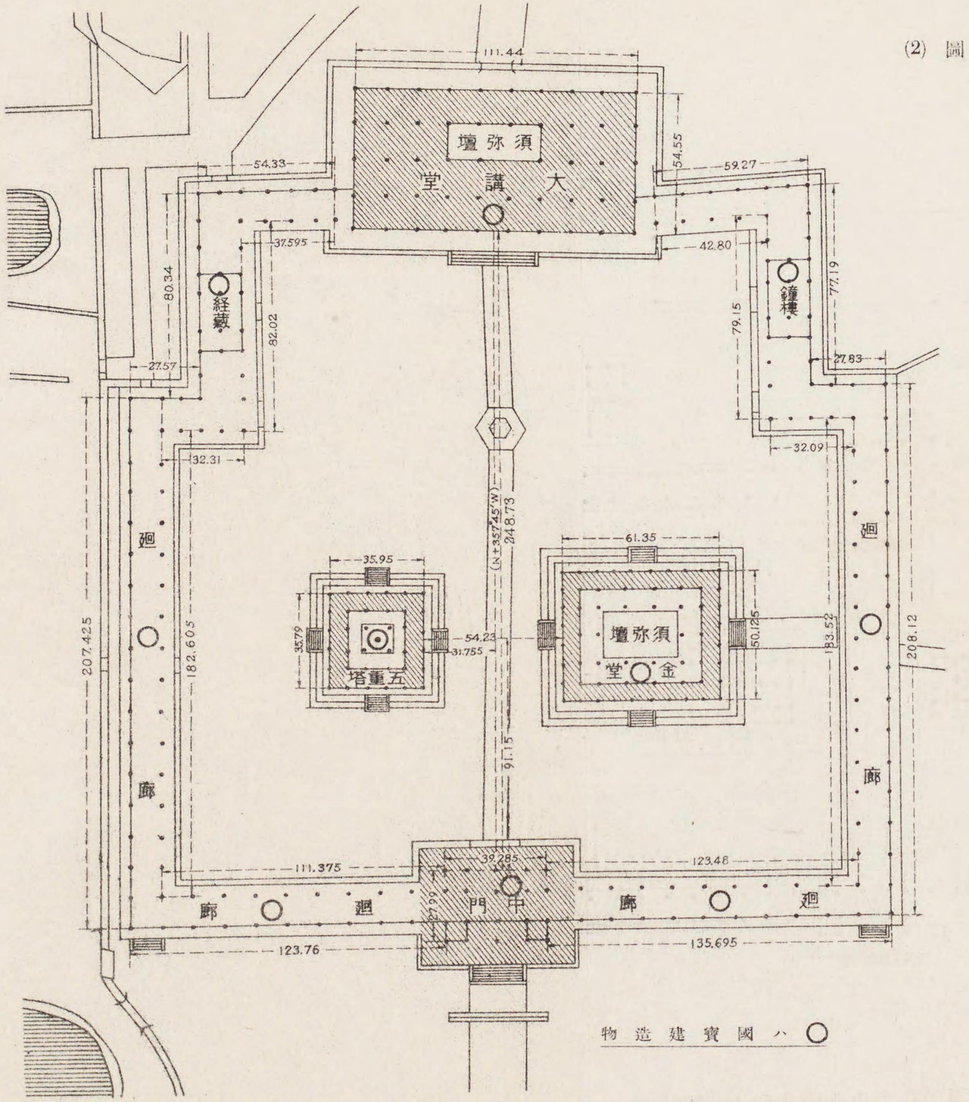
抑法隆寺聖德太子ノ御時ニ八白王三十二代用明天皇ノ御願
欽明天皇ノ御女推古天皇及豊聰耳八尊ノ右ノ四尊ヲ
用明天皇御遺命ニ依リ厩戸皇子草創ノ霊地也

推古天皇元年開化同十五年
衆心成就佛殿諸莊嚴等今ニ
存在是日本國鎭最初也其ノ
佛舍神殿等作事無之依テ
豊聰耳尊ヲ百濟國ヨリ大工ヲ
召寄ヲ彼國聖王ヨリ四天王寺
壹躰壹人宛々大工ヲ添ヲ送ラ
四天王ハ獅ノ多門金剛圖事等ニ
右四大王棟梁ニ依テ班鳩里住

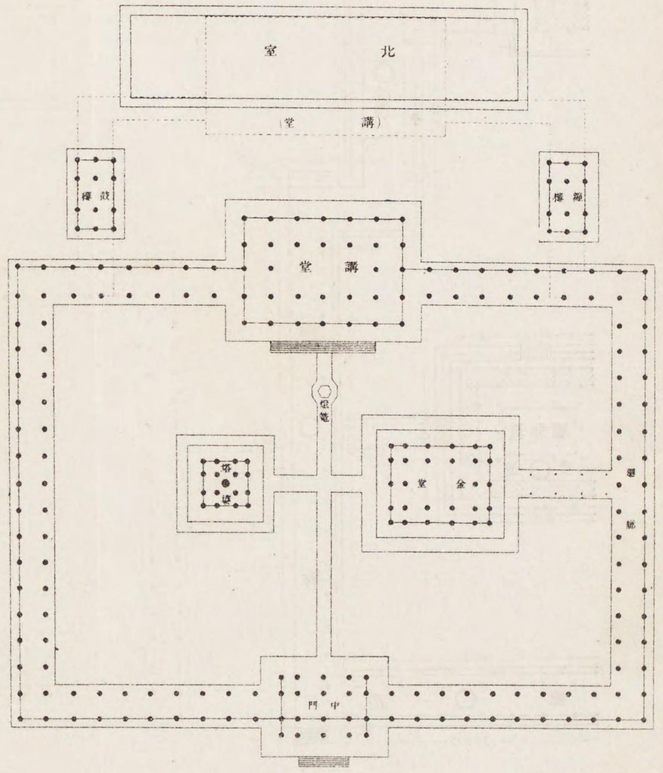

大講堂
金堂
聖靈院
東室
東室聖靈院
東院
東院鐘樓
東院經藏
東院倉
東院中門
東院回廊
東院南門
東院西門
東院築地
東院政所
東院政所門
東院政所築地
東院鎭守
東院鎭守門
東院鎭守築地
東院鎭守回廊
東院鎭守倉
東院鎭守中門
東院鎭守南門
東院鎭守西門
東院鎭守東



第一三圖　大和法隆寺伽藍古平面圖（法隆寺所藏・明治二十五年伊東忠太博士摸寫）

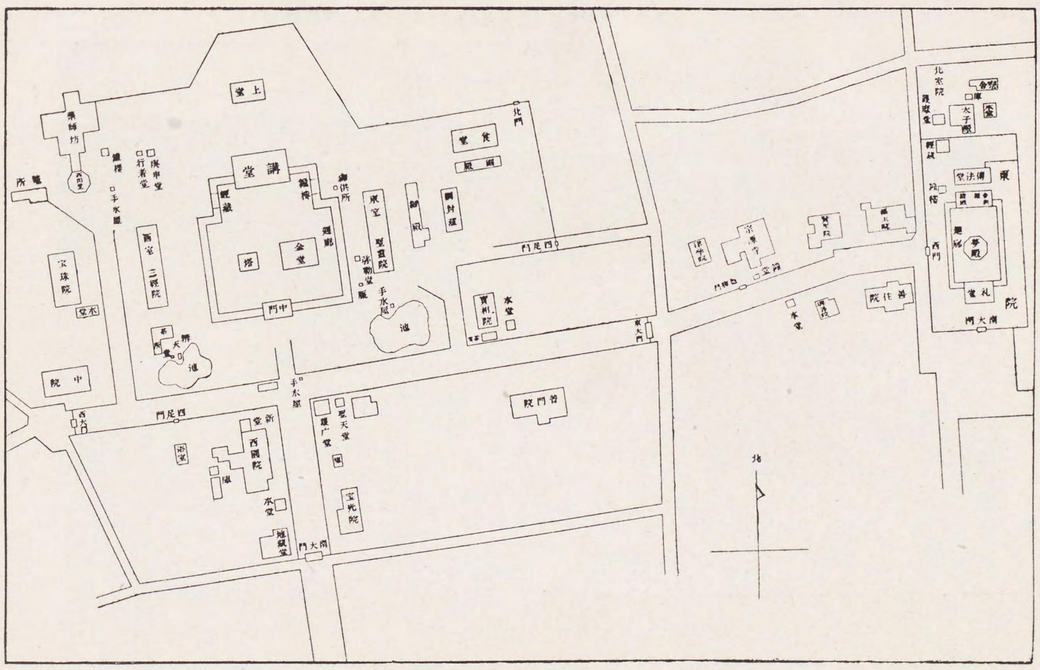


第一六圖　大和法隆寺現在中央部平面圖（聖德太子奉讚會所藏・昭和三年實測）



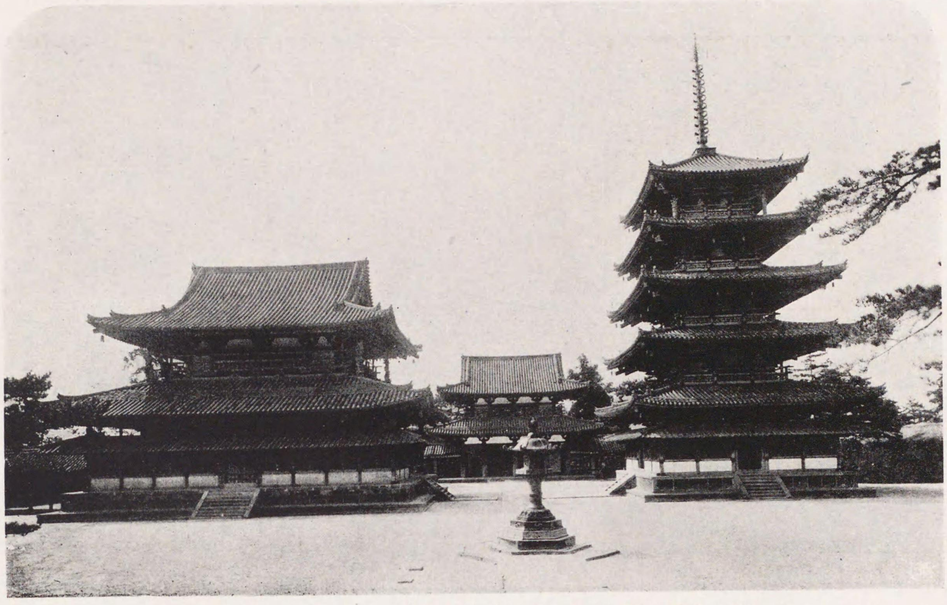
第一五圖　大和法隆寺中央部平面復原想像圖

法隆寺建築論附圖 (3)



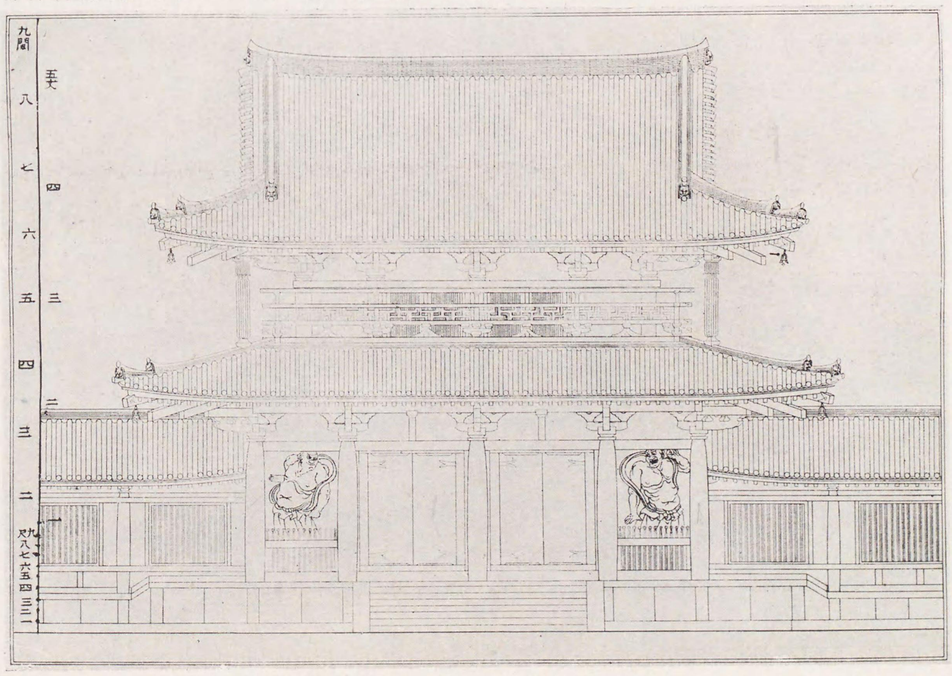
第一四圖　大和法隆寺平面圖(明治二十五年現在)

法隆寺建築論附圖 (4)

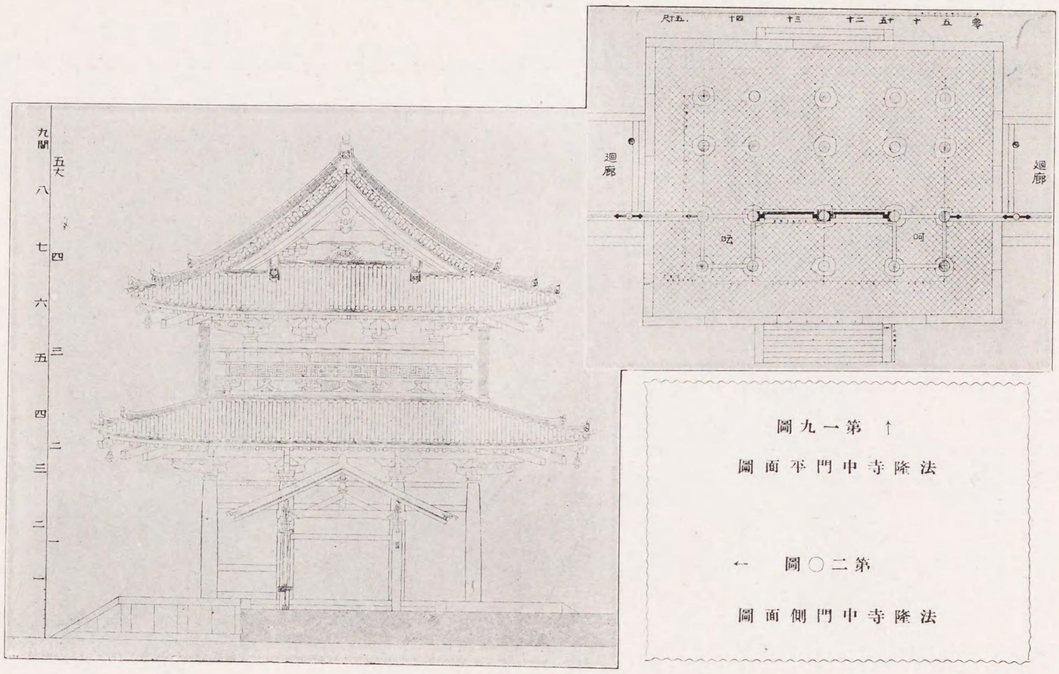


第一七圖　講堂より見たる法隆寺金堂(左)　中門(中)　五重塔(右)

法隆寺建築論附圖 (5)



第一八圖　法隆寺中門正面圖



第一九圖 ↑

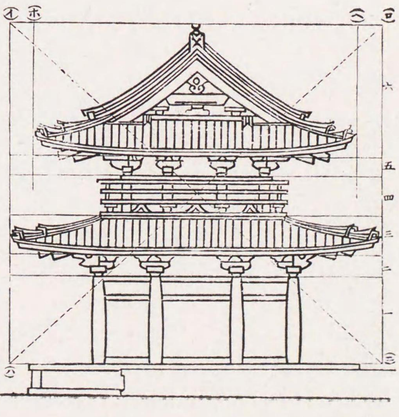
法隆寺中門平面圖

第二〇圖 ←

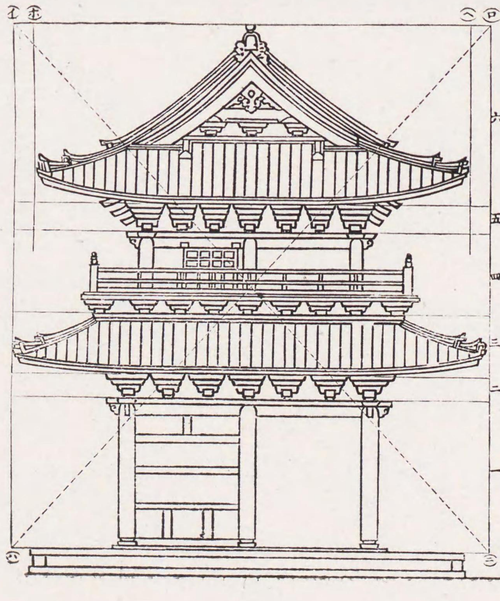
法隆寺中門側面圖

第二一圖　法隆寺中門と京都南禪寺三門との比較圖

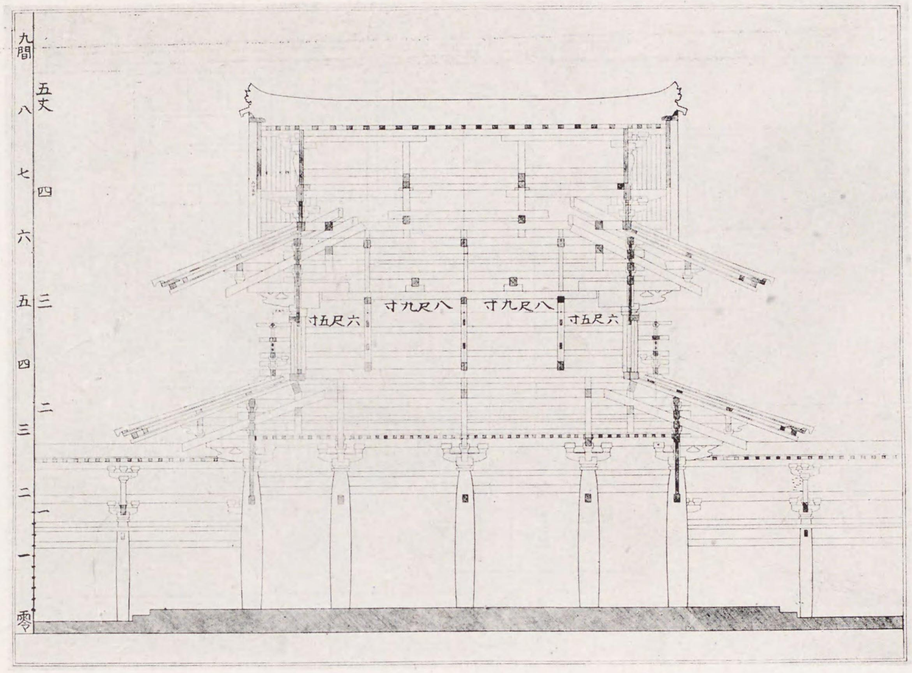
法隆寺中門之圖



南禪寺三門之圖

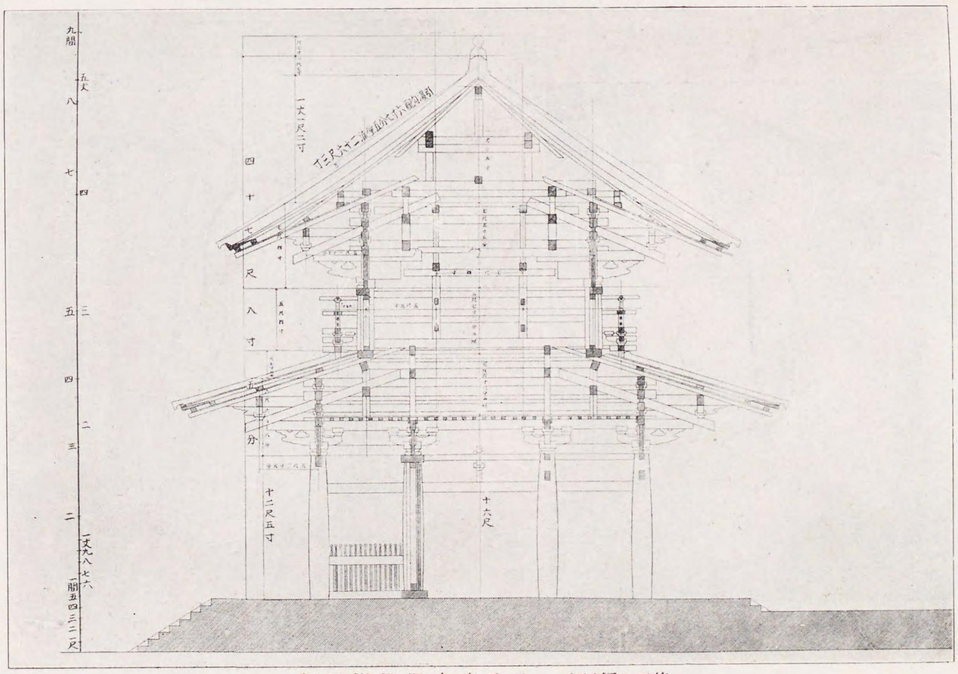


法隆寺建築論附圖 (8)



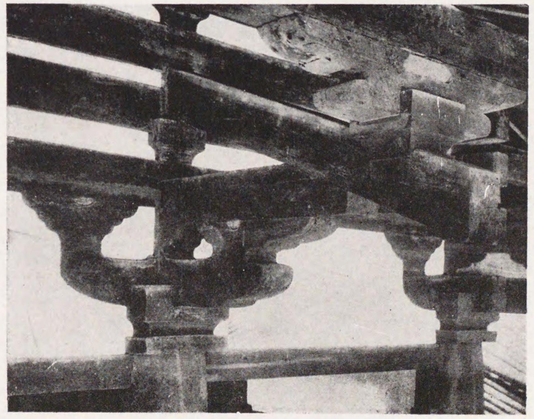
第二二圖(甲) 法隆寺中門縱斷面圖

法隆寺建築論附圖 (9)

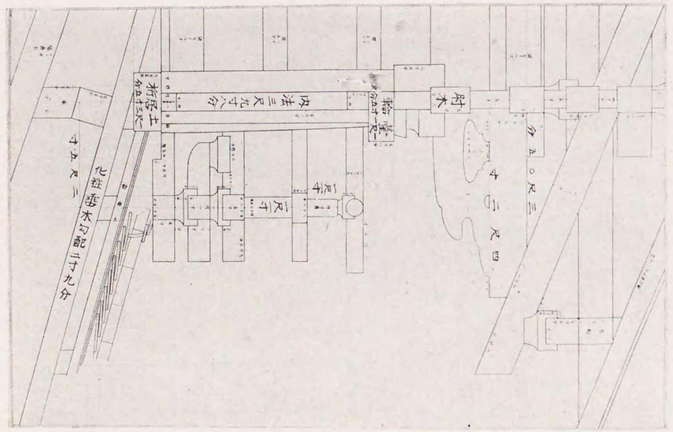


第二二圖(乙) 法隆寺中門橫斷面圖

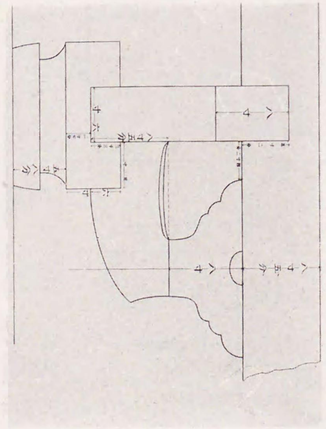
第二三圖　法隆寺中門全景



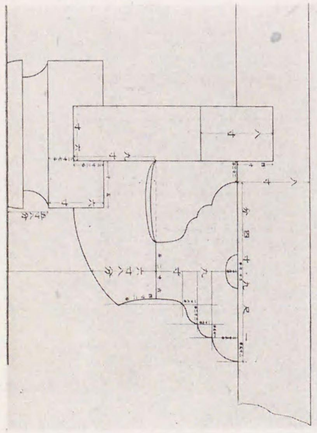
第二四圖　法隆寺中門細部



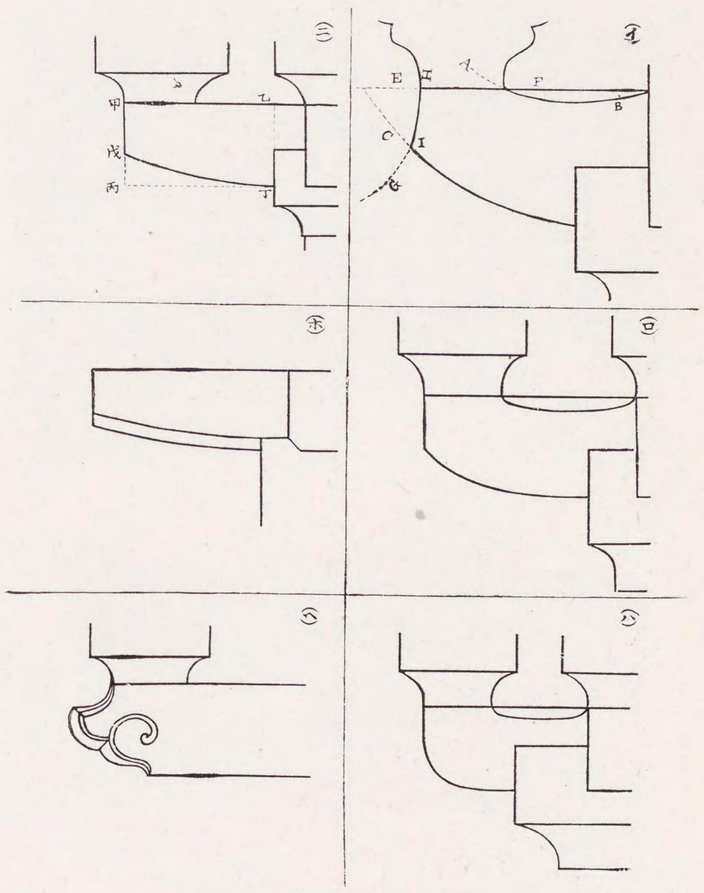
第二八圖　法隆寺中門上層斷面



第二五圖　法隆寺中門下層斷面（柱）

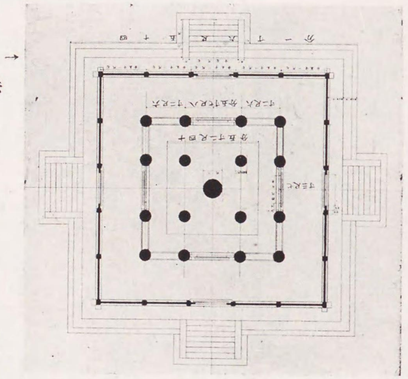


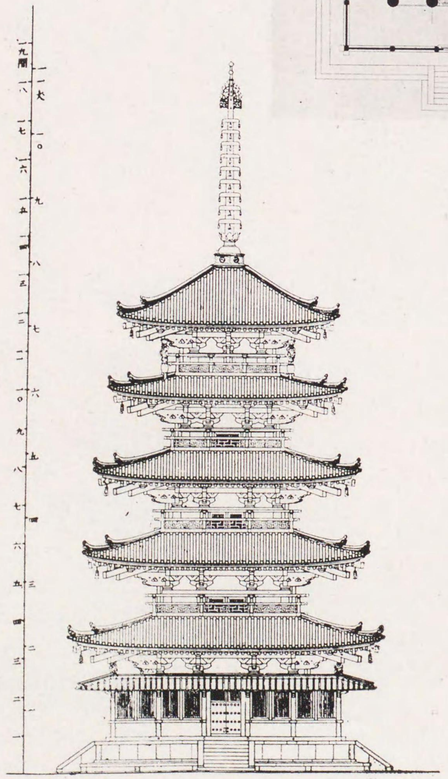
第二六圖　法隆寺中門上層斷面（柱）



第二七圖　肘木六種

圖九二第　→
圖面平塔重五寺隆法



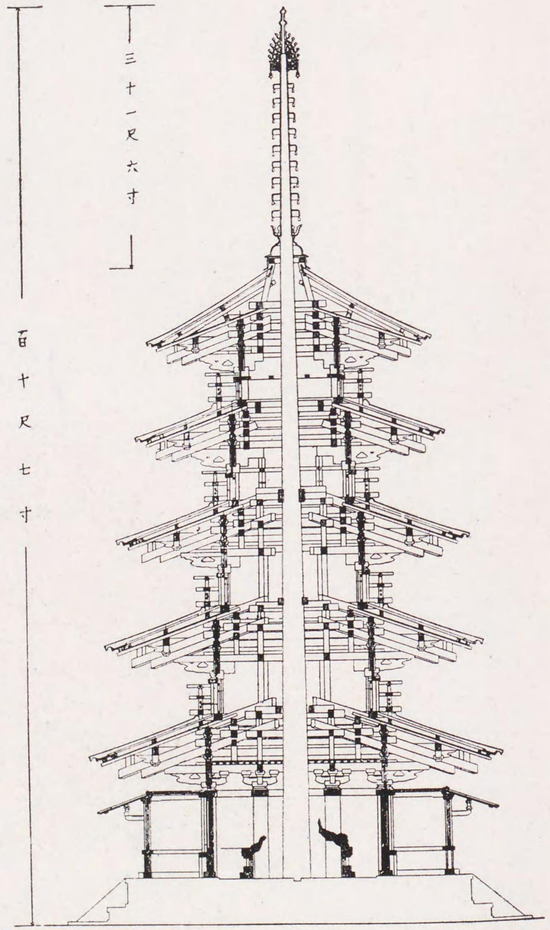


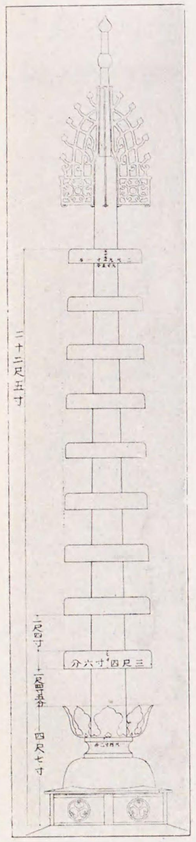
第三〇圖　法隆寺五重塔立面圖

← 圖二三第
輪相塔重五寺隆法

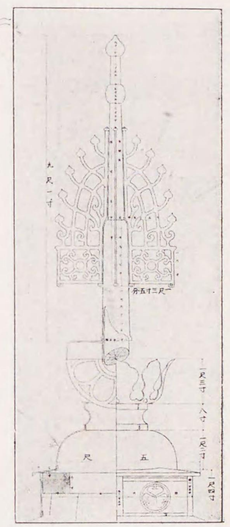
↓ 圖一三第
景全塔重五寺隆法

↓ 圖三三第
圖面斷塔重五寺隆法



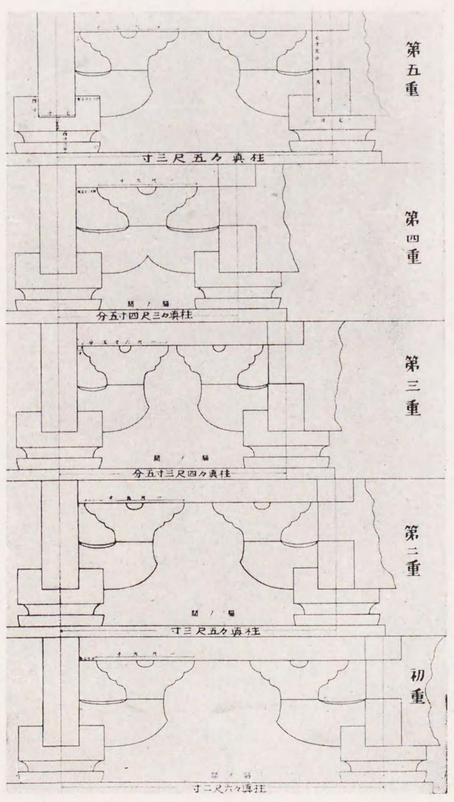


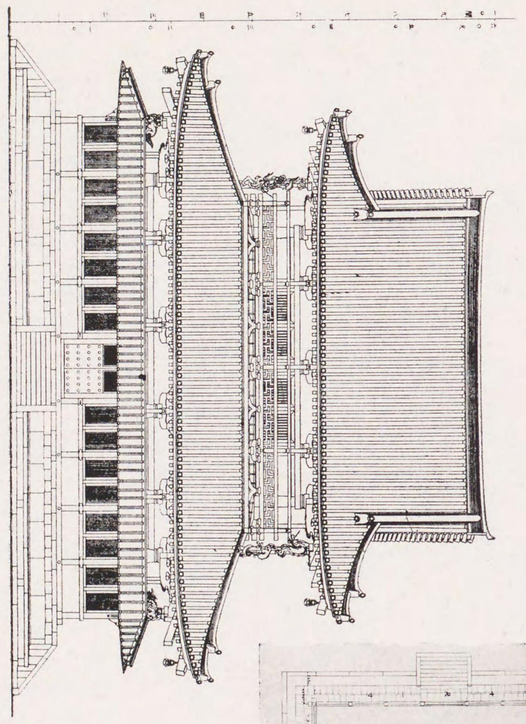
↑ 圖四三第
輪相塔重五寺隆法

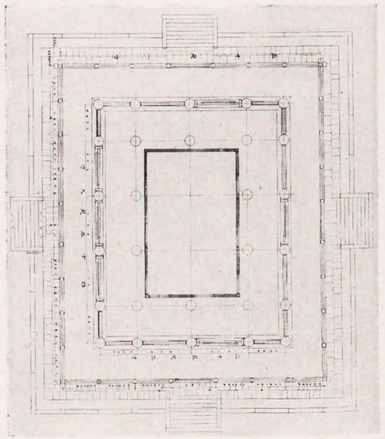


↑ 圖五三第
法隆寺五重塔相輪細部

第三六圖 ↓
法隆寺五重塔各層細部



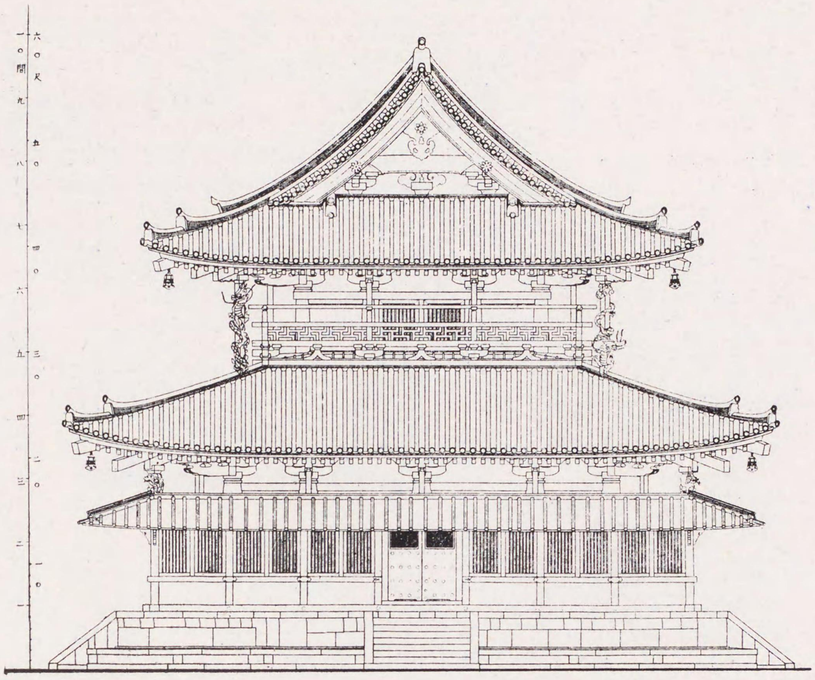




↑ 圖七三第
圖面平堂金寺隆法

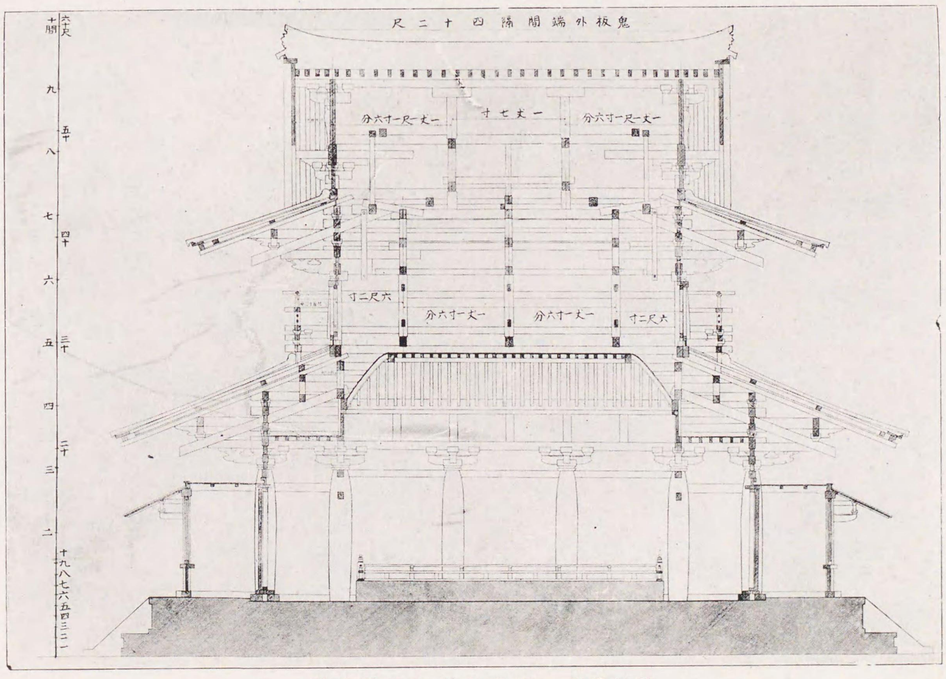
← 圖八三第
圖面前堂金寺隆法

法隆寺建築論附圖 (18)

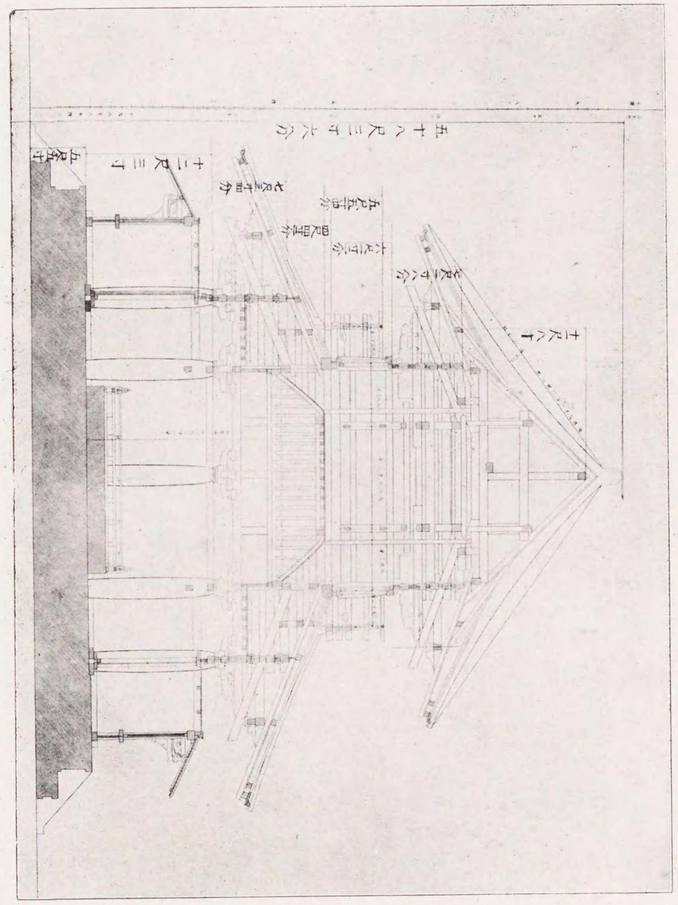


第三九圖　法隆寺金堂側面圖

法隆寺建築論附圖 (19)

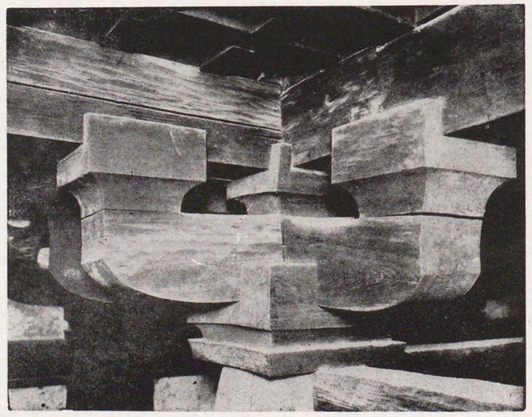


第四〇圖　法隆寺金堂縱斷面圖



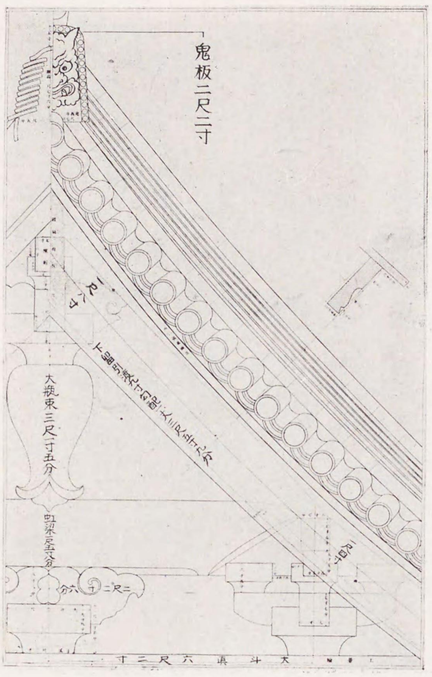
第四一圖　法隆寺金堂解體斷面圖

第四二圖　法隆寺金堂全景

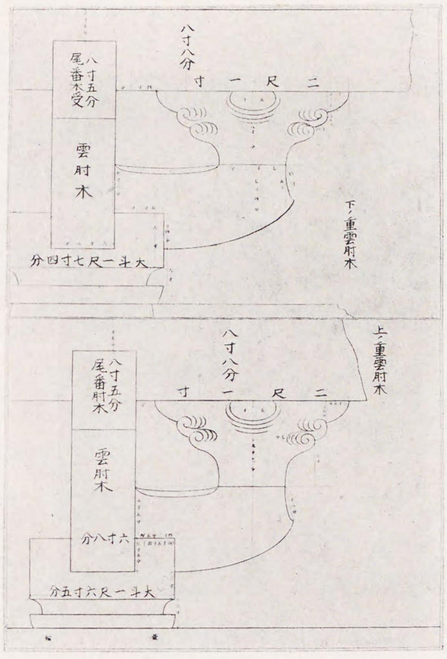


第四三圖　法隆寺金堂細部（枓栱）

法隆寺建築論附圖 (22)

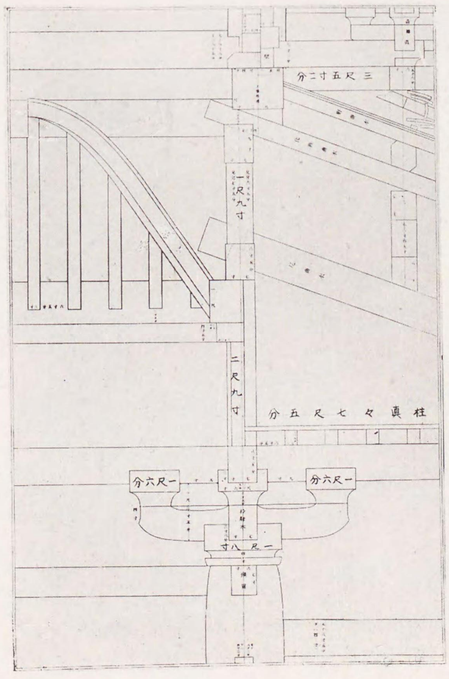


第四五圖　法隆寺金堂細部（妻斷面圖）

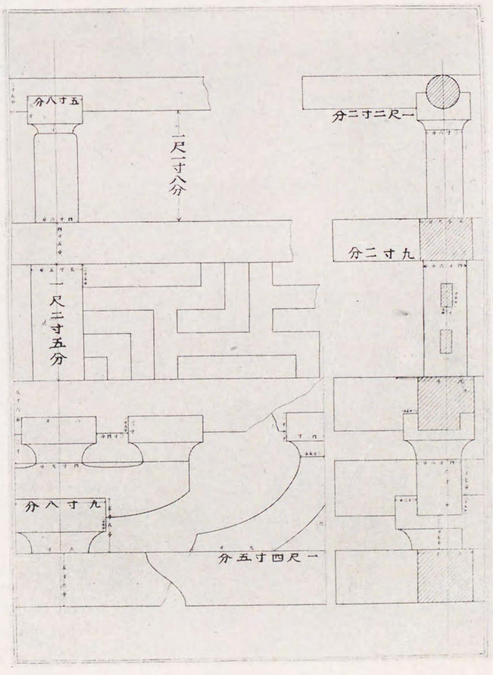


第四四圖　法隆寺金堂細部（肘木）

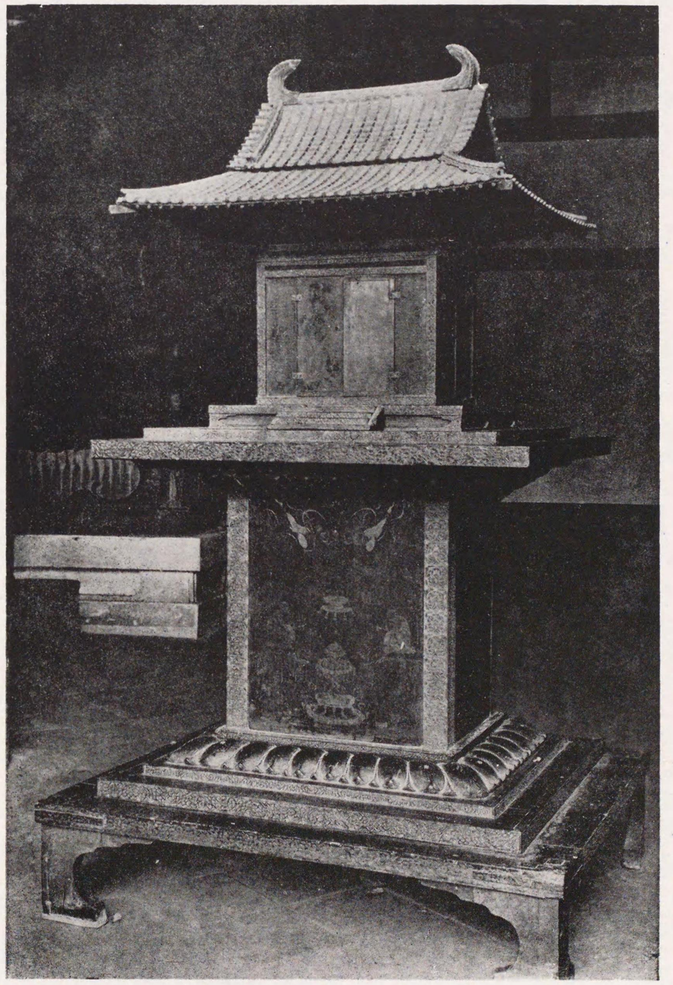
法隆寺建築論附圖 (23)



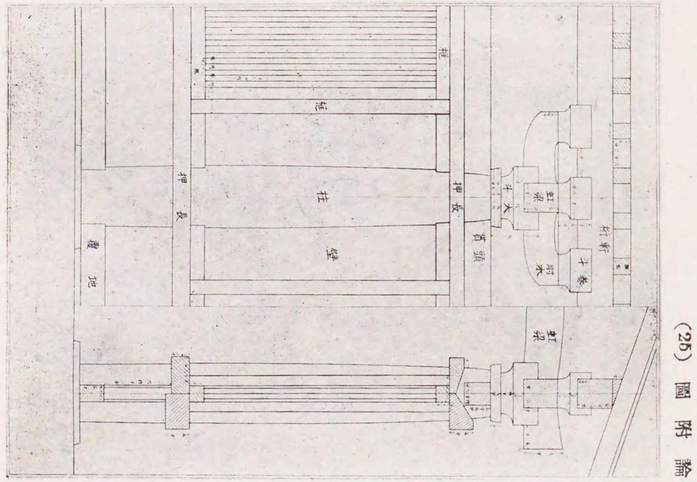
第四七圖　法隆寺金堂細部（內部）



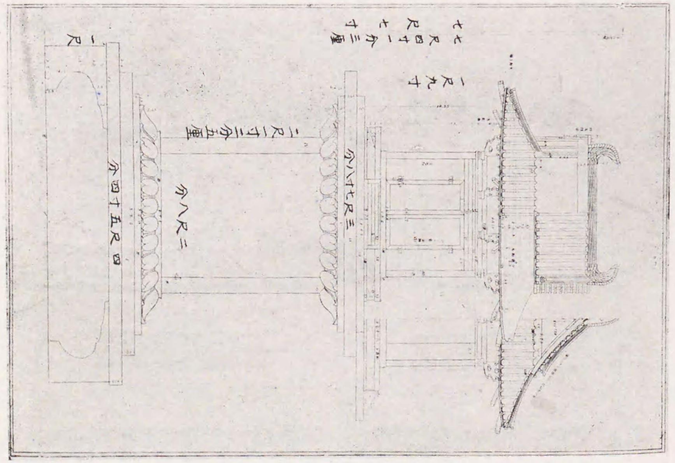
第四六圖　法隆寺金堂細部（勾欄）



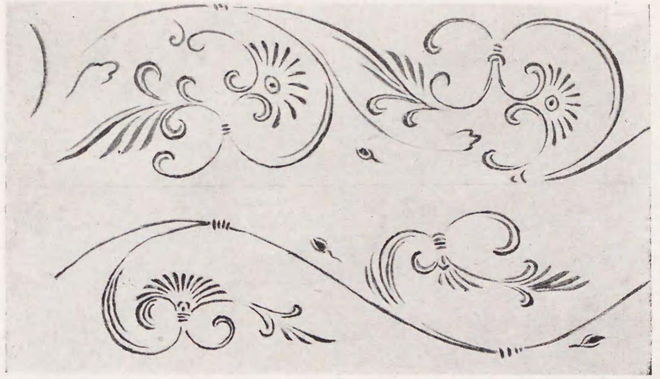
第四九圖　法隆寺玉蟲厨子



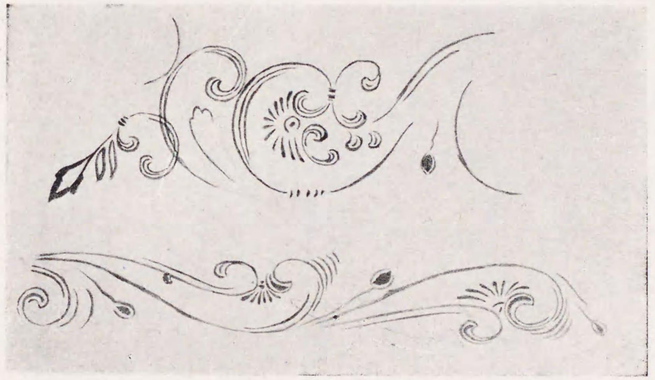
第四八圖　法隆寺廻廊外面及斷面圖



第五〇圖　法隆寺玉蟲厨子實測圖

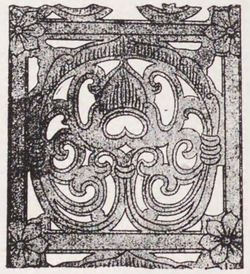


第五一圖(甲)
法隆寺玉蟲厨子密陀文様 (1)

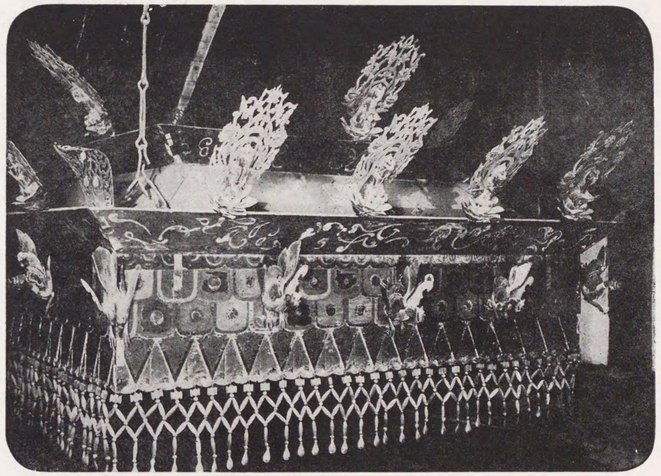


第五一圖(乙) 同 上 (2)

第五二圖 法隆寺玉蟲厨子飾金具



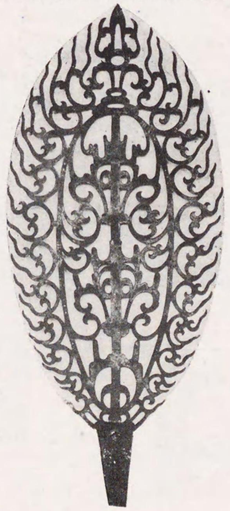
第五三圖
法隆寺玉蟲厨子飾金具七種



第五四圖　法隆寺金堂内天蓋

第五五圖

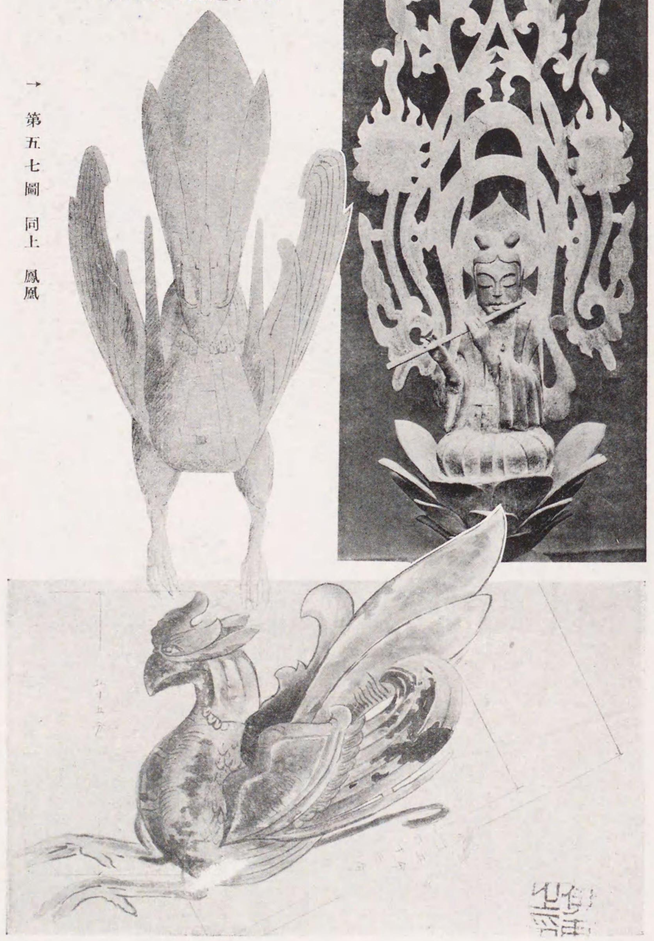
法隆寺金堂内天蓋飾金具

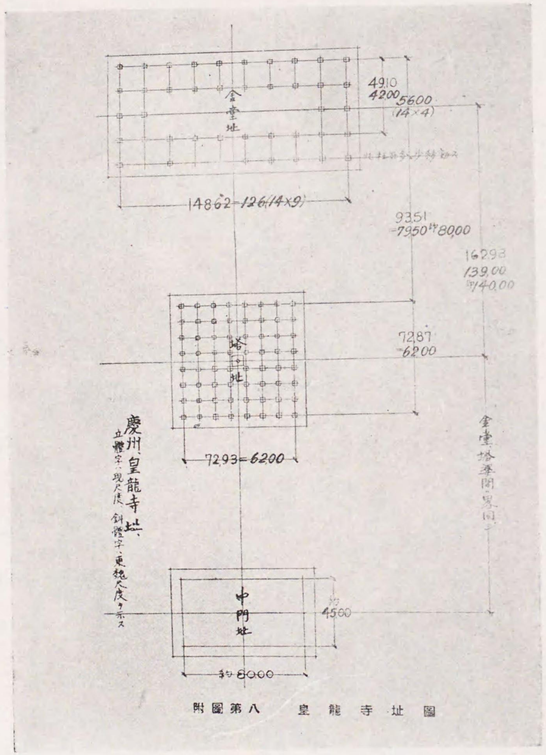


法隆寺金堂内天蓋飾金具

第五六圖　法隆寺金堂内天蓋裝飾天人

第五七圖　同上　鳳凰

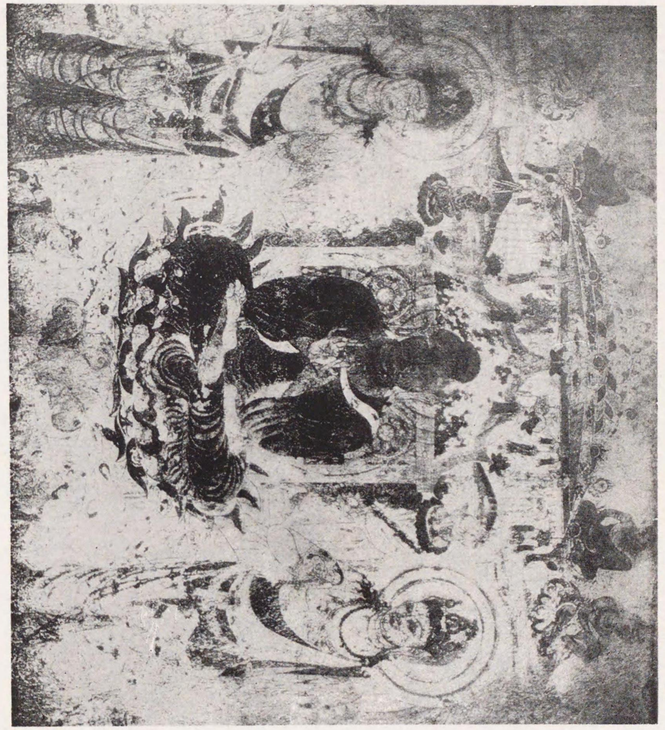




附圖第八　皇龍寺址圖

第五九圖　朝鮮慶州皇龍寺平面圖

第六〇圖　大和法隆寺玉蟲厨子通肘木忍冬文様



(30) 圖附論築建寺隆法

第五八圖

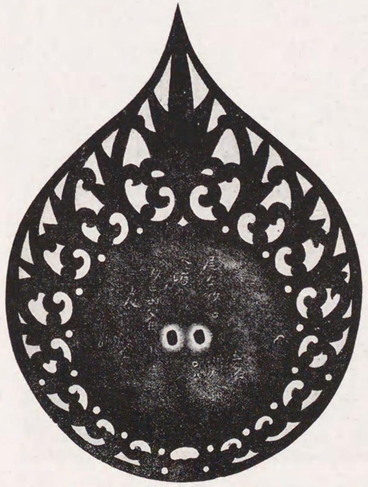
法隆寺金堂壁畫の一部

(上淨の陀彌阿方西)

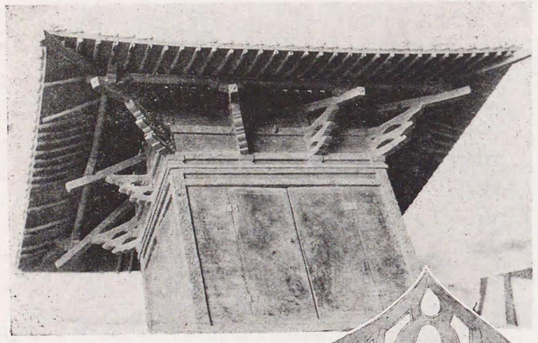
←

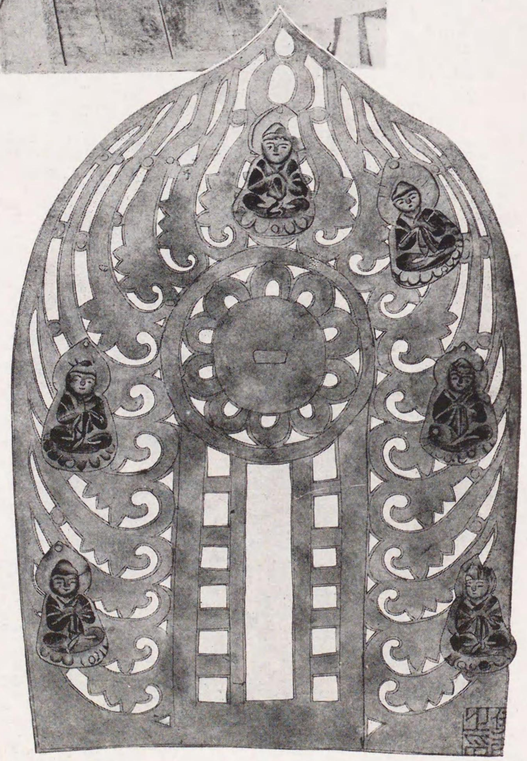
↑ 第六二圖　支那洛陽龍門石窟寺彫刻

→ 第六一圖　希臘土器（西紀前五乃至四世紀）



↑ 第六三圖　河內觀心寺佛像背光



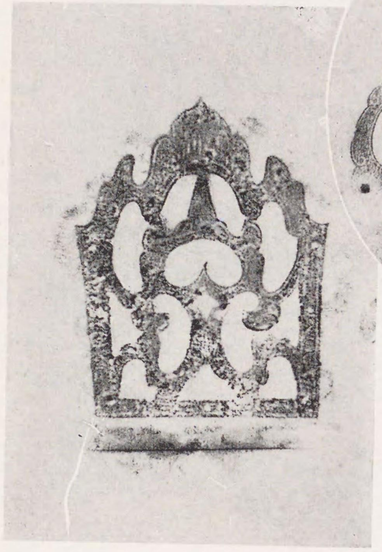


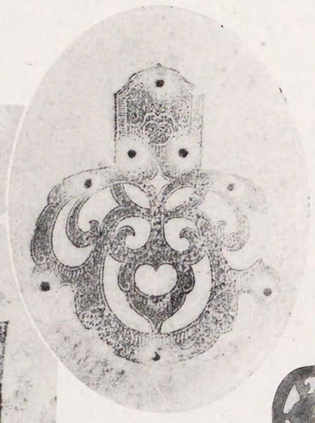
→ 第六四圖　大和法隆寺佛像背光

↑ 第六五圖　大和法隆寺玉蟲厨子枓栱

(4) 古代建築論附圖

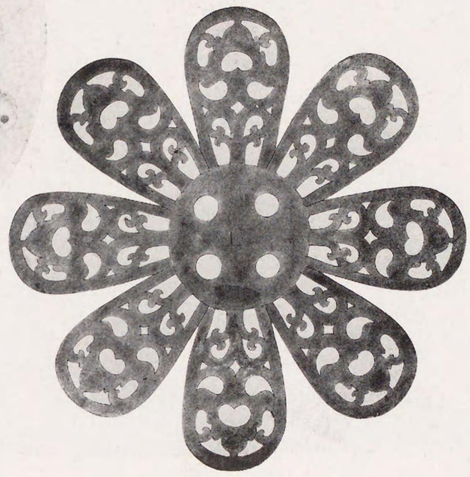
第六八圖　朝鮮扶餘古墳出土金具 ↓





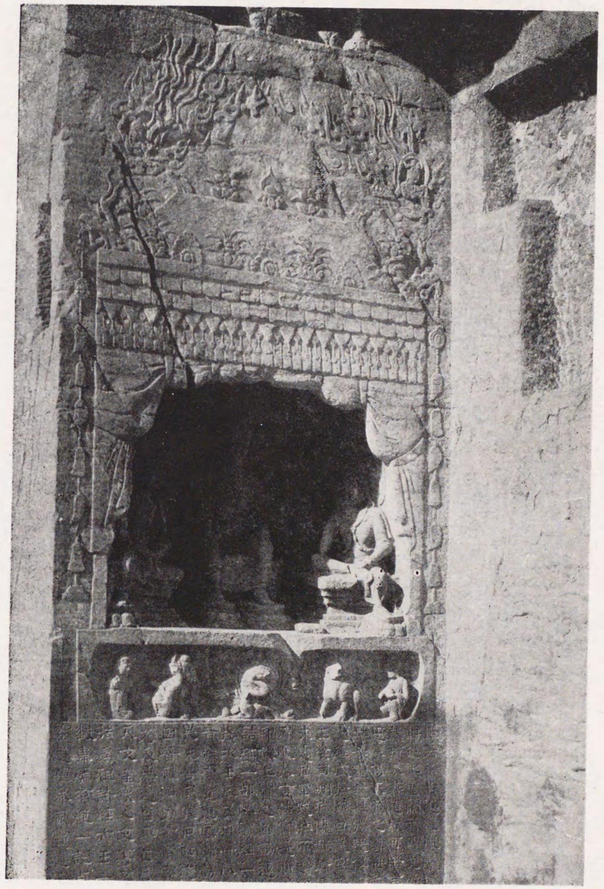
第六七圖 ↑
上野青梨子
古墳出土金具

第六六圖 ↓
大和法隆寺佛像背光



(5) 古代建築論附圖

第六九圖　大和法隆寺佛像背光



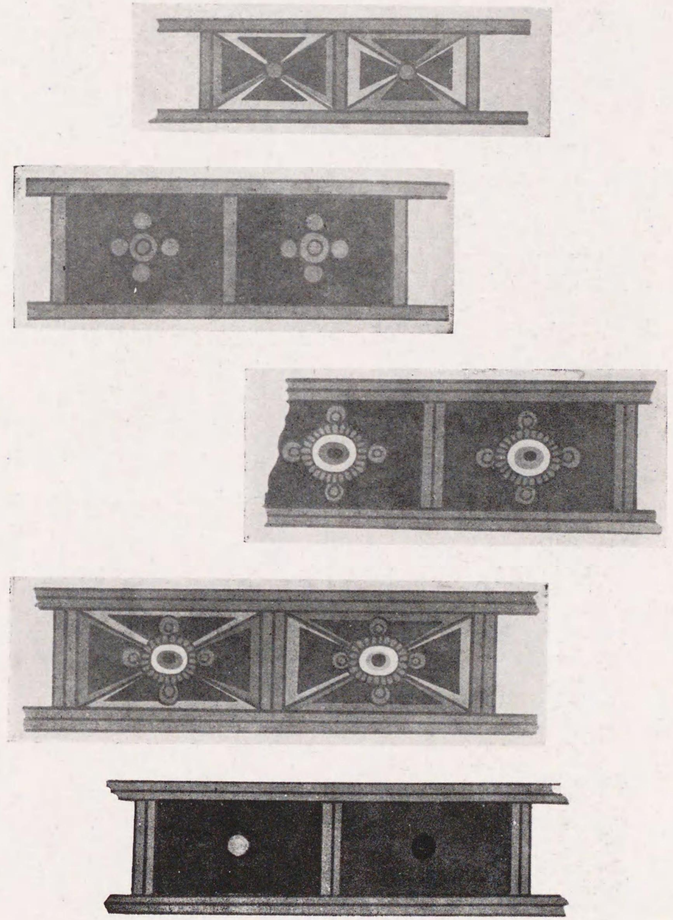
第七〇圖　支那河南省北嶝堂山第一窟彫刻

第七一圖

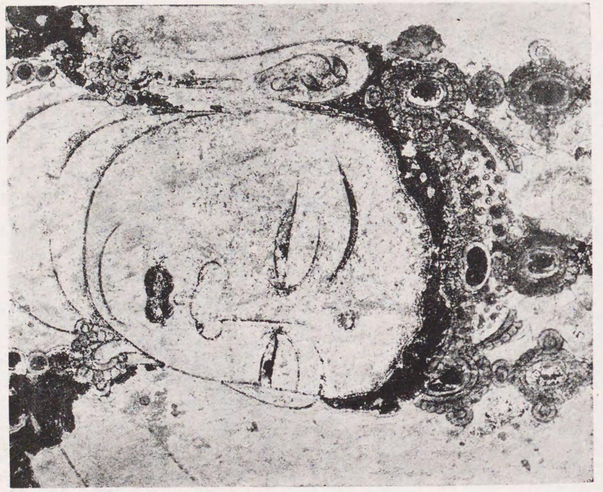
大和法隆寺金堂壁畫忍冬文

第七二圖

大和法隆寺金堂壁畫寶飾文



第七三圖　大和法隆寺金堂壁畫臺座文

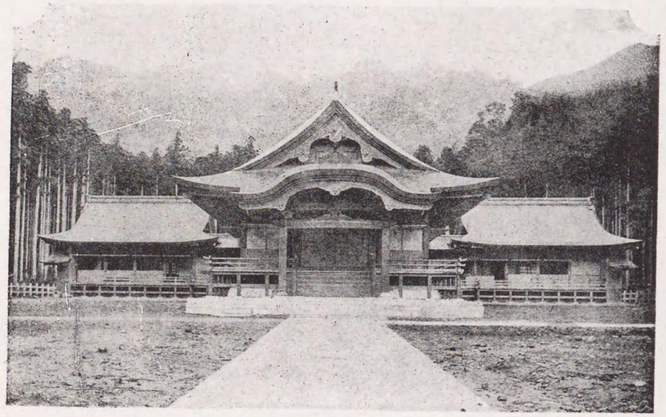


(1) 侍脇の土淨陀彌阿方西畫壁堂金寺隆法和大　圖四七第

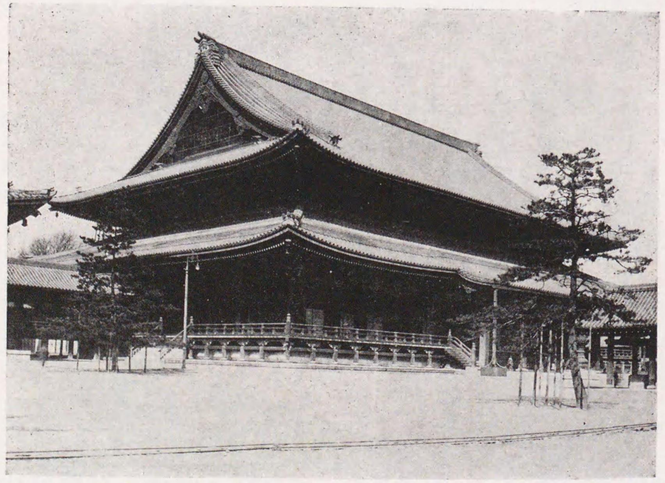
(2) 子女のゾベズウ方地坦斯共耳土　圖五七第

(1) 侍脇の土淨陀彌阿方西畫壁堂金寺際法和大　圖六七第

(2) 子女のアベヅウ方地坦斯其耳上　圖七七第



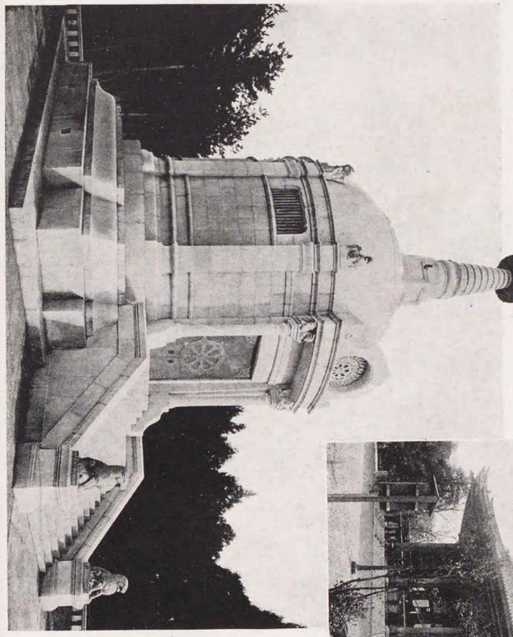
第七八圖　越後彌彥神社

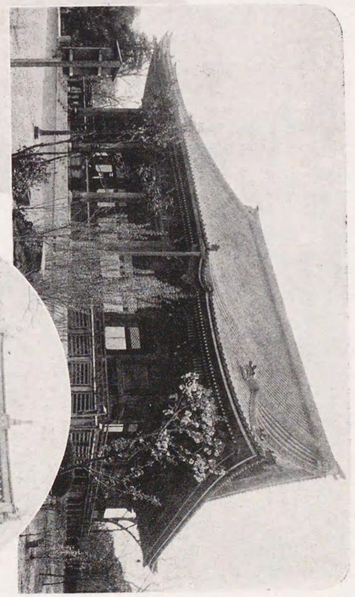


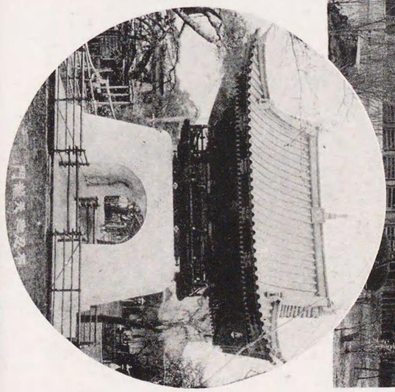
第七九圖　京都東本願寺祖師堂

(2) 圖附史築建の降以治明

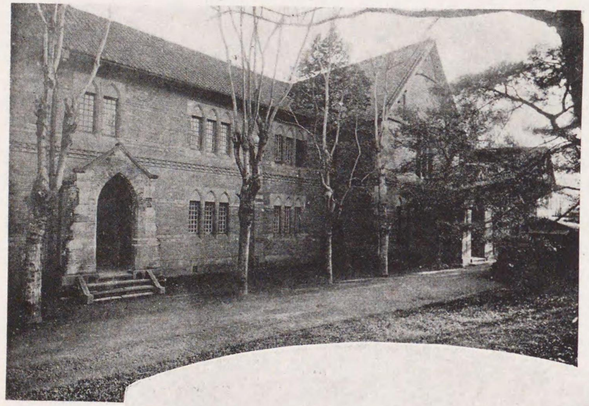
殿大寺上增　京　東　圖一八第（上）
殿教聖の寺經華法　山中總下　圖二八第（左下）
京　東　圖〇八第（右下）
門龍天天辨忍不







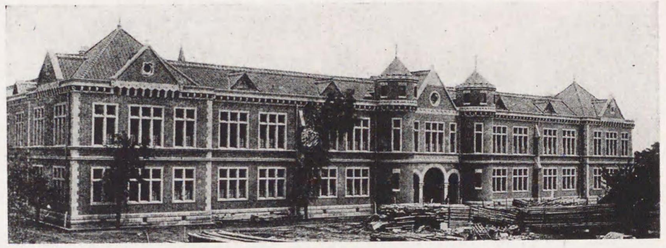
(3) 圖附史築建の降以治明
（築建の代時植移）



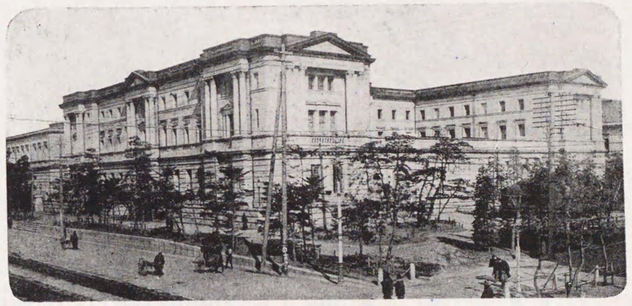
← 第八三圖
東京虎之門　舊工部大學校

→ 第八四圖
東京　舊新橋停車場

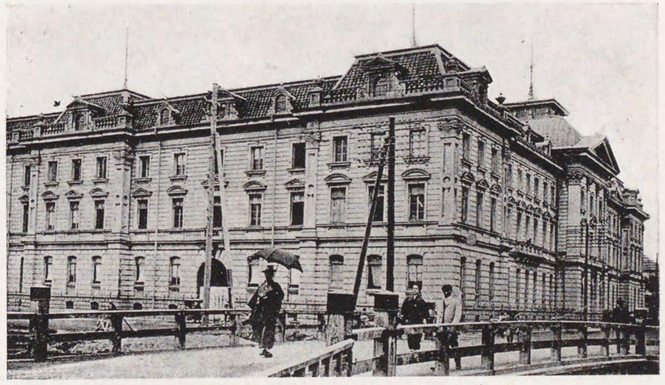
第八五圖 ↓
東京　舊東京帝室博物館本館



第八六圖　舊東京帝國大學工科大學本館

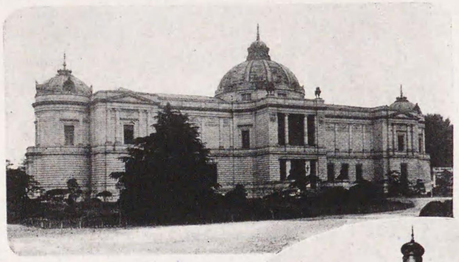


第八七圖　東京　日本銀行



第八八圖　東京　舊農商務省

第九〇圖　↑
東京　赤坂離宮
（代時倣模）



第九八圖　←
東京帝室博物館
表慶館
（代時倣模）

第九一圖　一
東京　舊萬世橋驛

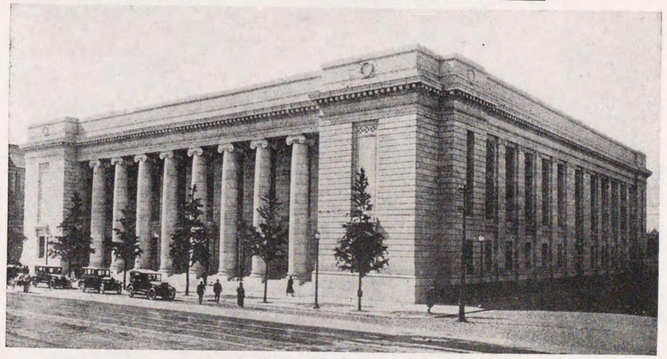
第九二圖　↓
東京　驛

（疊醒時代の建築）　↑

第九三圖　東京　海上ビルディング

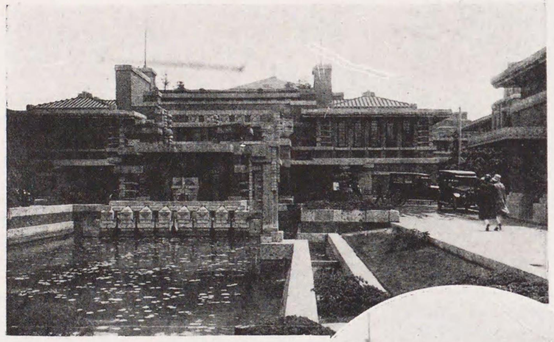
（思索時代の建築　1）

第九五圖　東京　中央電信局



第九四圖　東京三菱銀行

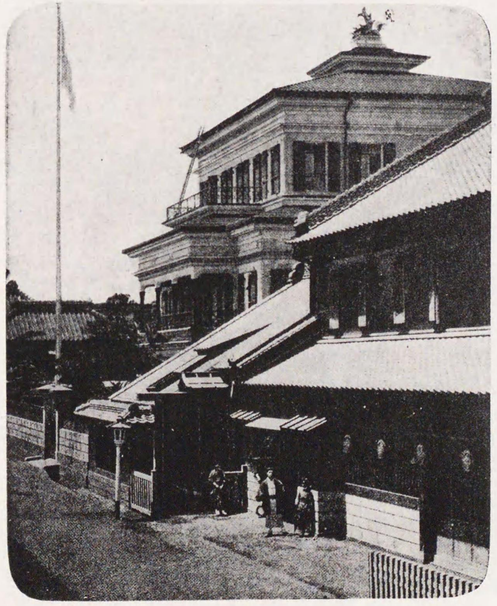
（思索時代の建築　2）



第九六圖　↑
東京　帝國ホテル正面

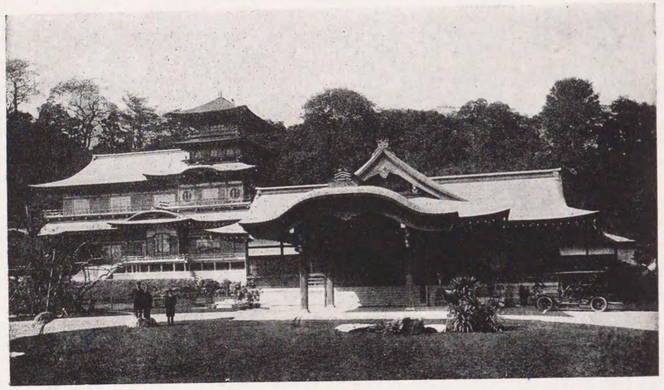
第九七圖　→
東京　東京朝日新聞社

第九八圖　↓
東京　明治神宮外苑
聖徳記念繪畫館

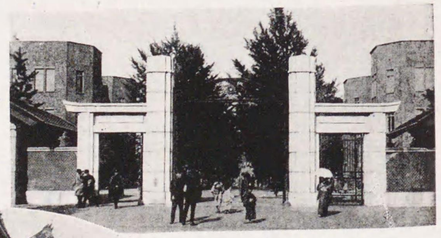


第九九圖　東京　明治初期の第一銀行
第一〇〇圖　東京　明治初期の三井銀行
（折衷樣式の建築物　1）

↑　第九九圖
←　第一〇〇圖



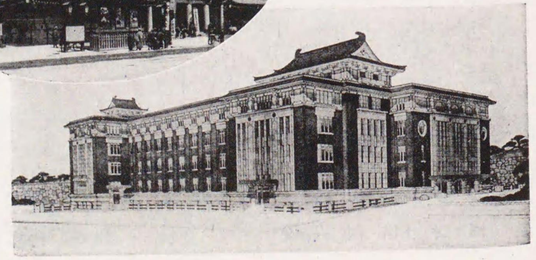
↑　第一〇一圖
東京　淺野總一郎氏邸



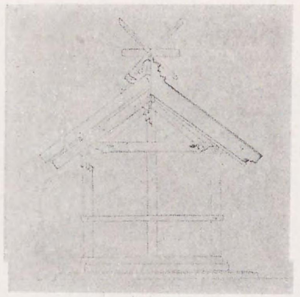
←　第一〇二圖
東京帝國大學正門

←　第一〇三圖
東京　歌舞伎座

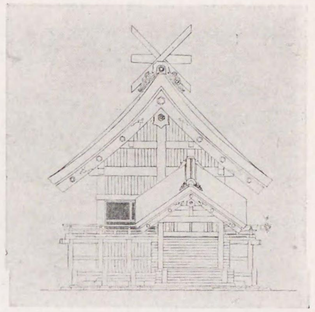
↓　第一〇四圖
東京九段下　軍人會館
（一等當選圖案）



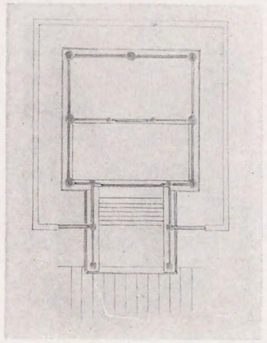
（折衷樣式の建築　2）



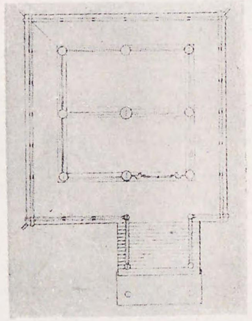
第一〇八圖
和泉　大鳥神社本殿背面及斷面圖



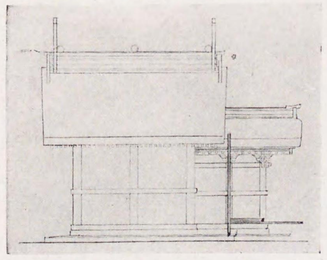
第一〇五圖
出雲神社本殿正面圖



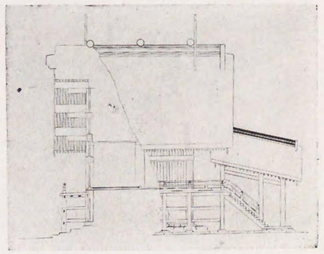
第一〇九圖　同上　平面圖



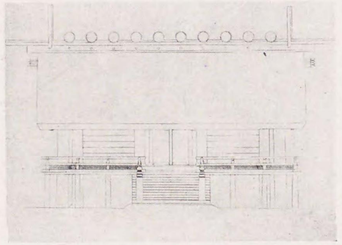
第一〇六圖　同上　平面圖



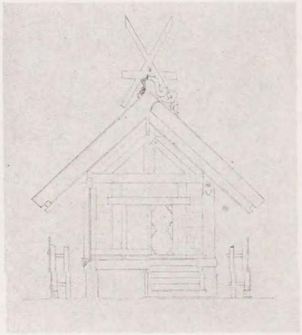
第一一〇圖　同上　側面圖



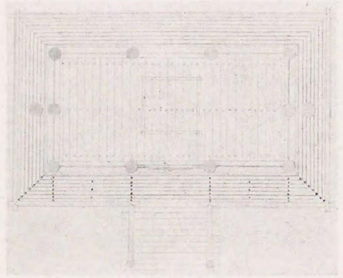
第一〇七圖　同上　斷面圖



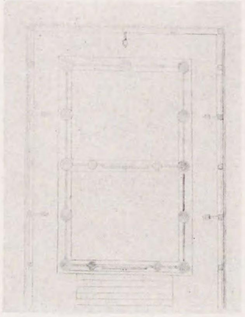
第一一四圖　唯一神明造正殿正面圖



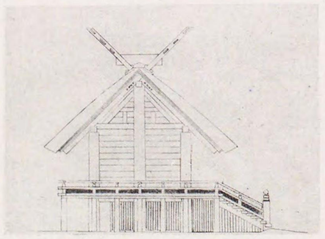
第一一一圖　大阪　住吉神社本殿正面圖



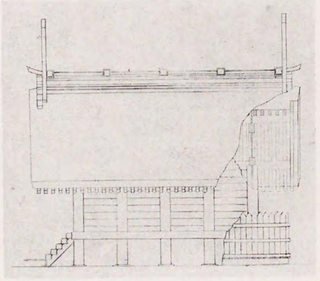
第一一五圖　同上　平面圖



第一一二圖　同上　平面圖

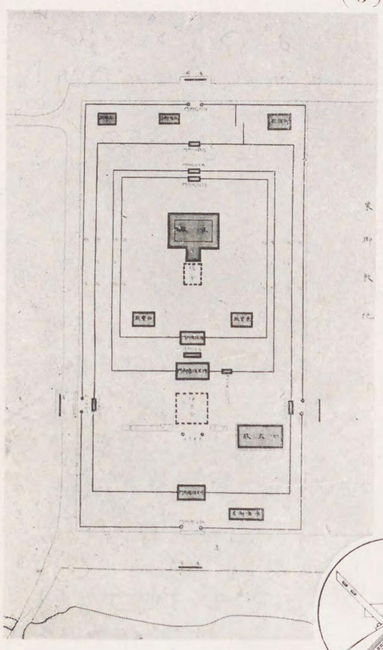


第一一六圖　同上　側面圖

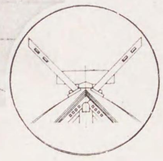


第一一三圖　同上　側面圖

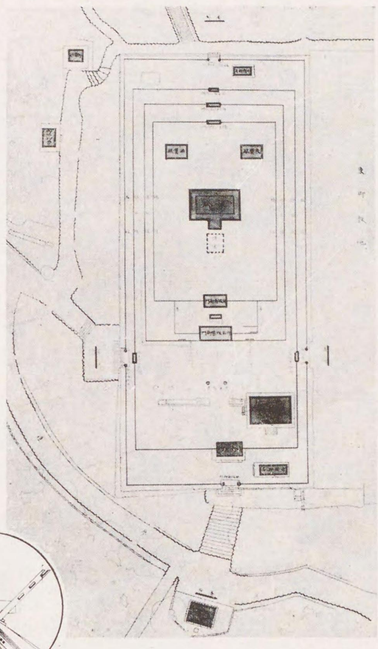
(3) 圖附達發の築建社神



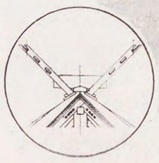
第一一七圖　伊勢神宮外宮平面圖



第一一八圖　同上　千木



第一一九圖　伊勢神宮內宮平面圖

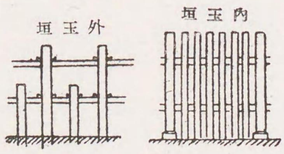


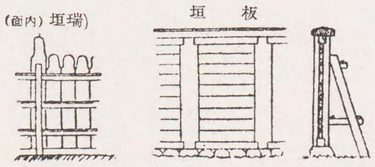
第一二〇圖　同上　千木

(4) 圖附達發の築建社神

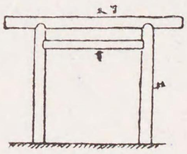
第一二二二圖

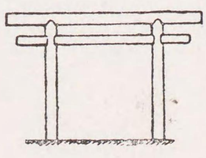
伊勢神宮門垣

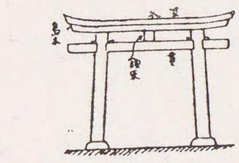


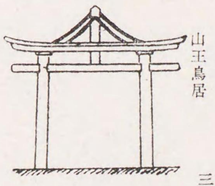


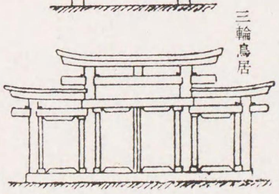
第一二一圖







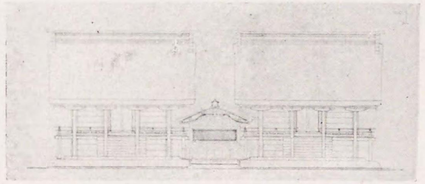


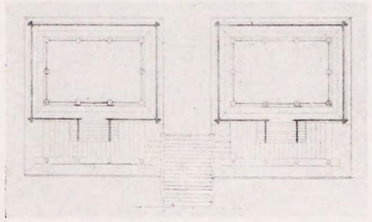


第一二三圖 →

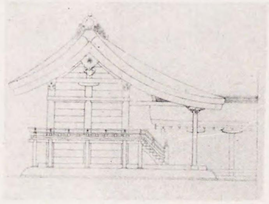
都京　賀茂御祖神社

圖面正殿權及殿本





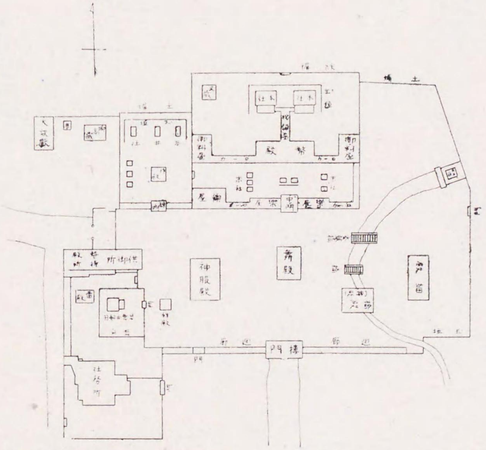
第一二四圖　同上　圖面半



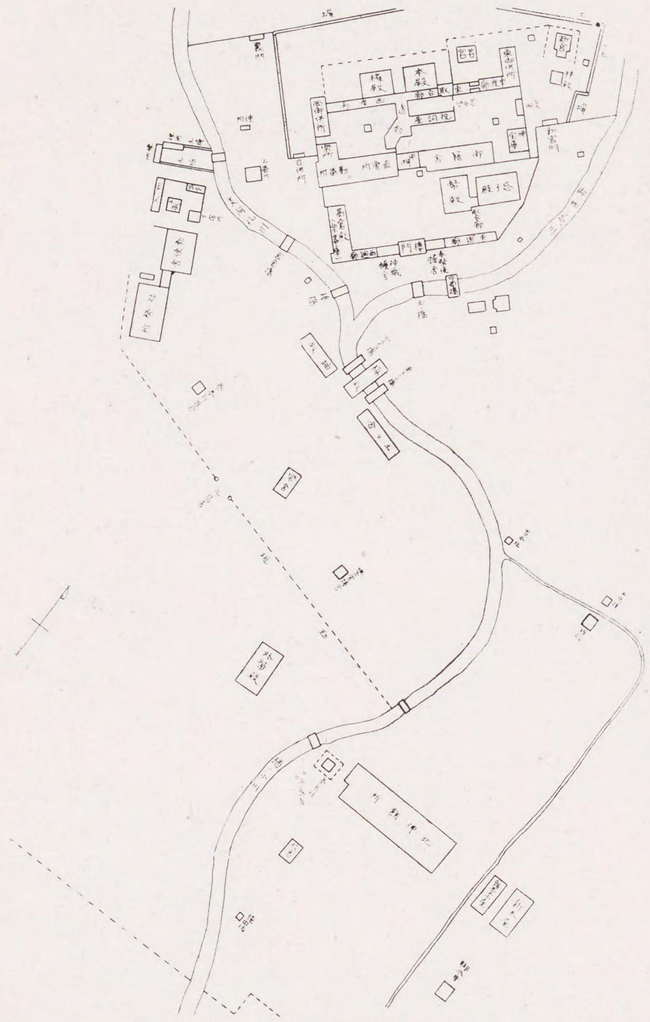
第一二五圖　同上　圖面側

第一二六圖

賀茂御祖神社配置圖

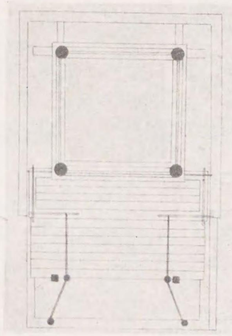


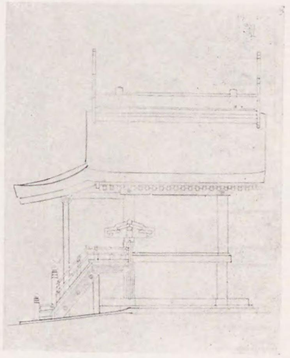
第一二七圖　京都賀茂別雷神社配置圖



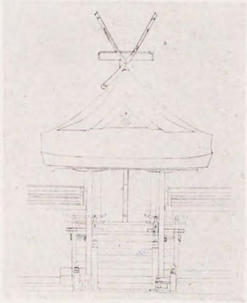
第一二九圖　奈良　春日神社本殿

平面圖



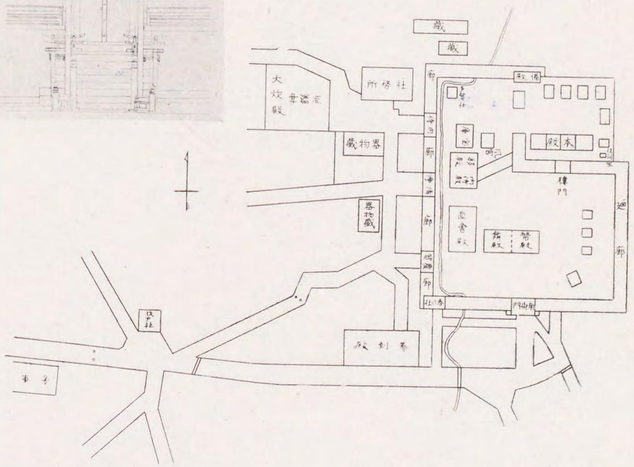


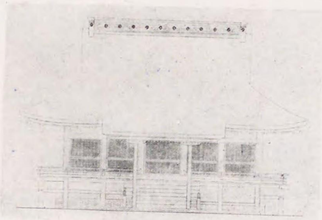
圖八二一第
圖面側殿本社神日春　良奈



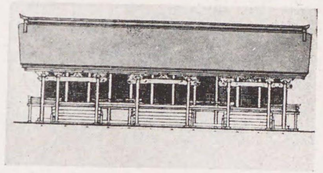
← 圖面正　上同　圖〇三一第

圖置配　上同　圖一三一第　↓

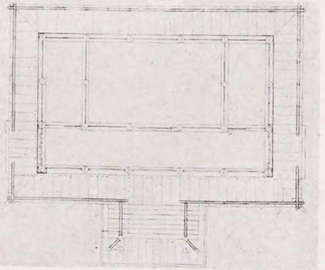

藏
藏
社務所
太鼓樓
鐘樓
經藏
回廊
殿本
殿本
殿本



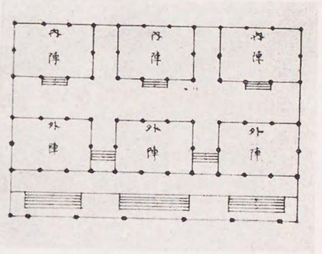
圖〇四一第
圖面正殿本社神吉日　江近



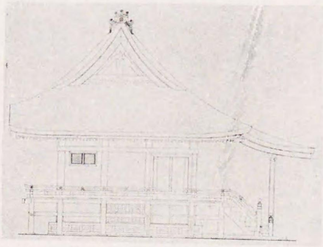
圖七三一第
圖面正殿本宮幡八水清石　城山



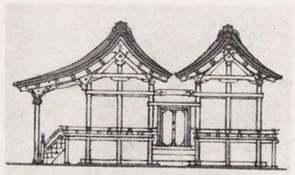
圖一四一第
圖　面　平　上　同



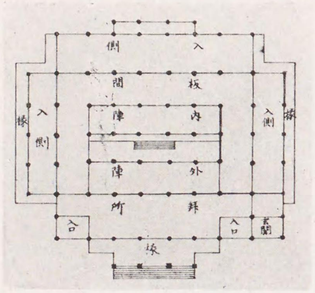
圖八三一第
圖　面　平　上　同



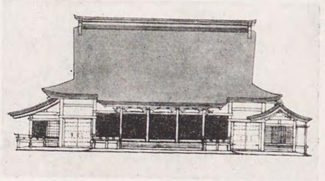
圖二四一第
圖　面　側　上　同



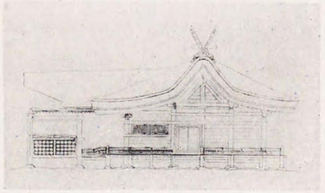
圖九三一第
圖　面　側　上　同



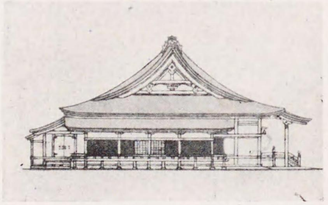
圖面平　上同　圖四四一第



圖三四一第
圖面正殿本社神坂八　都京

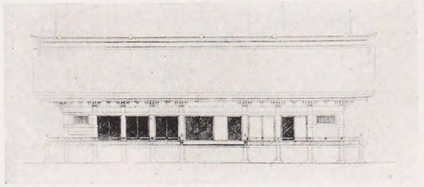


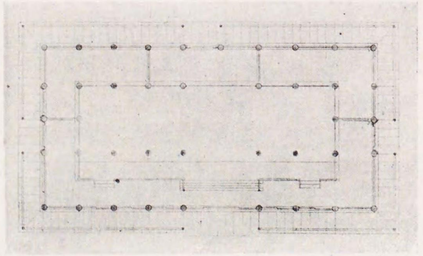
圖面側　上同　圖八四一第



圖面側　上同　圖五四一第

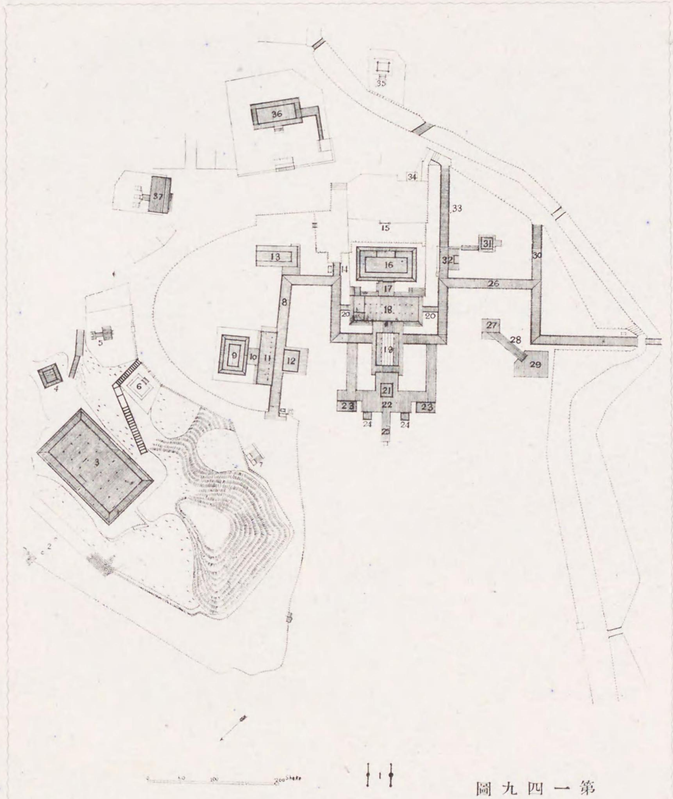
圖六四一第　一
殿本社神島嚴　藝安





←　圖七四一第

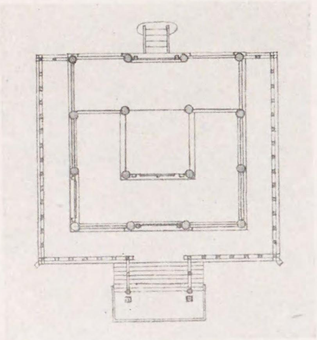
圖　面　平　上　同



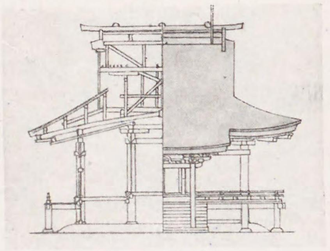
第一四九圖

嚴島神社配置圖

1	大鳥居	9	客神社本殿	17	幣殿	25	舌先	33	長橋
2	石鳥居	10	客神社幣殿	18	拜殿	26	西廻廊	34	能衣裳庫
3	千疊閣	11	客神社拜殿	19	祓殿	27	能舞臺	35	寶庫
4	五重塔	12	客神社祓殿	20	內侍橋	28	橋掛り	36	寶物館
5	荒胡子神社	13	朝座屋	21	高舞臺	29	能樂屋	37	三翁神社
6	文庫	14	揚水橋	22	平舞臺	30	反橋		
7	蹴	15	不明門	23	樂房(二ケ所)	31	天神社		
8	東廻廊	16	本殿	24	門客神社(二ケ所)	32	大國社		

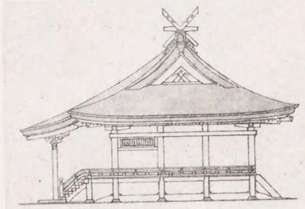


第一五一圖 上同 平面圖



第一五〇圖

近江 御上神社本殿正面及斷面



第一五二圖 上同 側面圖

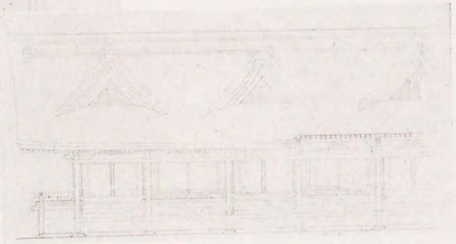
第一五五圖 ↑

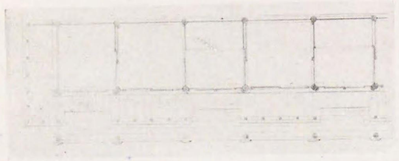
長門住吉神社

側面圖

第一五三圖 →

長門住吉神社本殿正面圖

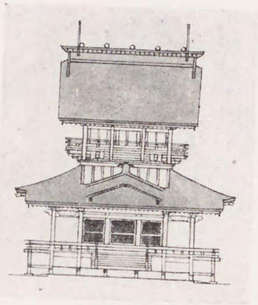




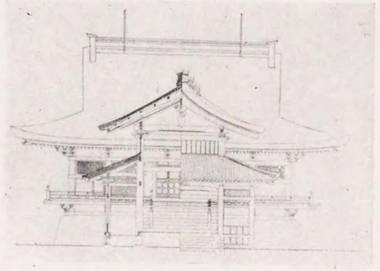
第一五四圖 ←

上同

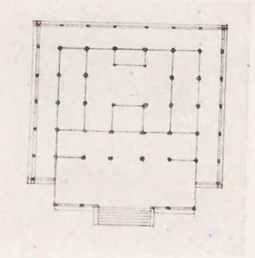
平面圖



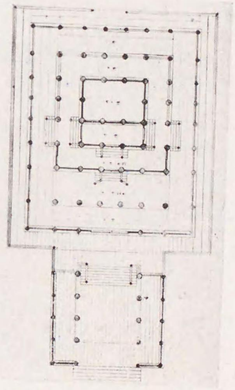
圖九五一第
殿本社神間淺　河駿
圖　面　正



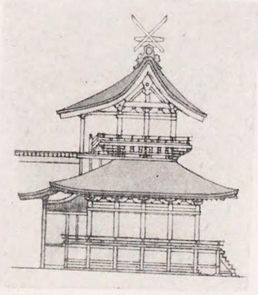
圖六五一第
圖面正殿本社神津備吉　中備



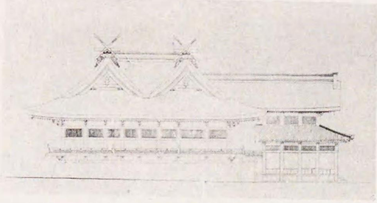
圖面平　上同　圖〇六一第



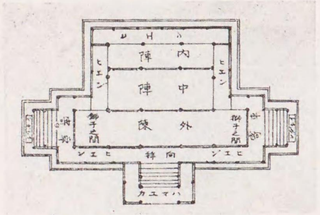
圖面平　上同　圖七五一第



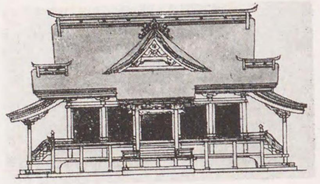
圖面側　上同　圖一六一第



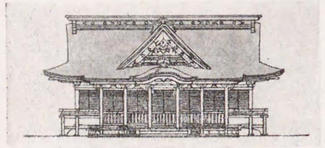
圖面側　上同　圖八五一第



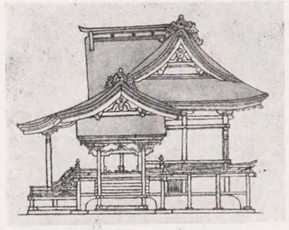
圖面平　上同　圖三六一第



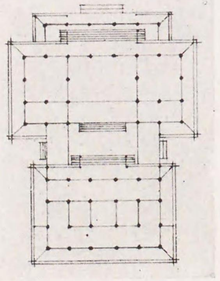
圖二六一第
圖面正殿本宮椎香　前筑



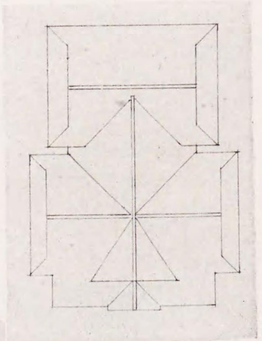
殿本宮幡八崎大　臺仙　圖五六一第
圖　面　正



圖面側　上同　圖四六一第

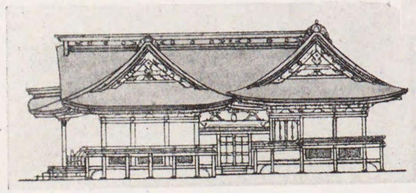


圖面平　上同　圖六六一第

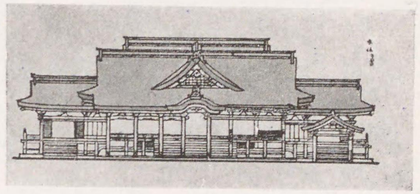


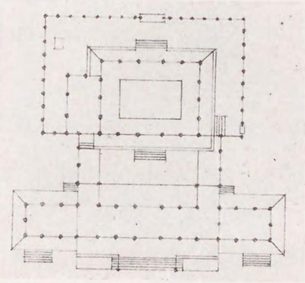
圖七六一第　↑
圖伏根屋　上同

←　圖八六一第
圖　面　側　上同



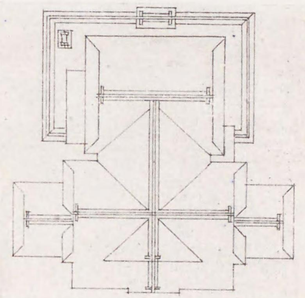
圖〇七一第 ↓
圖面平上同

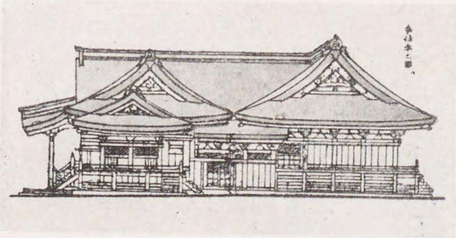




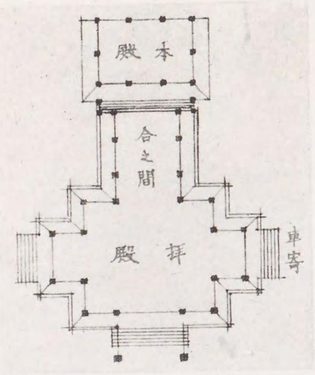
圖一七一第 →
圖伏根屋上同

第一六九圖 ↑
京都北野神社本殿正面圖

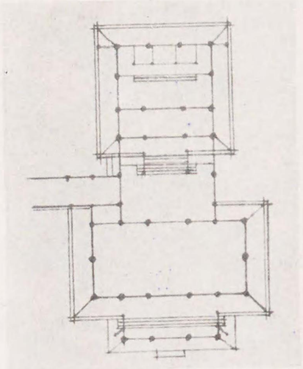




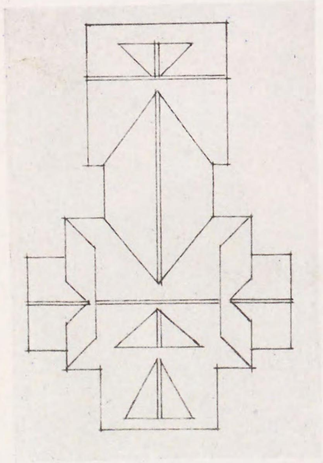
← 第一七二圖
圖面側上同



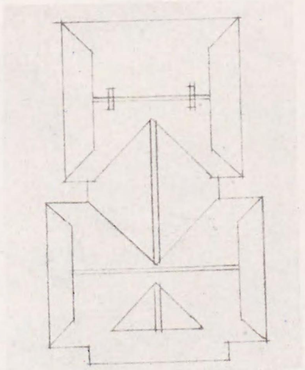
第一七五圖
東京 龜戸神社神々殿平面圖



第一七三圖
駿河 久能山東照宮社殿平面圖



第一七六圖
圖伏根屋上同



第一七四圖
圖伏根屋上同

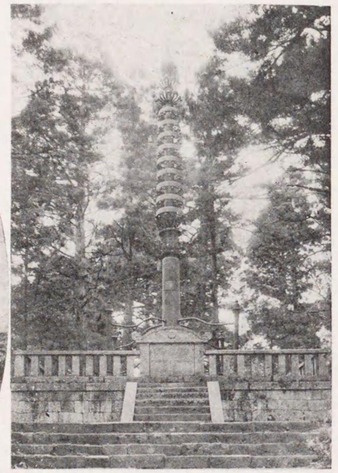
第一七八圖　大和　法起寺三重塔

第一七七圖　大和　法輪寺三重塔

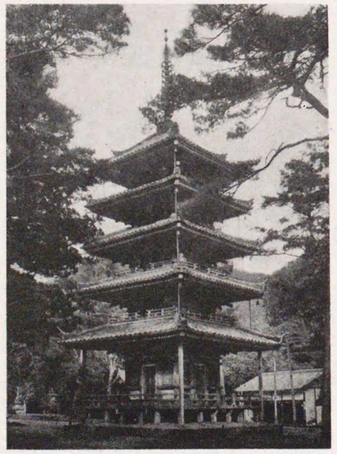
第一八〇圖　大和　當麻寺西塔

第一七九圖　大和　當麻寺東塔

第一八二圖　山城　醍醐寺五重塔



第一八一圖　山城　延曆寺相輪檔



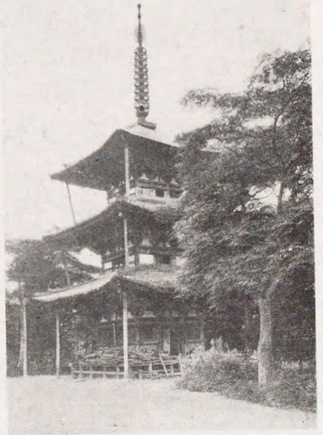
第一八四圖　山城　海住山寺五重塔

第一八三圖　奈良　興福寺三重塔

第一八六圖　城山　淨瑠璃寺三重塔

第一八五圖　大和　鑁山寺三重塔

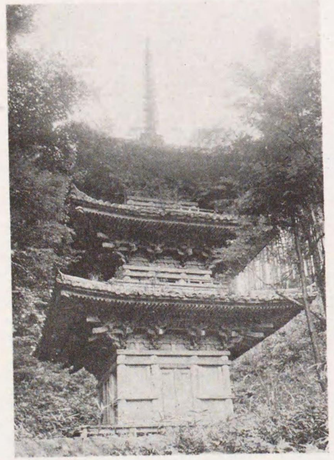
第一八八圖　近江　西明寺三重塔



第一八七圖　大和　百濟寺三重塔

第一九〇圖　信濃　安樂寺八角四重塔

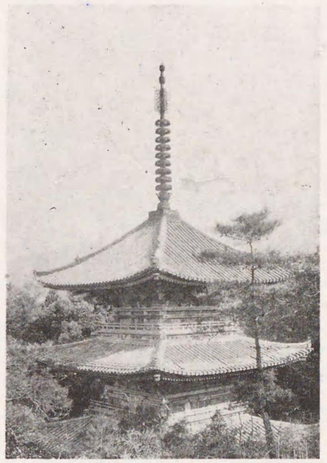
第一八九圖　信濃　大法寺三重塔



第一九二圖　山城　岩船寺三重塔

第一九一圖　備後　明王院五重塔

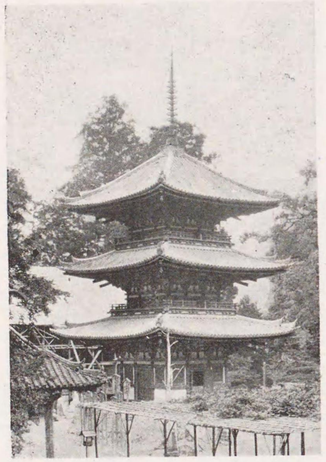
第一九四圖　防周　瑠璃光寺五重塔



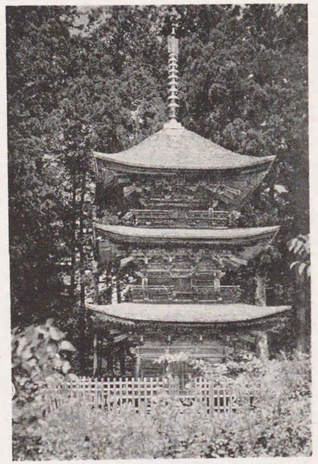
第一九三圖　近江　常樂寺三重塔

第一九六圖　備後　西國寺三重塔

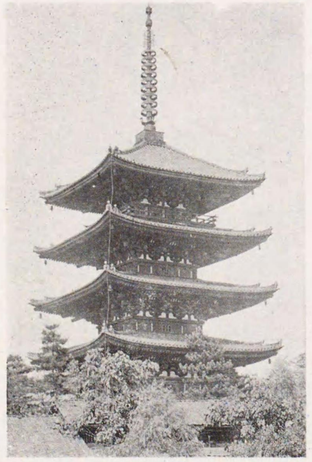
第一九五圖　奈良　興福寺五重塔



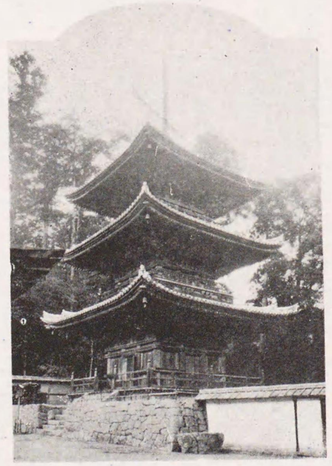
第一九八圖　大和　南華寺三重塔



第一九七圖　京都　法觀寺三重塔

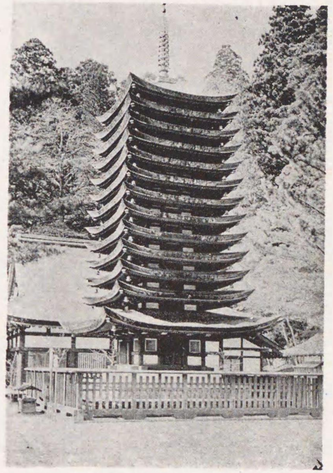


第二〇〇圖　信濃　新海三社三重塔

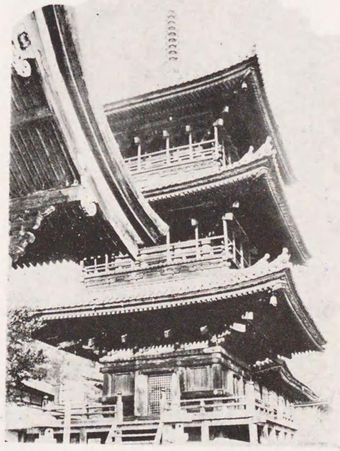


第一九九圖　近江　園城寺三重塔

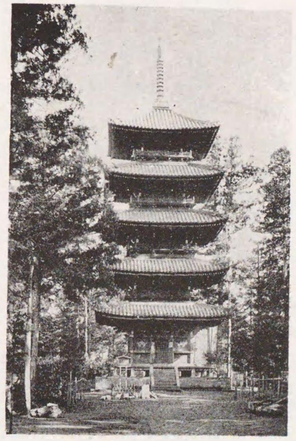
第二〇二圖　安藝　嚴島神社五重塔



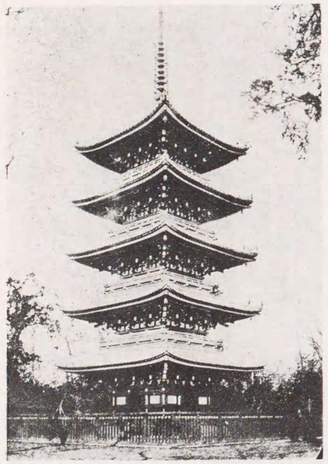
第二〇一圖　大和　談山神社十三重塔



第二〇四圖　京都　清水寺三重塔



第二〇三圖　武藏　本門寺五重塔



第二〇六圖　東京　寛永寺五重塔

第二〇五圖　↓

京都東寺五重塔

第二〇七圖　←

京都　仁和寺五重塔

第二〇九圖　弘前　最勝院五重塔

第二〇八圖　東京　淺草寺五重塔

第二一一圖　大阪　四天王寺五重塔

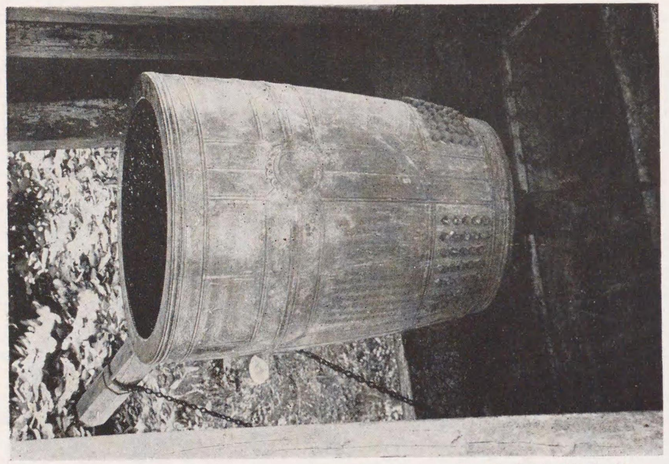
第二一〇圖　東京　天王寺五重塔

第二三圖　奈良　般若寺十三重塔

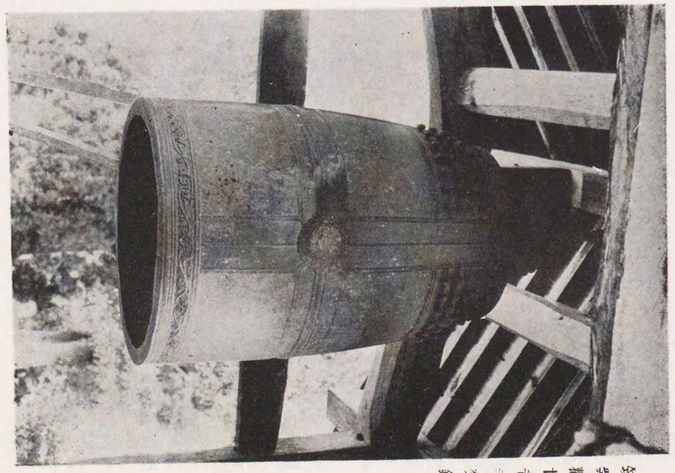
第二一二圖　下野　日光東照宮五重塔

第二一四圖　東京　寶仙寺三重塔

(1) 圖補說鐘梵邦本



鎌倉建長寺梵鐘



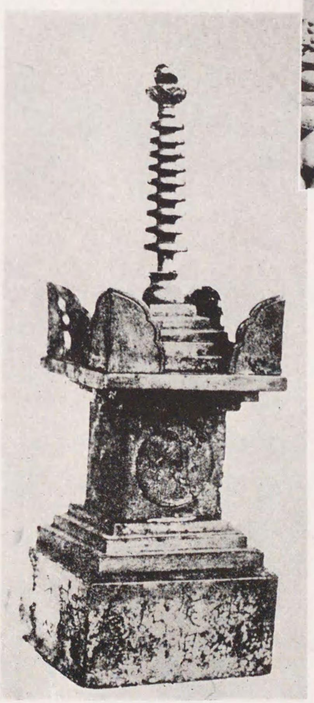
筑紫觀世音寺梵鐘

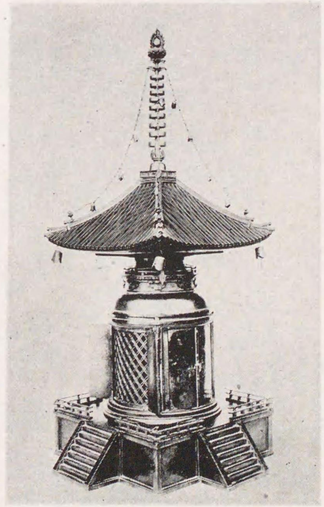
(11) 日本佛塔建築の沿革附圖

→ 第二一五圖 近江 石塔寺の塔

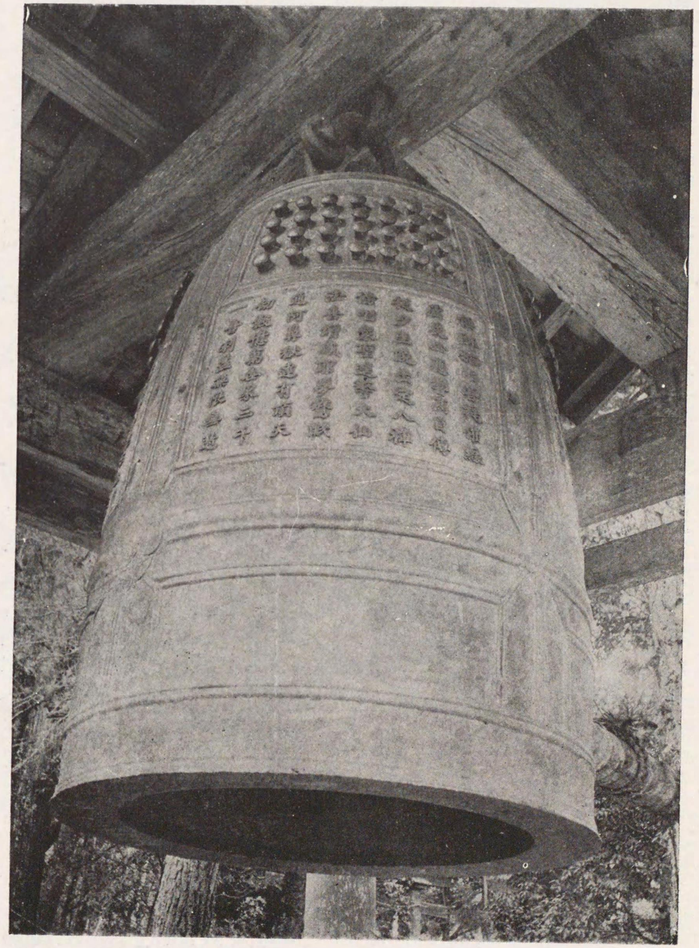
第二一七圖 奈良 西大寺鐵塔 ↘

第二一六圖 紀伊 高野山寶筐印塔 ↓





本邦梵鐘說補圖（2）



道澄寺梵鐘（在大和榮山寺）

凡例

一、本書上下二卷は、曩に伊東忠太建築文獻編纂會に於て編纂せられ「伊東忠太建築文獻」（全六卷）の名を以て同好者に頒布せるものであるが、今回版を新たにして一般の需に應ずることとした。

因に、伊東忠太建築文獻編纂會の發起人並に編纂員は左の諸氏であつた。

發起人

醫學博士	入澤達吉	文學博士	服部宇之吉
	門野重九郎	工學博士	片岡安
工學博士	塚本靖	文學博士	黑板勝美
	結城豐太郎	文學博士	三上參次
文學博士	常盤大定	工學博士	武田五一
	正木直彥		

編纂員

工學博士	大岡實	工學博士	田邊泰
工學博士	足立康		木村貞吉
工學博士	藤島亥治郎		

一、本書收錄の文獻は、明治二十六年以來の發表にかゝる舊稿であるから、文體自ら同調ならざる憾はあるが

已むを得ざるもの二三の他は、字句の修正に止めて、なるべく舊態を失はしめぬこととした。

一、本卷（日本建築の研究上）は卽ち日本建築史に關する論文中、主なる總論的のもの八篇を收載し、主として之を時代順に排列した。

但し、「本邦梵鐘說」は建築論の外に屬するが、學位論文「法隆寺建築論」の參考論文として提出せるものであるから、之に同種の論文二篇を副て、特に本卷に載錄することとした。

一、本書の圖版は、なるべく原文附圖をそのまゝ揭載したい希望であつたが、發表後長年月を經過して原圖再錄不能となり、文は、本書編纂に方つて新に追加收載せる等の關係より、必ずしも原文附圖と同一でないことを諒とせられたい。

一、本書の圖版番號は、口繪たると本文中の插畫たるとを問はず、一貫せる通番號を附したので、本文記載の（第○圖參照）にしてその卷所載の番號外のものは他卷を參照せられたい。

但し、編纂後必要あつて追加せる圖版には、例へば圖版「イ、ロ」の如く特殊の番號を附しておいた。

一、本卷所載の「法隆寺建築論」に關しては「古代建築論」を參照せられたい。

昭和十七年三月

日本建築の研究（上）目次

法隆寺建築論　（一―一九二）

緒　言……一
第一編　建築界に於ける法隆寺の位置……五
第二編　法隆寺の沿革……三
第一　創立の年代……三
第二　和銅再建說……四
第三　爾後の經過……七
第四　元祿年間に於ける大修繕……九
第三編　法隆寺の建築的性質……元
（一）七堂伽藍の說……元
（二）建築の配置……四一
（三）建築の形式及び構造……四五
第四編　中門建築說……四八

◇圖版目錄◇　自一圖　至三七圖
一圖　出雲大社正殿
二圖　大和法隆寺金堂
三圖　大和藥師寺三重塔
四圖　奈良唐招提寺金堂
五圖　大和室生寺五重塔
六圖　山城宇治平等院鳳凰堂
七圖　近江石山寺多寶塔
八圖　京都鹿苑寺金閣
九圖　名古屋城天守
一〇圖　下野日光東照宮唐門
一一圖　明治神宮正殿
一二圖　東京震災記念堂
（以上玻璃版口圖）
一三圖　大和法隆寺伽藍古平面

緒言……四八
一　歴史的考證……四九
二　プラン……五〇
三　エレヴェーション……五一
四　プロポーション……五二
五　垂木の制……五四
六　構架式……五五
七　雲斗、枅肘木及び雲肘木……五七
八　軒廻及び屋根……五九
九　柱制及び其のエンタシス……六一
一〇　破風……六二
一一　欄及び支柱……六三
一二　妻飾……六三
一三　結論……六四
第五編　塔婆建築說……六五
緒言……六五
一　歴史的考證……六五
二　プラン……七一
三　垂木の制……七三
四　エレヴェーション……七五

圖
一四圖　同上現在平面圖
一五圖　同上中央部平面復原想像圖
一六圖　同上現在中央部平面圖
一七圖　講堂より見たる法隆寺金堂・中門・五重塔
一八圖　法隆寺中門正面圖
一九圖　同上平面圖
二〇圖　同上側面圖
二一圖　法隆寺中門と京都南禪寺三門との比較圖
二二圖（甲）法隆寺中門縱斷面圖
二三圖（乙）同上橫斷面圖
二四圖　同上全景
二五圖　同上細部
二六圖　同上下層細部（枓栱）
二七圖　同上上層細部（枓栱）

五　プロポーション……六六
六　構架式……六七
七　內外の裝飾……六七
八　雲形肘木……八〇
九　高欄割……八〇
一〇　九輪……八二
一一　屋蓋……八四
一二　力士及びアトランテス……八六
一三　結論……八七
第六編　金堂建築說……八八
緒言……八八
一　歴史的考證……八九
二　プラン……八九
三　エレヴェーション……九一
四　プロポーション……九二
五　垂木の制……九三
六　構架式……九四
七　內外裝飾……九五
八　雲斗及び雲肘木……九六
九　柱制及び其のエンタシス……九七

二八圖　肘木六種
二九圖　法隆寺中門上層細部
三〇圖　法隆寺五重塔平面圖
三一圖　同上立面圖
三二圖　同上全景
三三圖　同上九輪
三四圖　同上斷面圖
三五圖　同上相輪
三六圖　同上相輪細部
三七圖　同上各層細部
三八圖　法隆寺金堂平面圖
三九圖　同上前面圖
四〇圖　同上側面圖
四一圖　同上縱斷面圖
四二圖　同上橫斷面圖
四三圖　同上全景
四四圖　同上細部（枓栱）
四五圖　同上細部（肘木）

一〇 軒廻及び屋蓋……九八
一一 破風……九九
一二 鉤欄及び支柱……一〇〇
一三 妻飾……一〇一
一四 結論……一〇一
第七編 金堂内部……一〇一
緒言……一〇一
第一章 玉蟲厨子……一〇一
緒言……一〇一
一 總説……一〇四
二 プラン及びエレヴェーション……一〇五
三 土壇……一〇七
四 柱及び大斗……一〇七
五 雲形肘木……一〇八
六 尾垂木及び丸桁、丸桁受肘木……一〇八
七 軒及び垂木……一〇九
八 屋蓋……一〇九
九 妻飾及び破風……一〇九
一〇 鴟尾……一一〇
一一 錺金具……一一一

四五圖 同上細部（妻斷面圖）
四六圖 同上細部（鉤欄）
四七圖 同上細部（内部）
四八圖 法隆寺廻廊外面及び斷面圖
四九圖 法隆寺玉蟲厨子全景
五〇圖 同上實測圖
五一圖（甲）同上密陀文様（一）
五一圖（乙）同上（二）
五二圖 法隆寺玉蟲厨子飾金具六種
五三圖 同上七種
五四圖 法隆寺金堂内天蓋
五五圖 同上飾金具
五六圖 同上裝飾天人
五七圖 同上鳳凰
五八圖 法隆寺金堂壁畫の一部（西方阿彌陀の淨土）

三 蜜陀畫……一二三
三三 蜜陀模様……一二三
一四 結論……一二三
第二章 諸佛像……一二五
一 佛像と模様……一二五
二 天蓋……一二九
三 結論……一三〇
第三章 橘夫人念持佛厨子……一三一
一 總説……一三一
二 彫刻……一三二
三 繪畫……一三四
四 模様……一三五
五 結論……一三六
第四章 壁畫……一三七
一 緒言……一三七
二 壁畫の性質……一三八
三 模様……一三三
四 壁畫の年代……一三六
第八編 講堂建築説……一四五
緒言……一四五

（以上法隆寺建築論附圖）
五九圖 朝鮮慶州皇龍寺平面圖
六〇圖 大和法隆寺玉蟲厨子通肘木忍冬文様
六一圖 希臘土器
六二圖 支那洛陽龍門石窟寺彫刻
六三圖 河内觀心寺佛像背光
六四圖 大和法隆寺佛像背光
六五圖 同上玉蟲厨子科栱
六六圖 同上佛像脊光
六七圖 上野青梨子古墳出土金具
六八圖 朝鮮扶餘古墳出土金具
六九圖 大和法隆寺佛像背光
七〇圖 支那河南省北響堂山第一窟彫刻

一　往古の形式……一四六
二　現今の狀態……一四八
第九編　廻廊建築說……一五〇
緒言……一五〇
一　歷史的考證……一五一
二　プラン……一五一
三　エレヴェーション……一五二
四　柱及び組物……一五二
五　軒廻り……一五三
六　屋蓋……一五三
七　構造法……一五四
八　裝飾……一五四
九　切妻……一五四
第十編　鐘樓建築說……一五五
緒言……一五五
一　歷史的考證……一五五
二　プラン……一五六
三　エレヴェーション……一五七
四　柱及び組物……一五八

七一圖　大和法隆寺金堂壁畫忍冬文
七二圖　同上壁畫寶飾文
七三圖　同上壁畫臺座文
七四圖　同上壁畫、西方阿彌陀淨土の脇侍（一）
七五圖　土耳其斯坦地方、ウズベグの女子（一）
七六圖　大和法隆寺金堂壁畫、西方阿彌陀淨土の脇侍（二）
七七圖　土耳古斯坦地方、ウズベグの女子（二）
（以上古代建築論附圖）
七八圖　越後彌彥神社
七九圖　京都市東本願寺本堂
八〇圖　東京市上野公園不忍辨天天龍門
八一圖　東京市芝增上寺大殿
八二圖　下總中山法華經寺の寶塔
八三圖　東京市虎之門舊工部大學校
八四圖　東京市舊新橋停車場
八五圖　東京市舊東京帝室博物館本館
八六圖　東京市舊東京帝國大學工科大學本館
八七圖　東京市日本銀行
八八圖　東京市舊農商務省
八九圖　東京市帝室博物館表慶館
九〇圖　赤坂離宮
九一圖　東京市舊萬世橋驛
九二圖　東京市東京驛

五　鉤欄……一七九
六　上層柱、組物、虹梁及び蟇股……一七九
七　垂木割及び軒廻手法……一八〇
八　妻……一八一
九　屋蓋……一八一
一〇　軸部の構造……一八二
一一　小屋……一八二
一二　建築の流派……一八三
第十一編　經藏建築說……一八三
緒言……一八三
一　鐘樓と均しき點……一八四
二　鐘樓と異なる點……一八五
第十二編　自餘の諸宇……一八六
緒言……一八六
一　南大門……一八六
二　東大門……一八七
三　西大門……一八七
四　浴室及び四脚門……一八八
五　北門……一八九

六　食堂及び細殿……一六九
七　綱封藏……一七〇
八　妻室……一七一
九　東西兩室附聖靈院及び三經院……一七一
一〇　上堂……一七二
一一　西圓堂……一七三
三　塔頭の諸寺……一七四
第十三編　法隆寺建築の眞相……一七五
緒言……一七五
一　本邦佛寺建築の起原……一七六
二　推古式の成立……一八〇
三　推古式と其の次期……一八六
四　結論……一八八
古代建築論（一九三―二六四）
第一章　序說……一九五
第二章　日本建築の發生と發達――其の特質……一九八
第三章　佛教建築の渡來……二一〇
第四章　法隆寺伽藍のプラン……二三〇
第五章　法隆寺建築の外觀……二三七

第六章　法隆寺建築の材料と構造……二三六
第七章　法隆寺建築の細部と裝飾……二四七
其の一　總說……二四七
其の二　細部……二五二
其の三　裝飾……二六八
第八章　玉蟲厨子と天蓋……二七九
其の一　總說……二七九
其の二　厨子の蜜陀文樣……二八一
其の三　厨子の金具文樣……二八六
其の四　天蓋……二八九
第九章　壁畫……二九二
其の一　總說……二九二
其の二　文樣より見たる壁畫……二九五
其の三　佛菩薩の面相より見たる壁畫……二九七
第十章　結論……三〇〇
國初より明治までの建築史（三〇五―三一四）
總說……三〇七
第一章　佛教渡來以前……三〇九
第二章　飛鳥時代……三一二

九三圖　東京市丸之內海上ビルディング
九四圖　東京市丸之內三菱銀行
九五圖　東京市丸之內中央電信局
九六圖　東京市日比谷帝國ホテル正面
九七圖　東京市丸之內東京朝日新聞社
九八圖　東京市青山明治神宮外苑、聖德記念繪畫館
九九圖　東京市、明治初期の第一銀行
一〇〇圖　東京市、明治初期の三井銀行
一〇一圖　東京市芝區淺野總一郎氏邸
一〇二圖　東京市東京帝國大學正門
一〇三圖　東京市京橋區歌舞伎座
一〇四圖　東京市九段下軍人會館
建築圖案（一等當選）
（以上明治以降の建築史附圖）
一〇五圖　島根縣簸川郡出雲大社本殿正面圖
一〇六圖　同上平面圖
一〇七圖　同上斷面圖
一〇八圖　大阪府泉北郡大鳥神社本殿背面圖及び斷面圖
一〇九圖　同上平面圖
一一〇圖　同上側面圖
一一一圖　大阪府住吉神社本殿正面及び斷面圖
一一二圖　同上平面圖
一一三圖　同上側面圖

第三章　奈良時代……二九五
第一節　前　期（白鳳時代）……二九五
第二節　本　期（天平時代）……二九七
第四章　平安時代……三〇〇
第一節　前　期（弘仁時代）……三〇〇
第二節　本　期（藤原時代）……三〇一
第五章　鎌倉時代……三〇七
第六章　室町時代……三一〇
第七章　桃山時代……三一四
第八章　江戸時代……三一八

明治以降の建築史

（三二五——三七二）
緒　言……三二七
第一章　總　論……三二八
第一節　建築史上の第三期……三二八
第二節　第三期の經過……三二九
第三節　建築の本質……三三一
第二章　舊派建築……三三三
第一節　概　論……三三三
第二節　神　社……三三四

一二四圖　唯一神明造正殿正面圖
一二五圖　同上平面圖
一二六圖　同上側面圖
一二七圖　伊勢神宮外宮平面圖
一二八圖　同上手本
一二九圖　伊勢神宮內宮平面圖
一三〇圖　同上手本
一三一圖　鳥居五種
一三二圖　伊勢神宮門垣
一三三圖　京都市賀茂御祖神社本殿及び權殿
一三四圖　同上平面圖
一三五圖　同上側面圖
一三六圖　賀茂御祖神社配置圖
一三七圖　京都市賀茂別雷神社配置圖
一三八圖　奈良市春日神社本殿側面圖

第三節　佛　寺……三二五
第四節　住　家……三二六
第五節　古社寺保存事業……三二七
第三章　新派建築……三二八
第一節　概　論……三二八
第二節　第一期・移植時代……三二八
第三節　第二期・模倣時代……三二九
第四節　第三期・覺醒時代……三四二
第五節　第四期・思索時代……三四四
第四章　折衷建築……三四七
第一節　概　論……三五一
第二節　第一期の折衷……三五一
第三節　第二期の折衷……三五二
第四節　第三期の折衷……三五三
第五章　結　論……三五四
第一節　現今の建築界……三五六
第二節　建築界の前途……三五六

日本神社建築の發達

（三七三——四二四）
緒　言……三七五

一二九圖　同上平面圖
一三〇圖　同上正面圖
一三一圖　同上配置圖
一三二圖　大阪府南河內郡建水分神社本殿正面圖
一三三圖　同上平面圖
一三四圖　大分縣宇佐郡宇佐八幡宮本殿正面圖
一三五圖　同上平面圖
一三六圖　同上側面圖
一三七圖　京都府綴喜郡石清水八幡宮本殿正面圖
一三八圖　同上平面圖
一三九圖　同上側面圖
一四〇圖　滋賀縣滋賀郡日吉神社本殿正面圖
一四一圖　同上平面圖
一四二圖　同上側面圖

總　論……三七六
第一章　無建築の時代——磯城神籬……三七九
第二章　神社宮室無別の時代……三八一
其の一　大社造……三八一
其の二　大鳥造……三八四
其の三　住吉造……三八四
第三章　神社宮室有別の時代……三八五
其の一　神明造……三八五
其の二　神明造の變態……三八八
其の三　寶龜二年制定の造殿儀式に就いて……三八九
第四章　曲線形適用の時代……三九三
其の一　春日造……三九三
其の二　流れ造……三九四
其の三　變態……三九五
其の四　八幡造……三九六
其の五　日吉造……四〇〇
其の六　入母屋造……四〇二
第五章　神佛混淆の時代……四〇三
其の一　規模の伽藍化……四〇四
其の二　各種の變態實例……四〇九

一四三圖　京都市八坂神社本殿正面圖
一四四圖　同上平面圖
一四五圖　同上側面圖
一四六圖　安藝嚴島神社本殿
一四七圖　同上平面圖
一四八圖　同上側面圖
一四九圖　同上配置圖
一五〇圖　滋賀縣野洲郡御上神社本殿正面及び斷面圖
一五一圖　同上平面圖
一五二圖　同上側面圖
一五三圖　山口縣豐浦郡住吉神社本殿正面圖
一五四圖　同上平面圖
一五五圖　同上側面圖
一五六圖　岡山縣吉備郡吉備津神社本殿正面圖

第六章　本殿拜殿連結の時代……四一一
其の一　權現造……四一一
其の二　八棟造……四一五
第七章　現今及び將來の神社……四一七
其の一　現今の神社建築……四一七
其の二　將來の神社建築……四二三

日本佛塔建築の沿革　（四二五——四六四）

緒　言……四二七
第一章　總　說……四二八
（一）佛塔形式の起原……四二八
（二）立塔の目的……四二九
（三）佛塔の種類……四二九
（四）塔の各部の名稱……四三三
第二章　塔の經歷……四三三
（一）飛鳥奈良時代の佛塔……四三三
（二）平安時代の佛塔……四三四
（三）鎌倉室町時代の佛塔……四三六
（四）桃山江戸時代の佛塔……四三六
第三章　塔の沿革……四四三

一五七圖　同上平面圖
一五八圖　同上側面圖
一五九圖　靜岡縣富士郡淺間神社本殿正面圖
一六〇圖　同上平面圖
一六一圖　同上側面圖
一六二圖　福岡縣糟屋郡香椎宮本殿正面圖
一六三圖　同上平面圖
一六四圖　同上側面圖
一六五圖　仙臺市大崎八幡宮本殿正面圖
一六六圖　同上平面圖
一六七圖　同上屋根伏圖
一六八圖　同上側面圖
一六九圖　京都市北野神社本殿正面圖
一七〇圖　同上平面圖

其の一　塔の資格の變遷……四四三
其の二　塔の形式の變遷……四四六
其の三　塔の構造及び裝飾の變遷……四五五
第四章　結　尾……四六一

日本建築の變遷（四六五——五〇八）

一　緒　言……四六七
二　日本建築發生の動機……四六八
三　日本建築の發達……四七八
四　日本建築の三大期……四八二
五　現代建築……四九一
六　實　例……四九八
七　結　尾——日本建築の將來……五〇五

本邦梵鐘說（五〇九——五六〇）

第一章　總　說……五一一
第二章　歷史的記載……五一七
一　奈良時代の梵鐘……五一七
二　平安時代の梵鐘……五三三
三　鎌倉足利時代の梵鐘……五五六

一七一圖　同上屋根伏圖
一七二圖　同上側面圖
一七三圖　靜岡縣阿倍郡久能山東照宮社殿平面圖
一七四圖　同上屋根伏圖
一七五圖　東京市龜戸神社々殿平面圖
一七六圖　同上屋根伏圖
（以上日本神社建築の發遷附圖）
一七七圖　大和法輪寺三重塔
一七八圖　大和法起寺三重塔
一七九圖　大和當麻寺東塔
一八〇圖　大和當麻寺西塔
一八一圖　山城延曆寺相輪樓
一八二圖　山城醍醐寺五重塔
一八三圖　大和興福寺三重塔
一八四圖　海住山寺五重塔

四　豐臣德川時代の梵鐘……五二〇
第三章　各部の記載……五二三
一　全體の形狀……五二三
二　龍　頭……五二六
三　袈裟形……五二七
四　撞　座……五二八
五　乳……五二八
六　裝飾模樣……五二九
七　銘……五四〇
八　鐘の割……五四一
第四章　結　尾……五四三

本邦梵鐘說附說（五四五——五五〇）

一　梵の解……五四五
二　梵鐘の解……五四五
三　周禮に所謂鐘の解……五四八

筑紫觀世音寺の梵鐘（五五一——五六〇）

一八五圖　靈山寺三重塔
一八六圖　淨瑠璃寺三重塔
一八七圖　百濟寺三重塔
一八八圖　西明寺三重塔
一八九圖　大法寺三重塔
一九〇圖　安樂寺八角四重塔
一九一圖　明王院五重塔
一九二圖　岩船寺三重塔
一九三圖　常樂寺三重塔
一九四圖　瑠璃光寺五重塔
一九五圖　大和興福寺五重塔
一九六圖　西國寺三重塔
一九七圖　法觀寺五重塔
一九八圖　大和南華寺三重塔
一九九圖　園城寺三重塔
二〇〇圖　新海三社三重塔
二〇一圖　大和談山神社三重塔
二〇二圖　安藝嚴島神社五重塔

法隆寺建築論

日本建築の研究（上）目次終

二〇三圖　池上本門寺五重塔
二〇四圖　京都清水寺三重塔
二〇五圖　京都東寺五重塔
二〇六圖　東京上野東照宮五重塔
二〇七圖　京都仁和寺五重塔
二〇八圖　東京淺草寺五重塔
二〇九圖　最勝院五重塔
二一〇圖　東京谷中五重塔
二一一圖　大阪四天王寺五重塔
二一二圖　日光東照宮五重塔
二一三圖　般若寺十三重塔
二一四圖　東京寶仙寺三重塔
二一五圖　石塔寺の塔
二一六圖　高野山寶篋印塔
二一七圖　西大寺鐵塔

（日本佛塔建築の沿革附圖）

補圖　梵鐘三圖

法隆寺建築論

緒言

本邦建築の中に就いて其の由緒最も顯著に、其の年代最も古く、其の製作最も優秀なるものを求むれば、世間擧頭指を大和の法隆寺伽藍に屈するに躊躇するものあらざるべし。吾人若し、法隆寺の伽藍を以て本邦の最も貴重なる古建築と斷言するも、決して過當にはあらざるべし。

抑も法隆寺の名が夙に世人の耳朶に觸れたるは、嘗て泰西の美術論者「ビゲロー」「フエノロサ」等が、其の堂内にある彫刻繪畫等を見て其の非凡の名作たる事を看破し、一部は彼の好事より生ぜる附會の奇說と、一部は彼の緻密なる觀察より生ぜる斬新の發明とに由りて、ます〳〵其の名聲を高からしめたりき。爾來臨時全國寶物取調局の設置せらるゝや、奈良の地は我が國古代美術の中樞となり、法隆寺の名は東大寺と共に普く世人の誦するところとなるに至りたり。

然れども、法隆寺の名が斯くの如く著しきに至りしは、以上陳述するが如く、全く其の彫像繪畫等に由りてなりしなり。世人は彫刻繪畫等を以て美術とし、法隆寺の建築を以て單に斯の美術を蓄藏する一箇の器械と認定せ

り。世人は全く法隆寺の建築に就いては記憶せざりしなり。他なし、世人、繪畫彫刻等の美術たる事を認めて、未だ建築の美術たる事を認めざればなり。

然れども世運の進歩は駸馬も及ばず、近時本邦建築の美術的觀察は漸くに其の萌芽を生じ來り、我が帝國大學亦夙に爰に視る所あり、我が國古代建築の中に就いて、其の輪奐の秀美にして建築の好模範たるのみならず、其の歴史の徴證となり、考古學上の資料となり、以て斯學を開發すべきものを求めて、茲に我が法隆寺を得たり。而して、予は幸にして曩に帝國大學の命を受けて法隆寺の實測を遂げ、其の輪奐の秀美なる所以を講究し、其の歴史の徴證となり、其の考古學上の好資料たる所以を精査するの光榮を得たり。即ち茲に其の結果を記述して、以て法隆寺建築の眞相を明かにせんと欲す。

法隆寺に關する記錄史傳は古來甚だ乏しくして、未だ完全なるものあるを見ず、強ひてこれありと言はば則ち古今目錄抄及び法隆寺流記資財帳、七大寺巡禮記、七大寺年表、七大寺日記、法隆寺金堂佛像記、法隆寺別當次第記、白拍子記等を推すに過ぎず。其の他は黒川眞頼氏の物せられたる法隆寺建築說、小杉榲邨氏の法隆寺壁畫說及び玉蟲厨子說、塚本靖氏の法隆寺裝飾論等あり。又奈良縣にて調査せる記錄、法隆寺にて調査せる傳記及び二三人士の意見を公にせるものもあり。然れども多くは想像及び假說を加へたるものの如く、要するに極めて正確なるものにはあらざるなり。

法隆寺の建築物は其の數素より甚だ多し。試に其の主要なるものを列擧すれば、曰く南大門、中門、廻廊、金堂、塔婆、講堂、經藏、鐘樓、東室、西室、三教院、聖靈院、上堂、西圓室、浴室、食堂、綱封藏、西大門、東大門、及び塔頭の諸寺あり。而して其の最も建築界に在りて價値あるものは、即ち中門、塔婆、金堂の三宇なりとす。蓋し以上の三宇は其の年代相均しく、而して其の手法亦相均しく、三者相率ゐて共に法隆寺式となづくべき一流派に歸すればなり。是の故に本論に於いても亦主として此の三建築を詳論し、併せて廻廊以内に包括せる諸建築に論及せり。其の他の諸宇に至りては寧ろ、特にこれを論ずるの價値あるを認めず。是の故に此の種の建築に關しては、其の大體に就きて略評を試みて以て足れりとせり。

東院伽藍に關しては、他日これを詳論するところあらん。今本篇に於いてこれに論及せず。

第一編　建築界に於ける法隆寺の位置

今を去ること二千二百三十七年（我が孝安天皇五十一年）、「マケドニア」の歴山大王破竹の勢を以て西亞の諸國を平げ、進んで信度の上流を渡り、四隣を平定せり。これ蓋し歴史上東西文物値遇の端緒なり。次いで歴山大王の宿將「セロイコス」西亞の地を領し、印度と親交を結びしより、彼我の文物漸くにして融和し來り、殊に「バクトリア」に建國せる希臘人は、頻りに其の文明を印度に輸入せり。中央亞細亞の地、これより泰西「クラシック」美術の繁殖を見るに至りたり。

これより先、天竺國の迦毘羅皤萃都城に瞿曇氏ありて佛教を創めしより、摩迦陀國王阿輸迦（阿育王）第三の結

集を行ひ、傳導使を派して佛教を遠く異邦に弘通せしめ、降りて二百餘年健陀羅國王迦膩色迦、專心佛教の弘布に從事し、第四の結集を行ひしより寺塔の建築大に興り、爰に中央亞細亞の地に希臘印度兩式の美術相値遇して一種の希臘印度派と稱する美術の發達を致したり。而して其の中樞となれるものは、即ち方今の「アフガニスタン」の東部及び印度の西北部を包括せる健陀羅これなり。

更に眼を轉じて支那歷代の沿革を通觀するに、漢武の時より西域の交通漸く開け、今を去ること一千八百三十二年、後漢の明帝永平七年、佛教始めて支那に入りしより、漢魏六朝の間に於いて佛教の旺盛其の極に達し、中央亞細亞即ち所謂西域諸國と交通頻る頻繁を致したり。加之、歷代の帝王まゝ佛教を篤信せしと、美術の奬勵に從事せしとに由りて文華著しく開發し、終に進んで唐朝の精華を大成せり。而して本邦の文華は、彼の隋唐文華の傳來せるものなるを以て、これを推せば本邦の美術が近く唐土と骨肉の關係を有し、遠く天竺と深緣を結び、更に遠く泰西「クラシック」式と相連絡するところあるは、亦已むを得ざるの致すところならん。

今、更に本邦美術の傳來に就き仔細に其の經歷を觀察すれば、彼の希臘印度式なるものが、一度支那に入りて爰に一種の新形式を作し、而して、支那より本朝に傳來するに當りては、吾人は其の二樣の徑路を取るを見るなり。一は三韓を經、百濟人の媒介に由りて傳來するものにして、これを推古式と名くべく、一は直に唐土より傳來するものにして、これを天智式と名くべく、而して其の後を受くるもの、これを天平式と號すべく、是の故に其の系式左の如し。

三韓傳來――推古式　自佛教傳來　至天智天皇　凡そ百十三年

唐土傳來
- 天智式　自天智天皇　至元正天皇　凡そ六十二年
- 天平式　自聖武天皇　至桓武天皇　凡そ七十年

推古以下諸式の成立に關しては、世間已に定論あるが如し。丸鬼隆一氏は曰く、

推古朝支那朝鮮より輸入したる美術は支那舊來の美術にして、其の間自ら一片高尚銳利なる精神の存するありて、屹然一時代をなす。而して天智帝の時に至りて佛教と共に輸入したるは、六朝第二の勢たる西域即ち健陀羅式の文化を渾融したるもの、若くは西域の文化を其の儘に船載したるものなり。

即ち推古式を以て毫も西域と關係なきものの如く說けり。又工學士塚本靖氏は、其の法隆寺建築裝飾論に說きて曰く、

所謂推古式と稱するものは、支那純粹の美術の西域（中央及び西方亞細亞）の美術を參化したるものにして、天智式と稱するものは推古以來の美術に健陀羅美術を渾融し、大に技術の雄渾を加へたるものなり。

と。氏は尙、別に推古式は健陀羅式を加味したるものにあらずと確言し、西域と健陀羅とは全く別種のものと認定せられたるが如し。然れども予は推古式の遺物に就きて、其の希臘的紋樣の適用あることを發見し、其の希臘印度式即ち健陀羅式を加味したるの事實を認めたり。又西域と云ひ健陀羅と云ふ、決して二樣の全く異りたる地方にあらず、健陀羅は即ち方今の「アフガニスタン」の東部より「カシュミール」及び「パンジャブ」に及ぶ區

域にして、亦これ廣義の西域の裡に屬するものと認めて可なり。九鬼隆一氏も西域卽ち健陀羅と云ひて、其の間に區別を立てられざりしなり。

要するに、推古式は支那式と西域式との器械的和合にして、當時の西域式は卽ち希臘印度式なりしなり。而して天智式なるものは亦支那式と當時の西域式との和合にして、當時の西域式亦希臘印度式に外ならず、蓋し西域美術は其の根本、已に希臘と印度とに親密の關係あり、而して彼の阿育王（我が孝靈天皇二十二年より同五十八年に至る）以降は其の關係ます〳〵親密にして、後世希臘印度なる形式を大成するの基を爲し、迦膩色迦王（我が垂仁天皇の朝）に至りて至く其の効を收めたるものなりとす。是の故に太古卽ち歷山王以前の西域美術は、純正「アツシリア」及び波斯の樣式を意味すと雖も、阿育王以降卽ち漢以後の西域美術は、希臘印度の樣式を意味せり。これを要するに、推古式に在りては支那固有の原素これが本體をなし、西域式は僅にこれに附隨せるに過ぎざるも、天智式に至りては則ち西域支那兩式の和合せるもの、これが本體となるの現象を呈するに至りたり。世間又說をなすものあり。曰く、推古式なるものは支那六朝以前の文物が西域の式を加味したるものにして、天智式なるものは支那六朝以後の文物が西域の式を加味したるものなりと。是の故に其の系統左の如し。

漢 魏＋西 域＝三韓式＝推古式

六 朝＋西 域＝隋 唐 式＝天智式

それ或は然らん。予は次に少しく漢以降に於ける西域の狀態を記述すべし。

支那に於いては恰も秦の初代なりき、彼の阿育王印度に君臨し四方に僧侶を派遣したり。而して、其の埃及、及び「シリア」「マケドニア」「キレネ」「エピロス」「バクトリア」の諸國と交通せしを以てこれを見れば、其の往復の衝に當りたる各地方が、亦斯の希臘印度の文物を採りしこと疑ひなく、葱嶺以西の諸邦亦必ずや悉く其の餘響を受けたるものならざるべからず。次いで漢武帝の時、張騫月氏に使し匈奴の捕ふるところとなり、逃れて葱嶺を越え大宛、唐居、大月氏を跋涉して歸り、後更に西域諸國に使し、西は安息（パルチヤ）に至り南は身毒（印度）に到り、大に彼の土の文物を齎したるの事蹟あり。佛敎の支那に傳來するの頃、印度の西北なる健陀羅國に迦膩色迦王あり、最も熱心なる佛敎信者にして、彼の有名なる馬鳴菩薩（アスバゴシア）は此の王の尊奉せる高僧なりき。王は一方には兵力を以て殆ど中央亞細亞の全部を服し、一方には盛に寺塔を建立して佛法を弘布せり。凡そ中央亞細亞に於ける文物は迦膩色迦王の作業に因りて、茲に希臘印度の式を大成せること疑ふべからず。而して此の文華の中樞となれるものは、卽ち健陀羅の國土にして、其の寺塔の建築及び美術工藝の盛代は、「フアーガソン」氏に從へば、今を距ること千九百年より千三百年の間にして、恰も支那六朝の代に相當れり。

以上の事實よりこれを推考すれば、漢時代に於ける西域は、阿育王及び迦膩色迦王の偉業に由りて文物大に開發し、其の美術の樣式は卽ち希臘印度と名づくべきものなりしこと疑ふべからず。然らば則ち漢土と當時の西域との和合なる推古式に於いて、著々として彼の希臘式の紋樣等の適用を見るは、亦自然の結果なり。或は云く、漢

の時に當りて西域諸國には、希臘印度式の美術勃興せるは、これを史乘に徴して明かなるも、當時漢土に輸入したるものは希臘印度式にあらずして、其の前期即ち未だ希臘の影響を受けざる純正印度若くは純正波斯「アッシリア」等の美術ならざるべからず、蓋し希臘印度式即ち健陀羅式の支那に入りしは、遥く法顯が天竺を跋渉したる後なるべしと。此の説亦大に其の理あり、然れども如何せん、吾人が今日目撃する推古時代の遺物中には明かに希臘の影響を受けたるものあり、或は純正波斯、「アッシリア」及び印度の傳來に歸すべきものあり、時に或は東羅馬式の趣味をさへ帶ぶるものあるなり。要するに推古時代の美術を以て、毫も健陀羅の文化を渾融するものにあらずと斷言するは、甚だ妥當にあらざるを認むるなり。已にして東晉の代に至り、法顯一たび葱嶺を越えて中央亞細亞の地を蹈破してより、西域及び五天竺の文物は大に支那に輸入せられたり。

是に於いてか、支那固有の形式と、西域（即ち主として健陀羅）式との親密なる和合を生じ、其の形式は漸次に東方に進みて三韓に入り、三韓これを本邦に傳へたるものなるべく、而して、支那本土に於いて發達せる樣式は、直接に本邦に傳來して天智式となりたるものなるが如し。今例を彫刻に取りて、推古、天智兩式を區別すべき要點を擧ぐれば、推古式に於いては、其の大體の容貌姿勢等に古拙なる支那式を保ち、其の細部に於いて西域固有の原素を現出したり。天智式は、其の大體業已に固有の支那式にあらずして、これ西域と支那とを融和して一種の形式を成すものなり、而して其の細部に至りても亦、已に彼の推古時代に於けるが如きものにあらずして、却つて成熟せる希臘印度の樣式を示し、また東羅馬式の趣味をも加へたることを觀察すべし。これを要するに推古式は其の形式古拙にして其の間自ら一種の風韻あり、天智式はこれに比すれば遙に精巧にして著しく希臘の趣味を現し、天平式に至りては即ち自ら別に壯麗雄偉の觀を發揮せるを見る。

吾人は今此の三期を通して觀察するに、推古式の古拙、天智式の精巧、天平式の優麗、順次に發達の徑路を示し、各自其の特色を有すと雖も、要するに三期共に隣邦美術の模倣時代にして、これを總括して寧樂朝の流派と唱ふべきものなりとす。

以上は主として彫刻、繪畫、模樣等に就きてこれを論ずるものにして、特に建築に就きて言ふにあらず。由來本邦の建築術は、種々の源由によりて其の發達顯著なること能はず、佛教渡來以前に於いては、殆ど美術として見るべき建築術を有せざりしが如し。佛教の渡來するや、建築の術は彫刻繪畫等と共に勃如として興り、爾來常にこれと相提携して進行するの狀を視察すべし。若し本邦の建築術は佛教渡來と共に興りしものと云ふことを得ば、推古式は即ち我が邦建築最初の流派なり。それ然り、吾人今本邦建築術に就きて論述するところあらんとす、先づ筆を推古式に下すは其の順序なり。吾人は今劈頭に推古式に就きて其の標品を得んと欲す、これを何所に求めて可ならんか、遠く其の起源に遡れば、三韓の形式は已に消滅してこれを今日に徵すべきものなく、西域諸國は荒漠として空しく舊趾の名を止め、希臘印度の原式は獨り尙有無の間に彷徨せり。而してこれ等諸式の粹を取り精を聚め、以て楣式建築の極致に到達せる推古建築は、幸にして今日尙蒼然として我が寧樂舊都の邊生駒の郡法隆寺村と名づくる一寒村中に孤立するなり。村は此の建築に由りて其の名を得たるなり。則ち知る、法隆寺の

建築界に於ける眞價は實に爰に在ることを。而して其の形式の明かに支那式の模様を存し、微かに印度式の遺風を殘し、尚且つ希臘式の痕蹟を留むるは、其のまゝ趣味ある所以なり。法隆寺の建築界に於ける位置此に於いて明かなり。

第二編　法隆寺の沿革

第一　創立の年代

法隆寺の創立に關しては世間已に定論あり。文學博士黒川眞頼、小杉榲邨の諸氏これを雜誌「國華」に詳論して殆ど餘蘊なし、亦予の蛇足を加ふべきものなきなり。只予は創立年代に關する一二の考證を左に揭げて以て足れりとせん。

一、伊呂波字類抄卷二に曰く「法隆寺七大寺内、和銅年中造立、寺家緣起云、推古天皇第十五年、聖德太子斑鳩宮西、建一伽藍、名法隆學問寺」云々。

一、本寺伽藍緣起流記資財帳に曰く「奉爲池邊大宮御宇天皇並在座御世御世天皇、歲次丁卯小治田大宮御宇天皇並東宮上宮聖德法王、法隆寺學問寺、並四天王寺、中宮尼寺、橘尼寺、蜂岳寺、池後尼寺、葛城尼寺乎敬造仕奉」と。池邊大宮に天下を治す天皇とは用明天皇にして、小治田大宮に天下を治す天皇とは推古天皇なり、丁卯は同天皇の十五年に當る。

一、古今目錄抄に云く「法隆寺建立御願者丙午歲用明元年也」と。又云、「法隆寺推古天皇元年癸丑春正月太子詣鵤鄉給、立法隆寺、前年所々相尋給今年始建之」。又云、「法隆寺自御生年廿一歲造始而三十五丁卯年推古天皇十五年令建立畢給也」と。

黒川氏は法隆學問寺と斑鳩寺との區分を論じ、推古天皇元年に建立著手せしは斑鳩寺にして、同十五年に斑鳩寺、學問寺共に落成せりと說き、而して氏は推古天皇九年斑鳩寺先づ成るを以て、池邊の大宮を去つて此の地に移住せりと附加せり。氏は又推古天皇十四年には學問寺未だ成らざることを說き、推古紀を引用してこれを證明せり。

以上の諸考證によりて、法隆寺創立の推古天皇十五年なるべきは殆ど信ずべきが如し。然るに世間又一說ありて用明天皇元年勅願に由りて創立すと唱へ、奈良縣寺院誌には「當寺は人皇三十二代聖主の叡願に依りて聖德太子創立なり、造營十五年を經て落成す」と說き、或は用明天皇の勅願に依りて聖德太子斑鳩寺を造立し、推古天皇元年に至りて法隆學問寺の工を起し、同十五年其の功を竣ふと云ふものあるに至る。然れども用明天皇の御宇に斑鳩寺を創立すること、及び同天皇の代に法隆寺を造營することは曾て古文古書に見ざるところなり。或は誤謬を傳へたるものにあらざるか。

法隆寺は學問寺と名づけられて、佛敎講修の道場たりしなり。而して創立の際に於いては其の宗旨未だ定まれ

るものにあらず、これを史傳に徴すれば、伊呂波字類抄に「法隆寺七大寺内、和銅年中造立寺家縁起云、推古天皇第十五年、聖徳太子斑鳩宮西、建一伽藍、名法隆學問寺、安置佛舎利、本朝始法華維摩勝鬘三部大乗、於是寺如來教法始所故、名學問寺」とあり、又太子が天皇の請に應じて勝鬘法華の二經を講ぜしことは、史傳に明かなるところなり。日本佛法史に由れば、「太子薨逝以前に用ひられたる教旨は、何を所憑とせられたるやは史これを缺くを以て輒く窺ひ知るべからずと雖も、内典に三論成實論大乗妙典維摩經あり」云々とあり。三國佛教略史に「天武天皇元年智藏三論宗を傳へ、歸朝の後法隆寺に居る、道慈、智光等皆其の弟子なり、所謂三論宗第二の傳なり」とあり、以て法隆寺に於いて三論宗を講修せしことを知るべし。其の後元正天皇靈龜三年、玄昉入唐して樓楊大師に學び、法相宗を興福寺に弘む、即ち北寺の傳これなり。法隆寺が法相を兼學せるは蓋し此の後にありと云ふ。而して今日に於いては、三論全く廢滅して法相の一宗に歸せり。

第二　和銅再建説

世間法隆寺伽藍は創立以來未だ曾て火災に罹らずと説くものあり、或は天智の朝一度雷火に罹りて灰燼となり和銅年間再建せられたりと説くものあり、古來の一疑問として多く學者の議論を煩はせり。予は今これを解釋して其の歸著するところを示さんとするものにあらずと雖も、法隆寺の沿革を叙するに當りては、遂に此の問題を避くることを得ず。次に彼の二説の要領を擧げてこれが評論を試みんと欲す。

和銅再建説の根據とするところは次の如し。

(一)日本書紀天智天皇九年の條に「夏四月癸卯朔壬申　三十日　夜半之後災法隆寺一屋無餘、大雨雷震」とあり。日本書紀は本邦唯一の正確なる古代歷史なり、若しこれを信ぜずんば世間亦何れの事をか信ずべき。

(二)七大寺年表に「和銅元年戊申依詔造太宰府觀世音寺、又作法隆寺」とあり。これ法隆寺が一たび燒失せし事を證すべき一好材料たり。

(三)伊呂波字類抄卷二にも「法隆寺七大寺内、和銅年中造立寺緣起云、云々」とあり。此の「和銅年中造立寺緣起」なるものは未だ其の全文を詳かにせず、且つ其の出所を明かにせずと雖も、和銅年中造立の文字を以て、法隆寺が一たび燒失せることを想像するに足る。

(四)本寺伽藍緣起流記資財帳中に「塔本肆面、具擗一具涅槃像土、一具彌勒佛像土、一具維摩詰像土、一具分舎利佛土、右和銅四年歲次辛亥寺造者」とあり。蓋し法隆寺伽藍再建は和銅の初年起工され三年にして落成の後、寺に於いてこれを作れるものならん。

(五)類聚國史年代記にも亦天智の災を説けり。

(六)其の他以上の諸記錄を轉載し又は直寫せるもの數多あり。

以上の理由を根據として和銅再建を主張するものは、文學博士黒川眞頼、小杉榲邨の諸氏なり。

次にこれが反對説を唱ふるもの、理由とするところ左の如し。

(一)聖徳太子傳抄助儀と云へる古書に「延長四年依雷火講堂北室三經院燒失、其外太子御建立以後無火災故解脫

之說法隆寺無回祿災」とあり。

(二)古今目錄抄は法隆寺に關する唯一の精確詳密を極めたる傳記なり、而して其の中に天智の火災を說くことなし。

(三)古老の傳に、日本書紀に載するところの古記の原本二あり、一は法隆寺に火災ありと記し、他の本には幸隆寺火災ありと記す、此の幸隆寺は法隆寺末伽藍の一にして北の方字信乃と云へる地に在りて本寺を去ること三町以內なり、共に法隆寺或は斑鳩寺と總稱す。此等昔日全燒して今に再興なし、故に一本の分は遠所に在りて總稱を唱へ、法隆寺燒失と云へる傳記載の分を載せ、他の一本は近所に在りて實際の儘記せし故に、幸隆寺燒失とせし分を取れりと。

(四)日本書紀の所載によれば「一屋無餘」とありて「一堂若くは「一宇」と稱へざるなり。按ずるに屋の字は普通の住屋にのみこれを用ひ、伽藍建築には必ず堂若くは宇の字を用ひ來れり、これ卽ち伽藍の災に罹らざりし一證なり。

以上の二說相持して下ることなく、古來其の正否を判知するものなし。然れども兩說共に古書古文を解釋して其の所信を主張するに過ぎず、別に有形の證據とすべきものあらざるなり。予は今姑く凡ての古文古書口碑傳說を度外に置き、先づ其の建築の實際を視察し、而して一方に於いては推古朝に於ける遺物と、和銅に於ける遺物とを求めて、これが比較研究を遂げ、以て此の大問題に關する卑見を述べんと欲するものなり。

第三　爾後の經過

法隆寺伽藍建築が創立以來今日に至るまで如何なる變遷を致したるやは、未だ解釋せられざる問題に屬せり。獨り東院伽藍の沿革に關しては、書契のやゝ徵すべきものあり、而して東院の盛衰は必ずや亦法隆寺全體の盛衰と相隨伴するものなかる可からず。これ予が爰に敢て東院の沿革を引用する所以なり。

東院は天平十一年四月行信僧都の奏請によりて造立され、爾來百二十年を經て貞觀元年九月傳燈大法師位道詮これを再興し、其の後百六十五年を經て治安三年十月御堂入道これを修繕し、又百二十二年を經て天養元年十一月東院廻廊等顚倒其の他大破に及べるを以て、法隆寺の三綱連署を以て修繕を請願せることあり。次いで天養元年を距ること四十二歲、文治二年十二月二十三日三綱連署の請文案を見れば、源義經名を義顯と改め當地方に潛伏するに付き、逮捕すべきの命令を受けたるに對して左の如く云へり。

（前略）抑當寺者上宮太子建立、救世觀音聖跡、佛法最初伽藍、日域精舍興基、積六百餘箇歲之星霜、破壞顚倒無據、纔留所太子拳內御舍利、並妹子將來之妙典安置之精舍許也。（下略）

爰に所謂太子拳內の舍利及び妹子將來妙典安置の精舍とは、今日の東院舍利殿にあらずして或は金堂なるべしとは、已に諸學者の疑を存せるところなり。假令此の事法隆學問寺に關するものにあらずとするも、當時の事情に照して其の學問寺も亦東院と等しく、一時荒廢に歸したることを想ふに餘りあり。

これを要するに、法隆寺伽藍の堂宇は、創立以來百年乃至百五十年毎に大修繕せられたるものなるが如し。而して其の修繕若くは燒亡せる堂宇の再建の際に當りては、全體の位置及び形式を變更せること往々にしてこれ有り、講堂の如きは其の位置と「プラン」とを變更し、廻廊亦其の延長に少異を生じ、南大門は遂く南に去り、八脚なる西大門は今四脚と化したるが如き、枚擧するに遑なかるべし。只金堂、中門、塔婆の三宇に至りては、猶依然として其の舊觀を改めず、千年の形式を今日に保存するは、實に吾人の驚歎に堪へざるところなり。然れども此の三宇も亦凡そ百年乃至百五十年毎に修繕せられたるものなるべきを以て、其の材料の如きは新古錯雜の奇觀を呈するは素より論を俟たざるなり。今次に其の沿革の資料を擧ぐれば、本寺別當次第記に「天元五年五月二十一日夜金堂壁切破、西間佛五體盜人取之」とあり、又「永長元年金堂被修理」。又「承安五年二月二十二日金堂壁切盜人入、鐘一口、錫杖一枝、火舍一、華立四口、閼伽器皆具二前、坏四取畢」。又「元久元年四月より金堂修理在之」。又「建暦元年九月一日夜金堂盜人入、金銅佛三體取畢、推古天皇御本尊也、仍宿直始被置四人」。又「承久元年閏二月六日夜當寺金堂盜人入、藥師脇士二體、彌陀脇士一體、厨子御佛數體、灌佛等盜取畢云々」。又「弘安六年春比當寺金堂塔修理。云々」等の記事あり。又永和三年三月の本寺注進書に「應安七年金堂大破之間加修理之時（于時少別當尋賀）東林院顯遍僧正被奉加修造云々」等の記事見えたり。

奈良縣寺院誌によれば「慶長九年德川家康、片桐且元に命じ、三年の星霜を經て大修繕を加ふ。後、豊臣秀頼德川家綱及び桂昌院等修繕に力を盡す云々」とあり。

第十三圖は天正十三年の頃に於ける伽藍總圖なりと云ふ。これを今日の現形に比較するに、其の主要なる建築物の位置は毫も變遷の痕跡を見ず、只西大門は東大門と同じく八脚門なりしなり。廻廊の長さは東西全く同一にして、今日の如く東西相異るところなかりしなり。（廻廊の長さ東西均しきは事實なりしや、或は寫圖の誤か不詳）只其の塔頭即ち坊の變遷に至りては、實に驚くべきものあるなり。當時寺門漸く衰へ、而して猶且つ七十の坊を存せり。其の隆盛の時代に在りては、其の規模の大、以て想ふべし。

本寺所領はもと五千石なりしが、天正十三年より減じて千石となれり。寺門これより衰頽して振はず。

第四　元祿年間に於ける大修繕

元祿の大修繕は實に法隆寺の再興なりしなり。法隆寺の形式の依然として今日に傳へられたるは、實に元祿大修繕の賜なりしなり。而して世間此の大修繕を解して、再建なりと唱ふるもの間々これあり。森川世黄は五重塔を以て桂昌院の再建なりと唱へたることあり、近頃我が學友長野宇平治氏は、其の伽藍全部を擧げて元祿の再建なりと論ぜられたり。然れどもこれ大に其の事實を誤れるものと思惟するに由り、予は曾てこれを建築雜誌上に辨じたることありき。今本章に其の文を掲ぐること左の如し。

元祿年間に於ける法隆寺伽藍修繕の眞相

我が學友工學士長野宇平治君は、曩に「法隆寺伽藍の建築は元祿年間の再建に成りしものなり」との題を掲

げ法隆寺伽藍建築は一も千年の舊觀を呈するなし、隨ひて其の壁畫も亦元祿の改作ならざるべからずと斷定せられたるに對し、塚本工學士は直にこれを論駁せられ、又溝口禎次郎氏は繪畫の道より入りて、其の壁畫は決して元祿の製作にあらずと斷言せられたりき。而して長野學士は兩氏の所說に感服すること能はずとして固く其の所信を守られ、同時に予に卑見を述べんことを促されたり。予も亦此の問題に就きて大に論ぜんと思へる一人なりしが、予が壁畫に就きて曰はんと欲するところは、大方、塚本、溝口兩氏言ひ盡して餘蘊なし。予は乃ち茲に元祿大修繕なるものの眞相を說き、當時の修繕は世間の多數の人が信ずるが如き根本的の大改築にあらずして、眞正の意義に於ける修繕なりしことを述べ、以て諸君の參考に資することとせり。

予は已に屢々法隆寺に遊びしが、其の南大門より進みて中門に入り、頭を擡げて其の金堂と五重塔とを見較べ、又頭を轉じて中門を眺むる毎に、予は未だ曾て此の三宇の建築が其の古さの程度を異にするを觀察せざることなきなり。長野君は幾度か法隆寺に遊びて、備さに其の建築を觀察せられたる結果、此の三宇の木材は何れも同樣の古さにて元祿以前の古材と覺しきものなし、其の物質は凡て平等の歲月を經過し來れるものなりと斷言せられたるが、予は如何にしてもしか思ふこと能はず。予が眼球には中門最も古く、金堂これに次ぎ、塔婆最も新しく映じたるなり。只金堂、塔婆は明治二十六七年の頃に小修繕を加へ、中門は修繕されざりしを以て、しか見ゆるにあらざるやの疑ひを入るゝものあるべしと雖も、彼の小修繕の如きは殆ど吾人の觀察に影響を與へざるものとして可なり。要するに中門の柱の如きは假令千年の齡なしとするも、決して二百三百の年を

經たるものにあらざるが如く、金堂の外部にも亦二百年を超過せしと覺ゆるもの所々にあり。就中其の內部に至りては蒼然たる其の古色、決して二三百年間に成り得べからざるものあり。殊に其の柱の古拙、（精巧に對して云ふ、秀美に對して云ふにあらず）なる其の大さの一々異りたる、其の柱間の一々異りたる、其の鎗鉋を以て極めて粗野なる仕上げをなしたる等は、實に元祿にあるまじき事實と思はる。外部の高欄の如き元祿の再調に成れる部分は、工作も精巧に、組手、指口なども丈に發達し居るを見れば、若し金堂內陣迄全然再造の必要ありしときは必らずや充分の注意を以て精巧なる製作を加へたるに相違なかるべく、强ひて古の粗野を模するが如きことは萬々當時の有樣に徵して有り得べからず。又長野氏は建物の連絡の部分、重量を受くる部分等に異狀を呈せず又木材に繼ぎ矧ぎを見ずと云はれしも、これ只千年の古建築としては如何にも比較的著しからずと云ふのみなるべし。又木材が千年以上に保たるゝは疑ふべしとの說もあれども、大和の地殊に法隆寺邊は、土地乾燥にして木材の保存には極めて屈竟の地にてあるなり。彼の宇治の鳳凰堂、日野藥師堂、大原三千院の如きは何れも八百年の古建築にて、其の內陣柱等は疑ひもなく當時の古材を存しをれり。今就きてこれを見れば未だ腐朽に至れるものにあらず、今より後二百年を經るとも、決して建物を支へざる程に朽ち果つべしと思はれず。風雨に暴露さるゝことなき良質の木材が、千年の壽命を安全に保ち得べきことは、予これを信じて疑はざるなり。

偖て、彼の塔婆を見れば、其の材料甚だ新しく見ゆるのみならず、金堂にては力を受くる部分には非常なる狂ひを生じ、桁は曲り、梁は撓みたるを兎角して不安全ながらも修繕し了りたる形跡の見ゆるに引きかへ、塔

婆のみは殆どかゝる異狀を呈せず、恰も近年の落成の如くにて「反り」「曲り」「撓み」狂ひなどを見る事甚だ少く、垂木の端々、高欄の端々等迄も葵の紋打つたる金物を打ち、これのみは元祿の改造にあらざるやと思ひ違ふ許りに見ゆるなり。されば古今一陽集にも「特至寶塔者大樹公母儀従一位諡號桂昌院殿懇布再興美麗如新造」と見えたり。（古今一陽集は法隆寺所藏の傳記なり）

予は外見上先づ以上の三字が年齡相異ることを觀察し、外貌は中門最も古きが如くなれども、金堂の内陣こそ稀代の古物なるべけれとの感覺を起したるなり。而して後これを實際に照し傳記に徵し、種々の方向より考察するに、恰も予の感覺が正當なるべしと思ふ考證數多あり。予は其の考證の一として元祿大修繕の眞相を述べんと欲することなるが、予は過般法隆寺に遊びて同寺に藏する日誌を繙き、其の元祿年間の部に至りて不圖伽藍再興に關する記事を得たり。此の日誌素より主として建築工事の上に就きて物したるものならねば、これを以て當時修繕の現況を知了すること能はざるは勿論なれども、亦大に吾人の參考に資すべきものあり。乞ふ先づ修繕の起源より說かん。

法隆寺伽藍は元祿以前荒廢其の極に達したりとし、或は元祿の修繕は全然德川幕府の資金を投じて經營せるもの、即ち所謂公儀普請なりしと思惟するもの世に往々あるが如しと雖も、これ事實に於いて大に相違せり。これを當時の實際に徵するに、天正十三年本寺の所領これまで五千石餘のところ俄に千石に減ぜられし爲め、堂宇の修繕も自ら完全なること能はず、慶長九年一たび大修繕ありと雖も、それより元祿の初年まで百年に近き星霜を經て諸堂大に破損を生じ、時々姑息の修繕を行ひ來れり。然れどもこれを日誌に徵するに、元祿の初年來未だ曾て堂宇の廢頽甚だしくして、悉皆改造を要するが如き有樣なりしことを想像すべき材料なし。元祿七年二月一日南都奉行神尾飛驒守來りて伽藍を一覽せる際、懷賢（法隆寺の僧）案内し奉行に告げて云へる語中、數多の伽藍故修覆も難仕、先年大岡美濃守殿御奉行職之節御願申上候て開帳仕候て、其參錢等の餘慶にて少々修理仕候得共、中々大伽藍故上葺難成御座候云々。

とあり。即ち從來時々姑息の小修繕をなし來りたることを知るべく、且つ開帳即ち金堂等の内陣を公衆に示すは、一々奉行職の認可を要せしことを知る。金堂内部のよく千年の星霜を保ち得しは、これを保管すること甚だ鄭重なりしもの、其の一大原因ならざるべからず。

法隆寺に於いては大修繕の必要迫りたるを以て、同年二月十六日南都御番所へ左の如く伺ひ出でたり。

（前略）當寺伽藍爲修覆、於江戸靈佛靈寶致開帳度奉存云々。

尙、此の計畫及び施行に關して必要なる日誌の部分を摘載すべし。

三月八日の日誌中、

中宮寺御所へ尊珠、良尊、覺賢、懷賢已上四人奉伺候申上趣、當寺伽藍爲修造於江戸開帳之願望也。依之當宮樣三之丸樣御懇意也、被進御書者可宜之旨各奉願之處、可被進之趣之御氣色也。

茲に所謂三の丸樣と稱するは、即ち桂昌院の謂にして、其の佛法篤信者たりしことは世人のよく知るところ

なり。

三月九日の日誌中、

今度江戸就發足此方伽藍大事也。彼方へ趣者覺勝、覺賢、懷賢三人也。於江戸御願於令相叶ては、從跡良尊、良賢、貞應三人寶物可持參也云々。

四月七日の日誌中、

覺勝中院　覺賢地藏院　懷賢彌勒院　自今朝江戸行發足也。是當寺伽藍依令破壞、近年少々雖令加修理、寺家微力故難立其功、依之於彼御地靈佛靈寶等令開帳、以其參錢欲令修補之、寺中大望故各被揚鞭云々。

以上の記錄によりて見れば、三の丸と中宮寺とは懇親の間なるを以て、中宮寺より紹介狀を得、江戸に於いて開帳の儀を嘆願せんと企てたるなり。其の目的は江戸に於いて多額の賽錢を得て、伽藍の修理に資せんとするにあり、未だ始めより公儀に向つて下賜金又は特別保護等を願ふの意あらざりしなり。

五月二十日の日誌中に、

於江戸訴訟之儀被仰付、來月上旬寶物等持參可有之旨、日來段披露衆中喜悅、則前日沙汰之通、彌以良尊、良賢、貞應、寶物已下令警固之、武府へ被罷下筈也。

果然開帳の請願は聞屆けられたり。

六月九日の日誌中、

良尊、良賢、貞應出發、御舍利、靈佛、靈寶、青貝鳳凰の櫃並長持十三棹、駄荷五駄、乘掛一駄、供廻以下七十餘人云々。

六月二十九日の日誌には上京中の良尊より報告し來れることあり。去る十六日三の御丸樣靈寶等を拜覽非常に感激せられ、奉加金子三百兩を賜ふ云々。爾來僧等は江戸に於いて大に勸進し、充分効果を奏したるを以て大和に歸りたり。

十一月四日の日誌中、

南無佛舍利太子御影、先月二十二日江戸御發駕、昨夜南都泊り、今日申上刻還御也云々。

と見え、別に桂昌院より種々の下賜品ありしことを記せり。十二月二十八日江戸に於いて勸化の結果、公儀より御寄附の銀子一千枚請取りの手續を成せり。

按ずるに、當時幕府の名義を以て施行せる寺塔の再興修繕は、其の工費一切を幕府より支給するにあらずして、或は其の十分三、十分の四、若くは半額等、時に隨ひて補助額を異にし、而して其の工事監督も多くは其の寺院に一任して、幕府これを直轄せざりしなり。而して其の畿內地方に於ける工事は細大となく京都大工頭中井主水正の監督の下に立ち、其の設計仕樣等亦一々彼の檢閱を要せしものなりき。

元祿八年乙亥正月より三月に至るまでは京都に於いて開帳し勸化あり、非常なる盛況にて充分の効果を收め得たること、日誌に因つて知ることを得。四五兩月は日誌缺けたれば如何にして經過せしやを知らずと雖も、

著々修繕の準備に従事したるものの如し。次に主要なる日誌中の記事を列す。

六月十九日　（前略）並伽藍修覆の斷に中井主水正方へ參。

六月廿四日　（前略）藏にて六日も虫干繪像伶人將束等沙汰之、是又修覆近日相懸申度也、棟梁筑後和泉茂大夫方へ以堯泉申置、三人共に奉畏候云々。

六月廿五日　昨日の棟梁斷に自身被參。

六月廿六日　右修覆付三人の棟梁並平大工彌兵衞瓦師文次郎へ各召連、金堂上堂見分並勸學院も見分、懷賢一人同道。

六月廿七日　於瓦坊仕樣帳之用意棟梁三人、管主今日より相詰。

斯の如くして修繕事務は追々歩を進めたり。

七月　二日　金堂上堂仕樣帳大概出來。

七月　三日　護摩堂にて仕樣帳披露之所、近日集會之上諸事相談取極評定也云々。

七月　五日　於地藏院（中略）伽藍仕樣帳披見相談有之（中略）、伽藍修覆裏書は其時分其大工に每度遣候ば、可然御評定也。

七月　九日　筑後和泉修覆の談合に瓦坊にて相談。

七月十五日　於地藏院集會、開帳並伽藍修覆之相談也。

斯くの如くして修繕仕樣設計は成就せり。

八月　十日　金堂上堂入札於瓦坊開之。

八月十八日　金堂內陣佛像諸道具取置、貞應□□行秀立合。

九月　一日　金堂普請方爲吟味見分大工作兵衞へ材木等相渡。

九月　二日　金堂上葺に付宮大坂へ調遣。

金堂は屋根惣體取毀ち、內陣天井まで取り換ふるの計畫なりしなり。諸佛像は已にこれを他に移し置けるを見るべし。現在の實況を觀察すれば、內陣格天井の木材は甚だ新しきことを觀察すべきなり。又、現今金堂內陣柱に新たに貫を加へたるを觀察す。寺傳によれば、元祿年間の修繕の際これを加へたるものなりと、それ或は然らん。

九月　四日　（前略）御苦勞の儀に候へども、覺勝、覺賢、懷賢三人此度伽藍修覆の間奉行に相定候上、每年順番の修理奉行相加り、以上爲五人可勤評定也云々。

九月　五日　勸學院祈禱所御供所入札今日開之。

九月十二日　覺勝、覺賢、懷賢、材木の見分並東院築地爲見分棟梁運出。

九月十九日　勸學院入札開之。

十月十三日　金堂上堂普請の銀子今日內渡す。

斯くして元祿八年も終り、明くれば元祿九年は工事書も盛大を極めたる年にして、伽藍の主要なる建築は大概この年に於いて落成せり。先づ其の日誌より重要なるものを抜萃せん。

正月　元日　天氣快然、天下泰平聖朝安穩、武運繁榮萬民豐樂、寺內安全伽藍再興修學不怠云々。

茲に伽藍再興の文字見えたり。其の意は荒廢せる伽藍を復興するに在り、強ち再興を以て再建（根本的の）と見るべからざるは明かなり。

正月廿八日　早朝講堂へ參り松雲院、吉祥院立會、佛前莊嚴の義、堂前普請の義申談候云々。

二月廿九日　寶塔中門入札開之、金銀之員數修覆方記之。

三月十五日　寶塔修覆に付中井主水正、仕樣帳裏書願に大工上京に付出狀相添也。

三月廿一日　中井氏より寶塔修覆の□□裏書の返事來事。

三月廿七日　京中井主水正へ二王門修覆に付、大工裏書願に□□依之書狀相添自天王寺飛脚歸。

中門及び塔婆も亦修繕に著手せらる。而して此の二字が再建せられたるにあらざることは、以上の記事に因つて明かにして多く言を費すの要なし。

四月　六日　上堂屋根葺懸也。

四月十一日　（前略）西の廻廊講堂經藏等の修覆入札いたさせ、夫々取懸可然由申來に付、棟梁衆へ申渡。」

四月二十日　上堂上葺仕舞。

四月廿二日　棟梁三人へ、廻廊鐘樓經藏等の仕樣帳出來候はゞ講堂方二重屋根にいたし、大分入用も無之候はば二重屋根に積可申樣にと申來候事、其□三人へ申渡也。

金堂屋根葺懸。

四月廿六日　廻廊普請仕樣帳に付、廻廊所々へ入口九ヶ所の分に扉付之樣に申來候事。

講堂西の庇此度本堂之樣に取込、其の上にて二重屋根に仕候と又一重屋根にて組物抔能仕候て少し堂高く樣子能候樣の儀申來、右三ヶ條の義今村筑後、西村和泉、長谷川幾太夫へ申渡す。

廻廊、鐘樓、經藏、講堂何れも修繕せられんとす。就中講堂は元來一重の建築なりしを二重にせんとの考察もあり、又一重の儘にして組物等に精巧なる工作を加へんとの說もありしが如し、然れども幸にして前說は否決せられ、講堂建築は多く前式を變ずること無かりしが如し。

五月十六日　（前略）三の御丸より塔御修覆料之金子三百兩拜領之段、其外段々結構なる儀云々。

塔の修繕には三の丸より特に寄附金あり、然れども三百兩の金子を以て悉皆の修繕を償ふべきにあらざるは甚だ明白なり。卽ち三の丸は塔修繕費中へ多額の寄附金を出したる迄の事實なりしなり。森川世黃が此の塔を以て桂昌院の再建と云ひたるは、此の邊より生じたる誤解なるべし。然れども塔の修繕は幕府の援助の爲めに最も完全に施行され（工作上）、壁畫は塗抹され、天井の反花は葵に變じ、露盤及び請所の金物に葵の紋を見るに至れり。

六月廿七日　於妙音院大講堂鐘樓經藏廻廊等の修覆入札有之候處、當門前魚町大工安兵衛落札之處、銀高其外積以下の帳面不埒故、落札之敷銀並二番札三番札之敷銀留置、明日相談可有之候事切畢。

七月　一日　去廿七日講堂廻廊等之入札落著無之、段々指引之上一番二番の入札主無沙汰に相極、三番の札主京井筒屋七郎兵衛申付候事。

八月　六日　巳の刻棟梁三人入來東院の門修覆之儀如何可仕哉窺申候故、一昨日評定の通各積之通一割引にて西里市右衛門と彌兵衛兩人に申付、可然申渡候云々。」

八月十三日　仁王門土居葺仕掛け京林奉行に付置く。

八月十九日　（前略）上宮王院修覆近日申付候筈、夫より塔、金堂、內陣物見修補仕様相談書より金堂之內陣取置候也。

之より先、金堂外部悉皆落成、今內陣の修補に著手する也。

八月二十日　金堂本尊等北正面へ奉移、臺坐悉く外陣へ取出し、內陣の天井等掃除南座の者共に申付候云々。

八月廿一日　金堂鎭壇築堅め候様兩座の者共へ申付候。

八月廿二日　（前略）金堂鎭壇大引直し四方に板を立、人夫大勢入れ築堅申附候云々。」

斯くして土壇を改築し、高欄は新たにこれに附加せしなるべし。

八月廿四日　金堂內陣每日修理有之也。

壁畫は此の際所々に修理せられたるものならん。然れども前後の記事によりて考ふるに、壁畫を一たび塗抹して更に改作せしか、又は根本より壁を改造して更に畫作をなしたるものにはあらざるが如し。若し彼の壁畫の改作の如き大事業實施されしとすれば、この日誌中必ずこれを特筆するものなかるべからず。只此の日誌中一回も言の壁畫に及べるものなきは、予も意外の感なきにあらず。予は當時多く手を壁畫に觸れざりしことを想像せんと欲するなり。

八月廿七日　講堂修覆に付佛具禮盤等上堂へ移云々。

九月　七日　講堂廻廊修補大工始有之井筒屋へ金子內渡仕下、塔修補之大工加兵衛同九輪方守左衛門へも金子渡し申候。

九月十八日　南部代官大柴混左衛門出張工事檢分の際左の言あり。

（前略）今日一見仕候處に大分伽藍御再興殊に五重塔結構之御修覆珍重に存候云々。

九月二十日　五重塔九輪供養有之、學侶堂方皆參、西之廻廊南之方に著座、仁王講修行、上棟義式棟梁筑後、和泉、幾太夫勤之、衣冠也。仕丁大工瓦師鑄物師等出仕、諸參詣群集作法殊勝也。南座裝束にて出仕也。儀式相澄以後一献有之御酒頂戴、但し供物餅御酒樽赤等悉寺中より用意出之、棟梁中三人へ金子四百疋、大工三人へ鳥目三百疋、其外役人共鳥目二十疋三十疋宛遣、別々に記之。

九月廿一日　塔の九輪邊足代の竹木取置申附候。

是に於いてか五重塔落成せり。而して金堂内陣亦成就せるが如し。

九月廿六日（前略）金堂塔之廻之犬歩石仕置候仕様帳申渡候。

十月　三日　早朝妙音院へ参、五重塔錺金物吟味之上申附打せ候、京都新之承来り候故金堂之柱之龍申附候、尤中院相談也。

十月　四日　五重塔の力士之事新之承に申附段相談有之、並五重塔仁王門土居葺代相渡云々。

金堂上層の支柱に於ける龍及び五重塔に於ける力士は、新たに附加せられたるなり。

十二月七日　南都奉行所へ届出たる修繕建築の目録左の如し。

覺

一、五重之塔　一、御祈禱所
一、金　堂　一、大講堂
一、上ノ堂　一、食　堂　細殿
一、鐘　楼　一、經　藏
一、仁王門　一、廻　廊
一、護摩堂　一、御靈屋
一、勸學院　一、八足門
一、四ツ足門　一、東院廻り築地
一、同所惣門　一、惣社宮

右十八ヶ所前廣神尾飛驒守様へ御斷申、修覆成就仕候次、此度修覆申附之分

一、太子堂　一、上宮王院
一、西圓堂　一、三經院
一、役行者堂　一、綱封藏
一、一切經藏　一、東　室
一、西　室　一、權現社
一、大湯屋　四足門　一、南大門
一、西之大門　新造　一、中の門
一、寄　門　一、北之門
一、山口之門

右十七ヶ所當月中に入札申付、來春修繕仕度奉存候、猶相殘り候分段々修繕仕度奉存候、以上。

元祿九年子ノ十二月

法隆寺惣代　中院

御奉行所

覺

一、舍利堂　一、繪　殿
一、傳法堂　一、禮堂廊
一、東院廻　一、東之鐘樓
一、新　堂　一、金光院
一、西惣築地　一、五所社
一、天滿宮　一、立田社

右十二ヶ所重て修覆仕度存候、唯今御斷申上候、以上。

子ノ極月　日

法隆寺惣代　中院

御番所

如斯覺書を以て申上候、會禰友右衛門迄申入、尙又、西之大門儀八十三年以前に燒失仕、是迄假門にて御座候、古門は八ツ足門三ツ棟造にて御座候得ども、此度致勘略、四ツ足門古き升形抔取組修覆仕度奉存候、云々。

十二月十六日、諸伽藍入札有之京井筒屋七郎兵衛落札。

彼の金堂、塔、中門の三宇は、已に此の年を以て落成せしが、自餘の各宇は頻りに修繕せられたり。今其の要領及び重要なる日誌の一部を左に錄せん。

元祿十丁丑年

一月廿二日　五重塔木形出來故近々江戸へ持參可申條、爲內見南都奉行妻木彥右衛門殿へ覺勝令持參處、對面塔坪見結構之由、甚讃美の上菓子茶出馳走也。

一月廿六日　覺勝江武へ發足、塔之木形持參也。

塔の木形を造りて金堂以下に及ばざるは、塔は三の丸より特に寄附金を得たればなり。

三月一日の日誌中南都奉行妻木氏來りて順見し、覺勝、覺賢案內、妻木氏は修繕の所々一段結構に出來珍重、何れ江戸へ沙汰すべしと云へることを記せり。

四月八日の日誌中に「大講堂修葺半故」云々の文字あり。（又問題外なれども四月廿五日大雨、南都大佛柱立に付覺勝爲賀儀被越、云々。とあり、面白しと思ふまゝ記入し置く）

五月十六日　（前略）聖靈院御拜裏板並茅負、餘りに粗相成に付、仕直し候樣に會所にて申渡有之。

六月十五日　三經院修覆に付、今朝より談義勸學院にて執行也。

七月　三日　（前略）西圓堂修補に付、掛物、刀、脇指等の間に塵ほこり落入□かゝり糸古く成候故、萬一落申

候はゞ人損可申間、盆後に至り掛物悉吟味仕、針金にてかゝり掛申様可然候、云々。」

七月　八日　聖靈院檜皮葺く事棟梁中へ申達吟味申付、今日講堂高欄金物爲打之。

七月　九日　大坂錺屋宇右衛門より聖靈院錺金物等持參。

八月廿六日　（前略）聖靈院御殿檜皮葺畢て、三經院御殿檜皮葺支度の内、云々。

これより以後、修繕工事に關して特に記すべき程の事蹟あらず。只工費の缺乏甚だしく、三人の建築委員は全力を竭して資金の醵集を圖り、大坂、堺、南都、京都、伏見、大津の各地に遊說を試み、多少の成績を得て兎も角も殘餘の修繕工事を進めたり。

元祿十一年戊寅に至り、工事は漸次に歩を進むるの外別に記すべき事蹟なし。只去年に於ける工費の決算に關して、當局者はしば〳〵會合談議せり。

六月十七日の記事に、收支の決算に三貫目の差を生じ、當局者は嫌疑を受けたるを以て誓文を認めたる事あり。又同日の日誌中、左の文字あり。

次に勘定帳奥書

惣合六拾四貫五百七十二匁五分七厘五毛

右納分引殘る四貫三百六十五匁三分三厘

内三貫二百四十五匁は金五十五兩代五十九匁　一兩に付

即ち、昨元祿十年度に拂ひたる工費は六十貫餘即ち千兩餘にてありしなり。而して同年度に於いて修繕せられたる建築物は、講堂、西圓堂、三經院、聖靈院等、其の主要なるものなりしなり、元祿九年に於ける工費不詳と雖も、必ずや十年度に倍蓰するものありしならん。

七月十二日、善光寺本願智禪上人（柳澤出羽守の妹）當寺に參詣し、寺僧と談話中左の語あり。」

如此大分の伽藍結構御修覆出來、今二三宇殘申候段見及候通江戸にて可申聞候。

九月廿五日、米倉丹後守參詣し寺僧と談話せり。日誌はこれを記して左の如くに云へり。

午の下刻、勸學院御出、則、中院、安養院、彌勒院御先に立御案内申上、仁王門より御入、金堂内陣拜見被成、委細彌勒院緣起申上候。次に寶塔は三の御丸樣御再興故御恐有之故歟、壇上へ御上り無之下より拜見被成候。次に常燈籠、次講堂拜見、大部の伽藍結構に修覆出來、各被御精出候故と御稱美也（中略）。一千石にて箇樣に大分之伽藍能修覆出來と重々稱美也（中略）。さて禮堂、廻廊修覆最中の所御目に懸け、當春三の御丸より拜領の金子にて如此是々普請仕候□申上候へば、一段の義と被仰候、云々。

これに由りて見れば、此年の初め三の丸より更に下賜金ありしが如し。兩來工事漸を以て進み、翌年に至りて全部の竣工を告ぐるに至り、元祿七年修繕の企圖ありしより五年にして終に其の目的を完了せり。

以上の日誌によりて推測するに、元祿の大修繕と稱するもの、世人の信ずるが如き幕府の直轄工事にあらず長野工學士が引用せられたる

豐臣氏海内統一の後秀頼の時修繕の功を起し、德川氏其の計畫を繼ぎ、將軍綱吉元祿年間に至りて大修繕功竣れり。

の文字は、或は事實を誤りたるものにあらざるか。而して其の再建にあらずして眞正の意義に於ける修繕なりしことは、これを日記に徵して殆ど疑ふ可からざるものあり。

これを要するに、予は法隆寺伽藍を以て元祿の再建と認めざるものなり。而して長野工學士が再建と信ぜられたる幾多の理由は、予に於いて其の事實を認むること能はざるなり。予は伽藍の年齢を明かに測定し得るものにあらずと雖も、金堂、塔、中門の外部に於ける木材の殆ど全部は、元祿年代のものなることを確信し、同時に、まゝ元祿以前の古材をも混用することを確認するものなり。

終に臨んで言ふべきことあり。世人法隆寺の再建を目して千年の舊觀を存すと云ひ、予も亦これに同意を表するは、其の形式に就きてこれを云ふなり。若しそれ其の物質の年齢を問ふものあらば、誰か其の全部の千年を經過し來りたることを信ずるものあらんや。本寺別當次第記に徵するに、其の金堂修繕は永長元年（明治三十年より八百一年前）元久元年（同六百九十三年前）弘安六年（同六百十四年前）應安七年（同五百二十三年前）等に修繕され、近くは慶長九年（寺傳に由る、明治三十年より二百九十三年）德川家康これを修繕し、元祿九年（明治三十年より二百一年）此の大修繕に逢へるなり。而してこれ等の修繕は皆一部の小修繕にして、斯くの如く修繕に修繕を重ねたるの結果は、其の材料に二百年を經たるもの、三百年を經たるもの、五百年を經たるもの、六百年を經たるもの、七百年を經たるもの、八百年を經たるもの、乃至創立のまゝにして今日に存するもの等、各種の年齢を有するものあるべき道理なり。而して予は實に種々の年代の異りたる材料を發見するものなり。

最後に一の注意すべきものあり。即ち法隆寺伽藍は元祿の際一度悉皆取解き、可成古材を用ひて新たに建立せしものにあらざるやの疑問これなり。此の疑問は建築材料の新古の混同甚だしきものあるにも關せず、其の「繼手」其の「指口」等、力を受くる部分の比較的に異狀少きに憑りて、何人も提出すべきものなるべし。予は修繕の大體の方針、洵に斯くの如くなりしなるべきことを信ず。然れども彼の壁畫はこれを建築物と自在に離合せしむること能はざるものなり。是の故に少くとも壁畫と相關聯せる軸部は、決して元祿の代に一度取解きたるものにあらざることを信ずるなり。然らば其の壁畫及びこれと關聯する軸部の年代は如何。乞ふ、別に課題を改めてこれを論ぜん。（第七編第四章參照）

（備考）長野工學士の論文は建築雜誌第百二十七號に、塚本工學士の論文は同百二十九號に、溝口禎次郎氏の論文は同百三十號に掲載せり。

第三編　法隆寺の建築的性質

（一）七堂伽藍の說

法隆寺は所謂七堂伽藍なり。伽藍は梵語の Sangarama（ダンガアラマ）より來る。音譯して僧伽羅摩、僧伽藍、伽藍等と云

ひ、意譯して衆園と云ふ。これを僧房と譯すれば、則ち其の意義を解釋するに足る可し。蓋し Sangarama は Sangha 及び Arama の合成にして、Sangha は密著或は集合の意義を有し、Arama は娯樂、遊園等の意義を有せり。釋氏要覽に曰く、

僧伽藍摩、梵題也、或云二僧伽雜摩一、此云二衆園一、五分律云、毗沙王施二迦蘭陀竹園一爲レ始也。園者生植之所、佛弟子居レ之、取下生二植道本聖果一之義上也。或云二毗呵羅一、此云二遊止處一。

按するに毗呵羅は又精舍と譯されたり。例せば、Jetavana-vihara を祇園精舍と呼ぶが如し。精舍は即ち寺院の義なり、即ち伽藍の本義を知るに足る。而して其の七堂と稱するは必ずしも七種の堂を云ふにあらず、七は數の具備せるを示すものにして數量を示すにはあらず、是の故に悉堂伽藍と書する者亦理なきにはあらざるべし。蓋し堂の數量と堂の種類の如何は、素と毫も其の伽藍たるに妨げあるものに非ず、只伽藍として缺くべからざるものは、其の勤行を行ふに當りてこれに必要なる諸種の堂宇を具足するに在るのみ。蓋し其の勤行は其の宗義により て各均しからざるべきを以て、伽藍制度は亦宗派に由りて異らざるを得ざるなり。奈良六宗に於ける伽藍に在りては、多くは其の境域の四方に東西南北の大門を開き、就中南大門を以て其の正門とし、其の內部には中門、廻廊、金堂、講堂、塔、鼓樓、鐘樓、食堂、浴室、三面僧房等あり。密教伽藍の制亦多くこれと異るところあらず。降りて禪宗に至りては其の制度大に異るものあり、所謂禪宗の七堂とは三門、佛殿、法堂、方丈、僧堂、浴室及び東司なりと云ふ。此の說未だ俄に信ずべからざるも、要するに此の七種の堂宇は、禪宗伽藍には殆ど常に存在するを例とせり。其の他經藏、鐘樓、開山堂及び三門の外にしば〳〵敕使門の存在するを見る。禪宗以降の諸派に在りては已に復、嚴格なる七堂の制なく、規模頗る整列を缺くものあり。現今七堂伽藍の規模を存するの巨刹は、禪宗に妙心寺、大德寺等ありと雖も、禪宗以前に溯りては、即ち四天王寺及び我が法隆寺を除きて他にこれあらざるなり。然れども四天王寺伽藍は、しば〳〵改築せられて大に古式を失ひ、法隆寺伽藍は依然として千年の舊觀を存す。これ法隆寺伽藍の殊に貴重なる所以なり。

俗間又「伽藍造り」なる名稱を唱ふるものあり。其の所謂伽藍造りとは建物の配置法の如何を問はず、或る一宇の堂塔にして廣濶なる土壇の上に立ち、其の床は筵蔍を以てこれを敷き、更に其の內に土壇を築きて佛像を其の上に安置するもの、これ世間の所謂「伽藍造り」なり。然れども「伽藍造り」なる語は、決して建築學術上の名稱にはあらず。世間又伽藍の語を堂宇に代用するものあり、然れどもこれ決して妥當なりと云ふべからず。これを要するに、伽藍は即ち佛法專修の道場として解釋すべきものなりとす。

（二）建築の配置

伽藍建築の建物配置は凡て佛事に因むものなるを以て、佛教の眞義に通曉するにあらざれば、未だ甚だ解し易からざること多しとす。一般に建物配置は人體を象るの說あり。而して法隆寺伽藍の建物配置は、佛面に象るものなりと云ふ。蓋し其の廻廊の輪廓は即ち佛面の形を劃成するものにして、其の前額は法を講じ眞理を啓くの講

堂に當り、兩耳は東室及び西室に當り、眉は鐘樓及び經樓、兩眼は金堂及び塔婆にして、鼻孔は呼吸を司るべき中門に當り、口は出入を司るの南大門に當るものなりと云へり（第十四圖）。然れどもこれ實に附會の說に過ぎざるが如し。憶ふに法隆寺伽藍の配置は其の創立の際に於いては、現形と少異ありたることは疑ふべからず。これを當時の實例に徵するに、奈良朝に於ける伽藍の「プラン」は多くは第十五圖に示せるが如く、大安寺、元興寺四天王寺等に於いて其の規模を窺ふことを得べきが如し。特に其の四天王寺に於ける配置法は、方今吾人の親しくこれを觀察し得るところなり。思ふに法隆寺亦大にこれに類するの趣ありしなり。卽ち廻廊は單純なる長方形をなしたるものにして、今日の如く北方に凸字形に突出することなく、講堂は其の中央に立ち、東西北の三面には僧房繞り、經樓、鐘樓は廻廊を破ることなくして別に適當の位置に遊離して立ち、南大門は遙に北方に立ちて中門と相距ること遠からざりしことを信ぜざるを得ず。果せるかな、其の講堂は一たび北室と共に燒失し、其の再建の時に當りて其の位置を北室の蹟に移すの記錄あり。是の故に現存の講堂を南方七十餘尺の所に移して其の舊位に復せしめ、左右の廻廊は鐘樓及び經樓の南方折れて、北方に向ふ所より一直線に講堂に連結せしむる時は、鐘樓經樓は全く遊離して、講堂と北室との中間に左右相對峙するの觀を呈するなり。而して講堂の位置に建つるに北室を以てして東西兩室と相對せしめば、全體の配置全く舊に復するを得べきなり。現今の「プラン」は實に講堂の位置を變更せるに由りて生ぜる結果にして、其の大體少しく嚴整を缺くの傾あり。特に其の金堂の廻廊の中心に立たずして一方に偏したる、塔婆が廻廊の外に立たずして其の內部に包擁せられ、而も金堂に對して他の一方に偏したる、共に破格の法と云はざるべからず。然れども此の破格は未だ大體の調諧を減却するに至らず、否寧ろ其の意匠の甚だ自由にして縱橫到らざる所なく、却つて一種の趣味を生ずるを認むるなり。蓋し講堂移轉に由りて生ぜる配置の變更は失敗に歸せずして、却りて能く成功せるものと云はざるべからざるなり。

法隆寺伽藍の配置に就きてこれを觀察すれば、其の地相は南面せり。其の意は中正を示すにあり。北緯の國に於いては日南中するときは其の最も高度に達するの時にして、左右の一方に偏せざるの時なればなり。是の故に南大門は全域の正門たり、卽ち一般の外廓の門をなす。內部には又必ず一區の內廓あり、此の中には全域の第一位を占むる金堂あり。次には佛舍利を藏する塔婆あり、塔婆の絕頂に九輪を附するは其の佛舍利あるを示すものなり。次には敎理を講ずるの講堂あり。これ等の建物は所謂廻廊を以てこれを圍繞し、南面の中央には必ず中門を設け通例金剛力士を此所に安置す、故に俗名を仁王門と云ふ。金剛力士は卽ち佛法を守護するの神なり。廻廊の左右に經樓及び鐘樓あり、以て時刻を報ずるの用に供せり。

予曾てこれを信ぜり。凡そ、奈良朝に於ける伽藍制度には概して一定の法則あり、卽ち全域の中央に廻廊を以て一區を劃し、中門は其の前に、金堂は其の後に、而して塔婆は多くは廊の前面に左右相對し、經樓、鐘樓は後面に相對し、講堂は正しく金堂の後に立つ。以上の七宇は伽藍の最要素をなすものにして、若し七堂伽藍をして七種の堂宇たらしめば、所謂七堂と名くべきもの卽ちこれなり。蓋し伽藍はこれ學問寺なり、死者の爲めに設けたる兆域にはあらざるなり。是の故に時間を刻して佛に奉仕し、經文を講じ、專心佛敎の眞理を研究するが爲めに構

造せる建築に外ならざることを知るべきなり。是の故に予は伽藍を解釋して、佛教專修の靈場と云はんと欲す。其の講堂は吾人の所謂講義室にあらずや、其の金堂は所謂研究室なり、塔婆は即ち教祖の墳墓なり、食堂あり、浴室あり、鐘樓あり、東西北の三室は即ち寄宿寮なり。宜なる哉、伽藍の配置及び名稱等の宮城、官衙校舍等の制度と符合するところあるや。四天王寺には門に青龍白虎の名を存し、興福寺には青龍白虎の外更に日華月華の兩門を存し、菩提發身の二門を備へたり。唐白馬寺に至りては、不老皇嘉の名を留むるを觀察すべし。而して今法隆寺の配置を觀察せよ、（第十六圖）何ぞそれ大內裏八省院の配置と相似たるや。其の講堂は明かに大極殿を想像せしめ、鐘樓、皷樓は蒼龍白虎の兩樓を追想せしむ。而して其の如何に大內裏豐樂院建築の配置と相酷肖するやを視察せよ、其の豐樂殿は講堂と相當り、栖霞霄景の兩樓は鐘樓、皷樓と相當れり。又眼を轉じて彼の鳳凰堂を見よ、其の本堂翼廊高閣の意匠の存する所を考ふるに、亦其の深因の玆邊に在るを知るべし。其の細部に至れば則ち柱礎、土壇、甎壁の制の如きは、即ち全く其の符合するを見る。屋蓋及び外部の手法に至りても亦、或は多少相似る所なかるべからず、これ大內裏建築の方式を以て、反つて當時の伽藍建築を推し得べき所以なりとす。

そも〳〵伽藍建築の配置は、其の起源を印度に發するは素より論を俟たず。而して其の一たび支那に入るや、支那在來の宮殿邸宅は大に其の形式を替ふることなくして直に伽藍として用うることを得たるなり。蓋し支那の宮殿邸宅の配置は偶々佛像を安置し、これを禮拜するに大なる障碍あらざりしを以てなり。而して佛教一たび我が邦に入るや、我が邦古來の茅屋は未だ以て尊嚴なる佛像を入るゝに足らざるを以て、爰に始めて支那の形式に倣ひて寺塔を建立し、伽藍の制を布くに至りしなり。今それ支那に於ける宮殿の配置は其の伽藍に於けるものと大差なしとせば、我が邦に於ける宮殿と伽藍と其の制を均しくする亦當に然るべし、我が邦の宮殿、伽藍共に均しく其の制を支那に採りしものなればなり。斯くの如き伽藍の制は、吾人これを禪宗以前の各宗に於いてこれを見る、獨り我が法隆寺は少しくこれと趣を異にし、殊に金堂と塔との位置に於いて異狀を呈したり。我が邦古來の工匠は其の特異の點あるを以て、これを其の傳記に徵して特に百濟樣の伽藍と名づけ來れり。吾人は未だ百濟の制が隋唐の制と若干の差異あるやを知らず、亦法隆寺の制の果して純然たる百濟式なりしや否やを知らずと雖も、然れども、吾人は明かに此の伽藍制度が、自餘の伽藍制度と相異り、自ら別に一期を成すことを認めざるべからざるなり。

（三）建築形式及び構造

法隆寺伽藍の諸堂宇は其の年代各同じからざるを以て、亦其の形式と構造とを均しくせず。蓋し其の年代と其の形式構造とは必ずしも符合することなく、甲の年代に於いて全く乙の年代に於ける形式構造を模倣することあり、或は其の一部を模倣することあり、況んや其のしば〳〵履行せられたる修繕は、順次に形式構造上に各時代の趣味を混じ、往々にして其の眞相の如何を判知すべからざらしむ。法隆寺伽藍諸宇の形式構造に關する判斷は、實に容易にあらざるなり。

吾人は劈頭先づ其の金堂、塔婆、中門の三宇が相將ゐて同一の形式構造に歸することを觀察するなり（第十七圖）。吾人はこれに與ふるに推古式の名を以てせんと欲するなり。蓋し前編已にこれを說くが如く、法隆寺伽藍が天智の朝に火災に罹れりと否とに關しては世間大に其の說あり、然れども、予を以てこれを見れば、これ決して吾人の深く爭ふべき大問題にあらざるが如し。若し法隆寺の建築推古天皇十五年にありて、爾來祝融の災なしとすれば、今日に至るまで千二百八十九年を經過し來りたるもの、和銅元年の再建とすれば、千百八十八年を經たるもの、其の間百一年の差異を見るなり。然れども、吾人の第一の問題は、建築の樣式及び構造の如何を論ずるにあり、其の年齡即ち今日に至るまで幾年を經過せしやを論ずるは、即ちこれ恰も第二の目的なり。

建築の年代或は數十年、或は數百年の前後あらん。然れども其の形式均しく、其の構造法均しく、其の一般の建築的性質だに均しくば、これ學術上同時代の建築と云ひて可なるべく、若し一旦にして互に相異ならば、其の年代全く均しきも、これ學術上別時代の建築と云はざるべからず。世の考證家は予これを知らず、建築學上の眼孔只此の三建築の性質如何を視察するにあるのみ。

今、法隆寺の三建築を視察すれば、其の「垂木一支」は共に殆ど九寸なり、其の「中の間」と「脇の間」の比は共に殆ど十と七なり、其の「雲形の肘木」は殆ど同一なり、其の「隅木」の構造は共に殆ど同一なり、其の柱の「エンタシス」より成るの事實は殆ど共に同一なり。吾人は此の三建築を以て同時代の建築と見做し、これを同一の流派となすに猶豫せざるものなり。吾人は、今其の建築落成の期が推古の時代に屬するや、或は和銅年代に屬するやを明言せず、然れども、予はこれを以て斷じて推古派と名づくるに躊躇せざるなり。吾人は不幸にして、他に和銅年中の建築にして、今日に存在するものあるを見ず、然れども彼の南都藥師寺の塔は、尙能く天智式の標本として觀るべきもの、吾人これを以つて法隆寺に比較すれば、明かに其の連絡するところあるを認め、而して法隆寺の形式は、當にこれに先だつこと一期なるべきを觀察し、又推古時代に於ける各種の遺物と法隆寺建築とを比較すれば、其の性質を均しくするもの一にして足らざるなり。是の故に、若し法隆寺果して一度火災に罹れりとせば、其の再建の際能く古式を收め得て、毫も當時の天智式に準はざりしものと言はざるべからず。

これを要するに、法隆寺の一たび火災に罹れりと云ふは正史の傳ふるところにして、決して漫に抹殺すべからず、況んや其の未だ嘗て燒失せずと云ふ有力なる反證あらざるに於いてをや。たゞ此の事深く金堂内の壁畫に係累を有せり。壁畫は建築と分離すべからざるものにして、壁畫と建築とは必ずや其の齡を均しくせざるべからざればなり。然れども壁畫は實在のものにして、吾人はこれに由りて充分の研究を致すべく、傳記は無形のものにして能く其の眞影を捕ふべきなし。これ吾人の法隆寺の年代を論ぜんと欲すれば、先づ其の壁畫を論ぜざるべからざる所以なり。

予は第七編第四章に於いて、壁畫を論じ、併せて伽藍の年代を推定せんと欲す。今は僅に先づ彼の三建築が共に同時代に屬し、同流派に屬するものたるを明言するに止めん。

講堂建築はこれ奈良派の流れを汲みて岐道に入るもの、これを其の年代に徵すれば其の平安朝の製作なること

を知る。鐘樓及び經藏は左右相對時して殆ど同一の形式と構造とを有し、亦甚だ平安盛大の趣味に富めり。廻廊に至りては、其の建築の極めて簡單なると、其の無稽なる修繕を經たるとに依り、新舊錯雜、玉石混淆の奇觀を呈し、吾人をして一言以て其の形式構造を說くに苦しましむるものあり。其の他の諸宇に至りては、或は上御堂及び西圓堂の鎌倉時代に成れる、南大門の足利時代に成れる、西大門の德川時代に成れる等ありと雖も、今一々これを論ずるに及ばず、其の詳細に至りては、乞ふ次編より順次各宇に就きてこれを說かん。

第四編　中門建築說

緒　言

法隆寺南大門を經て北行數百步すれば、一樓門あり、巍然として土壇の上に聳ゆ、これを中門と名づく、俗に仁王門と稱するものこれなり（第二十三圖）。

五尺の土壇は中門兩纔の間に八級の石階を備へ、雄健奇拔なる建築は其の上に屹立せり。其の規模宏大なるにあらずと雖も、一種の氣韻は洋溢として漓るが如く、其の裝飾華麗なるにあらずと雖も、一種の雅趣は瀟洒として掬すべきものあり。左右の廻廊は漸次に其の屋背を上方に翻し、其の尤も適當なる位置に於いて中門と相接し、呵吽の金剛力士は、赤黑の色を分ちて其の姿勢生けるが如く。其の穹然たる軒は、深く挺出して奇拔なる輪廓を作り、其の坦々たる棟は長く延びて森嚴なる相貌を作す。右を仰げば金堂の高く空に聳ゆるを觀、左を顧れば塔婆一尖雲に入るを觀、而して前面遠く九間の講堂の廣濶なる土壇の上に立つを望む。蓋し其の配置と形式とは、爰に相合して始めて法隆寺の法隆寺たる所以を爲す。其の幾多の衆生をして渴仰の念を起さしむる、亦偶然にはあらざるなり。

一　歷史的考證

彼の和銅再建論を除くの外は、世間未だ曾て中門の再建に係れることを說くものあらず。流記資財帳に云く、

門伍口　佛門二口之中　一口在金剛力士　長四丈二尺　廣二丈九尺

卽ち方今現存するものとほゞ相符合するを見る、乃ち予は其の千有餘年の舊觀たることを信ずるなり。其の修繕の沿革は則ち先きに記する所あり、古今一陽集に、「永曆二年八月十一日修補、延文二年修補」の文字見えたり。

（備考）法隆寺流記資財帳に揭ぐる尺度は、天平尺を以て標準とせり。天平尺は現今曲尺の九寸八分に當る。以下之に準ず。

中門現今の姿勢は已に幾回の修繕に逢ひて、まゝ古式を失ひたるものあるが如し。蓋し其の凡そ每二百年以內に施行したるべき大修繕なるものは、往々にして殆ど全く改築の如き性質なりしが如く、其の大體は能く古式を存すと雖も、細部の手法に至りては、當時の工匠共の嗜好に任せて適宜に經營し、多く古式を顧みざりしものありしならん。現今下の重に於ける隅雲肘木の如きはこれなり。然れども其の大體の骨格は依然として千年の形式

を改めざるは、これを金堂内の玉蟲厨子に徴して明かなり。吾人これを以て推古式の標本となす、亦中らずと雖も遠からざるなり。以下論ずるところは現存の形式に就きてこれを道ふ、素よりこれを以て直に推古の當時を推さんと欲するの微意を存するなり。

ニ　プ　ラ　ン

法隆寺中門は其の間數の偶數なるを以て特に有名なりとす。而して其の梁行の三間なるも亦異例とするところなり。凡そ伽藍の中門にして斯くの如き「プラン」を有するものは本邦只此の一宇あるのみ。古今目錄抄にこれを解釋して曰く、「中門二階也、四間也、無二正面一者聖人者不レ繼二子孫一之表識也」と。黒川氏は該建築を以て和銅元年の再建となし、由りて以て其の附會の說ならんことを疑へり。然れども若し中門にして和銅の再建とするも、推古の原式に由りてこれを造營するものとせば、其の說亦取るべきものなきにあらざるべし。中の間は其の廣さ脇の間に比して十と七との如く、柱の大さは中の間の六、七一分の一に當る。上層は下層に比すれば其の大さ著しく減少するを見る、蓋し其の「エレヴェーション」をして、善美ならしむるの意に出づるなり（第十七圖）。其の上下兩層「妻」「平」に於ける柱間は「垂木割」の表に於いてこれを見るが如く、變化極めて甚だしく、殆ど其の意匠の由りて來るところを端倪すべからず。これを要するに、この門の「桁行」と「梁間」との比例は、他の門に於けるが如き甚だしき差異を示さず。吾人は後代に於ける多數の門を見るに、其の「桁行」の五間又は七間の長きに亙れる際に於いても、其の「梁間」は依然として二間に止まり、「プラン」の形狀、甚だ狹長に失し、爲めに「エレヴェーション」の美を致すに於いて頗る不利益の點なきにあらず。獨り法隆寺の中門は、これを他に比すれば、著しく「梁間」大にして、全體狹長に失することなく、爲めに「エレヴェーション」の美を致すに於いて、甚だ便宜あることを觀察すべきなり。

三　エレヴェーション

吾人は遽くして中門を望む時、其の形狀の異常にして、一種云ふべからざる趣味の其の間に存するを觀察すべし（第十八・二十圖）。蓋し

第一　門の中央に柱の樹立すること。
第二　柱の形狀の異樣なること。
第三　下層の屋根長く突出すること。
第四　上層の「鉤欄」下層の「側柱」以外に突出せざること。
第五　上層の輕快なること。
第六　全體の形狀沈重にして安定の觀あること。
第七　「鉤欄」の形異樣なること。

第八　「繪様」及び「彫刻」の缺乏すること。

第九　細部即ち「斗」「肘木」等の異様なること。

等これが源由を爲さざるはなきなり。然して其の「梁間」の比較的大にして、「桁行」の比較的に小なるが爲めに、後世の三門の如き淺薄の觀を脫し、彼の其の形を正面に求むればこれを側面に失ひ、これを側面に得ればこれを正面に誤るが如き缺點を免れたり。下層の軒は勾配極めて緩にして、「引き渡し勾配」三寸二分に過ぎずと雖も、其の柱以外の突出は實に其の可成的最長の極に達したり。斯くの如きは吾人の他に其の例を見ざるところなり。又近世の三門に在りては、上層に於いて其の兩端の間を縮小するのみにして、中の間に至りては則ち下層の間隔に倣ふもの多しと雖も、獨り法隆寺の中門は上層の各間皆適當に縮小せられたり。是の故に一方に於いては無量の變化相扶けて美觀を作り、一方に於いては上部の輕快にして手法の自在なる所以を表示して、完美なる形式を大成せり。而して其の全然繪様及び彫刻を缺くは、以て當時の天眞素朴愛すべきものあるを見る。乞ふ次に一歩を進めて其の「プロポーション」を論ぜしめよ。

四　プロポーション

吾人本邦古今無數の建築の中に就きて、其の「プロポーション」の完美なるものを求めば、即ち我が法隆寺の中門これに庶幾し。

今其の要領の一二を擧ぐれば、下層に於いては其の「中の間」と脇の間との比、殆ど十と七とに當ることは、吾人已にこれを觀察せり。上層は、其の正面に於ける「中の間」と「脇の間」との比、殆ど下層に均しく、以て諧調を得たるものあり。側面に至りては即ち其の比大に異り、以て變化に富める所以を致せり。其の高さを以てすれば、其の大體の方針、常に建築の高きに失するなからんことを務むるにあるが如し。下層の柱は、其の「大さ」及び「柱間」に對して已に長からず、柱と軒の間隔亦これに準ぜり。「腰屋根」は、飽くまで其の高さを減ぜんとするの結果として勾配非常に緩かに、軒の挺出從つて深し、上層は力めてこれを低からしめ、而して其の屋蓋は最も適宜の高さを得たることを觀察すべし。其の細部に關しては、其の分布を以てすれば、則ち恰も其の所を得て繁簡宜しきに合ひ、其の形狀を以てすれば則ち大小其の規を誤らず、輪廓其の法を過たず、全體の建築形式に對して能く諧調を保つことを觀察すべきなり。

左に我が中門と京都南禪寺三門との實測圖（第二十一圖）を掲げて以て、兩者が如何に其の「プロポーション」を異にするやを示す。吾人は此の比較圖に對して、勞頭先づ南禪寺三門の甚だ高きを觀察すべし。其の下層、其の腰屋根、其の上層、其の屋蓋、これを法隆寺中門に比すれば一々其の高きことを觀察し、同時に如何に腰屋根の淺くして全體固定の觀に乏しきかを認むべし。其の細部に就きては上下兩層組物及び高欄等の獨り纖巧にして、他の部分と諧調を保つこと能はず、所謂雄健奇拔の姿勢を缺くことを感ぜずんばあらず。それ南禪寺三門は德川氏初期の製作に係り、近世建築中の傑作と稱するもの、而してこれを千三百年前の中門に比して其の長短果して如何。

吾人は今其の長短を論ずるを要せず、只其の形式の古今若干の異同あるやを詳かにするを得れば則ち足るなり。

五　垂木の制

「垂木割」には一定の法則あることなし。曾に其の「垂木」の大さの一定せず、其の「一支歩み」の一定せざるのみならず、其の一間の「垂木割」すらも亦均一ならざるなり。

		長（尺）	支數	一支（寸）
下の層	平	中	一一・六	一三・	八・九二
		脇	八・三	九・	九・二二
	妻	中	一一・六	一三・	八・九二
		脇	八・三	九・	九・二二
上の層	平	中	九・〇	一〇・	九・〇〇
		脇	六・五	七・五	八・六六
	妻	中	七・四	八・	九・二四
		脇	五・九	六・五	九・〇七
軒の出				一二・〇	

即ち「垂木割」は、甚だ放縦にして一定の規律を缺くと雖も、大凡そ一支九寸と見做すべきものなるべし。其の他前面「中の間」は、これを十三支に分つと雖も、其の後面に於いては反つてこれを十二支に分つを見る。蓋し當時建築の制は重きを「垂木割」に置かずして、却つて全體の形狀に置きたるもの、これが源由を爲さずんばあらざるなり。後世建築に在りては「垂木割」の事たる、其の尤も重要なるものの一にをり、これを規定すること極めて嚴密なり。是の故に精巧は則ち精巧を極むと雖も、反つて纖巧に失するを免れず。これを當時建築の木割法に由らずして意に任せ心に從ひ、縱横經營したるものに比すれば、恰も元祿以降の艶美の、桃山時代の豪放に於けるが如きものあるなり。

（附言）寛文十一年某なるもの、本邦各所の建築物を觀てこれが記を作る。其の法隆寺五重塔の條に曰く「土居二丈一尺椽掛様不定故略之云々」と、即ち其の垂木割の支離滅裂にして拾收すべからざりしを知る。塔婆已に然り、中門、金堂以下亦當に斯くの如くならざるべからず。即ち知る、法隆寺建築に於いては元祿大修繕の以前に在りても、亦一般に垂木割なるものの規定なかりしことを。亦知る、元祿の大修繕に當りて、强ひて當時の製に從ひて垂木割を改めざりしことを。

六　構架式

其の形式の特異なるが如く、其の構造も亦特異なるものは法隆寺建築なり。蓋し本邦建築は古來構造的眞誠を

遵奉すること極めて厚きを以て、其の形式は常に其の構造と一致せり、これ法隆寺の構造の極めて趣味ある所以なり。予は法隆寺建築の構造を評して、これを井籠式と名づくるなり。人若し其の義を知らんと欲せば、乞ふ、斷面圖に就きて其の詳細を見よ（第二十二甲・二十二圖乙）。下層の柱以上には五層の井籠を重疊し、其の上に「垂木」を架け「敷桁」を布きて以て「垂木」を抑壓し、更に其の上に上層の柱を建つ。柱以上は再び下層の井籠式を反覆し、終に小屋に至り、屋根に至る。其の「尾垂木」「隅木」等の制に至りては、これを圖面に讓りて爰に詳記せざるべし。軒は建物の宏大なるにも關せず「一と軒」なり、而して其の「垂木」を支承するものは單に一條の桁にして、別に「桔木」のこれを支ふるあらず、桁は各柱の面に於いて「雲形肘木」に支承せられ、「雲形肘木」は「斗」の上に、「斗」は「尾垂木」の上に立てり。是の故に軒の重量は、悉くこれを「尾垂木」の上に普及するなり。是の故に「尾垂木」の制は尤も強固を主とし、これを支ふるに長き「肘木」を以てし、「肘木」を支ふるに巨大なる「雲形肘木」を以てす。「肘木」は重量を承けてこれを柱に傳ふるの要路に當り、壁を貫きて內外に亘らしめ、而して其の內部に於ける實質をして、其の外部に露はるゝものよりも大ならしめ、以て堅牢の實績を擧げしめんことを企圖せり。

以上は中門建築構造の梗概なり。各部の詳細は斷面圖これを解說すべし。吾人はこれを熟視するの際に當り、一般に其の木材の甚だ大ならざることを觀察すべし。而して其の寧ろ細小に失するものあると、構架の方法寧ろ迂拙に屬するものあるとに由り、軒は漸くにして垂落し、殊に隅に於いては終に支柱の必要を生じ來り、柱は連絡堅牢ならざるが爲めに終に傾斜を生じ、各部の用材の構架强固ならざるが爲めに、終に支離滅裂の慘狀を呈するに至る。蓋し古人が力學上の知識を缺くを以て構造の方針を誤ると、指口纖手の極めて簡單にして、殆ど常に嵌合緊結の施工なきに由りてなり。

七　雲斗、秤肘木及び雲肘木

「エンタシス」より成れる柱を承けて、これを「ロガリスミック、カーヴ」より成れる軒に傳ふ。これをして直線ならしめんか、其の强剛に失すると其の連絡の圓滑ならざるを奈何せん。是の時に當りて其の尤も適當なる手法は吾人これを法隆寺に見る。「雲斗」「秤肘木」「雲肘木」の應用これなり（第二十四・二十五・二十六圖）。

憶ふに當時「斗」の用途はこれを知れるなり。當時の建築術には、人已に「三ツ斗」の用法を知れるなり。而して法隆寺建築に獨り此の異樣なる組物を用ひたるは何ぞや。蓋し一は構造の堅牢を企て、而して一は外觀の美を圖りしものに他あらざるなり。已に外觀の美を欲す、これを如何にすれば則ち可なるか。纖巧に失すれば則ち建築形式の頽落たる所以と相納れず、粗笨に過ぐれば則ち其の瀟洒なる所以と相反す。是に於いて其の形粗大にして而も卑に陷らず、簡素にして而も野に流れず、これ此の「雲斗」及び「雲形肘木」が獨特の長たる所以なり。乞ふ、審に細部の圖に就きてこれを視察し、如何に其の輪奐の秀美なるかを見よ。「雲斗」及び「雲肘木」は、それ始より美なり、然れども今玆に「エンタシス」なる曲線と相照應して、更に其の美を致せり、爰に建物の輕快なる姿勢を扶けて、更に其の美を示せり。吾人は三井法輪寺と岡本法起寺とに於いても均しく斯の「雲形肘木」の手法を見

る。蓋しこの兩寺は法隆寺と同胞の關係を有するものなればなり。

「枓肘木」の形狀は一種特異にして、他に決して其の儕を見ず。卽ち、其の大體の意匠のある所を調査するに、其の輪廓は普通の「肘木」の如く、第二十七圖に於ける(二)の甲乙丙丁なる一片の下端を曲線形に作り、以て甲乙丁戊の如くならしめたるものにあらず。元來(イ)に於けるが如くAB、CDの如き彎曲せる一片を取り、これをEFなる水平線を以て切り、更にGHなる曲線を以て切りたるの性質あり。而して其の特に注意すべきものは、卽ちGH線が鉛直をなさずして、却つて外部に向つて凹曲線をなし、I點に於いて無限の勢力を作るにあり。爰にI點の勢力あり、依つて以て、上部の傀偉なる「雲斗」を支承して、尙且つ綽々たる餘裕あるを示す。其の意匠の富贍なる實に驚歎の至りに堪へざるところなり。

案ずるに本邦「肘木」の形式を大別すれば六種あり。左にこれを圖解すべし。(イ)は卽ち法隆寺に於けるもの。(ロ)は平安朝の建築に賞用せらるゝもの。(ハ)は禪刹に賞用せらるゝもの。(ニ)は近世の建築に用ふるもの。(ホ)は卽ち「船肘木」にして、(ヘ)は「繪樣肘木」なり。吾人若し此の數種の「肘木」の中に就きて、其の尤も奇拔にして趣味に富めるものを選まば、吾人は第一指を法隆寺の「肘木」に屈せざるを得ざるなり。

「枓肘木」及び「雲斗」は、上層に於けるものは、これを下層に於けるものに比して、其の高きこと一寸なるの事實を觀察すべし。思ふに、これ位置の高低に由りて生ずる視覺の錯誤を矯正するの意に出づるもの、其の用意周密なりと謂ふべし。

八　軒廻及び屋根

「軒廻り」は日本建築中に於いて、構造上並に美觀上最も難しとするところなり。然れども當時の建築術は別に活路あり、由つて以て容易に此の困難に堪へ得たり。卽ち其の手法は中庸に止まりて過大に至らず、法則に拘泥せずして自在を主とせり。

軒の「反り」は、吾人其の極めて僅少なるを觀察すべし。下層に於いては「茅負」の「反り」一本、上層に於いては同一本餘なるが如し。然れども當時の建築術は、蓋し「軒の反り」を規定するに、「茅負」を以て標準となせしものにあらず、只肉眼を以て其の適否を判定せしのみ。

「裏甲」は、創建の際或はこれを缺きたるものなるべきの疑ひあり。何となれば、彼の推古式建築の標準たるべき玉蟲厨子にこれを缺くのみならず、天智式の標準たるべき藥師寺三重塔等にも亦これを缺けばなり。金堂、塔以下皆な此の疑ひを存すべきものならん。

「簀甲」の彎曲は、吾人其の極めて少なきを觀察す。其の「下り棟」と「破風掛瓦」の間、僅に一條の「止根丸瓦」を置くのみ。其の後世の制度に於いては、通常此の間に幾條の「袖丸瓦」を用ひ、且つ、格外に大なる「棟を作るよりして、爲めに豪華に流るゝの癖あり。當時、制度の質朴して簡素強勁なる手法を貴びたるは、吾人これを以て其の一班を窺ふに足れり。然れども、其の「簀甲」と「平流」との分界甚だ明瞭を缺き、「下り棟」は其の兩者を區畫すべきの

職務を失ひて、其の半ばは「箕甲」の裡に沒せり、其の手法や迂拙と云はざるべからざるなり。屋根の「反り」の線は後世に至りては皆圓弧を以てこれに充つと雖も、當時の制は即ち然らざるが如し。其の曲率上部に小にして漸次に增加し、下部に至れば則ちます〳〵其の增大するを見る。今、其の曲線を視察するに、吾人は容易に其の「ロガリスミック、カーヴ」の一種に屬するものなることを知るべし。（勾配は金堂の部に譯かなり）

棟は其の幅極めて狹く、「駄斗瓦」を以て高く重疊せるを見る、亦古式なり。其の兩端は、方今「鬼瓦」ありと雖も、其の初めに當りては、必ずや「鴟尾」の有りしを疑はざるを得ず。何となれば、推古の朝の作にかゝる玉蟲厨子、奈良平安の宮城建築等に、「鴟尾」を用ひたるの事實あればなり。

「隅棟」の制は圖に示すが如く二段より成り、「鬼瓦」の形は各所皆多少の異同あるを見る。」

（附言）西大寺資財流記帳に其の金堂の建築を記して云く、

藥師金堂一宇、長十一丈九尺廣五丈三尺。

蓋上東西金銅沓形各重立金銅鳳形各咋銅鐸、蓋上中間金銅火炎一基中在金銅茄形居銅蓮花形令持於金銅師子形二頭踏金銅雲形、云々。

又大安寺伽藍緣起に云く、

一卽　天皇位、十一年歲次己亥春二月、於百濟川側子部社乎切排而院寺家建九重塔、入賜三百戸封、號曰百濟大寺、此時社神怨而失火、燒破九重塔並金堂石鴟尾、云々。

想ふに、蓋上に鴟尾即ち沓形を置くの制は、推古より寧樂の朝に通じて宮殿及び伽藍の主要なる建築物に行はれたるものか。此の記事或は法隆寺に（少くとも其の金堂に）鴟尾を用ひたるの一考證にあらざるか、因つて附記す。

九　柱制及び其のエンタシス

中門建築中に就きて吾人が最も奇とするところは、其の柱の形狀に若くはなし。其の柱は礎盤なくして直に地上に樹立すること、猶、希臘「ドリック」式に於けるが如く、而して其の輪廓は希臘の所謂「エンタシス」と名づくる曲線より成り、其の直徑は底部に於いて一尺七寸六分ありと雖も、底部より上方柱長三分の一の所に於いては一尺八寸四分餘となり、三分の二の處に於いて再び一尺七寸六分となり、其の頭部に於いては迫りて一尺四寸となる。

以上の結果より其の形狀を考ふるに、其の輪廓は下部より柱長三分の一に當れる所を起點として、上下に向ひて同一なる曲線を畫くものにして、上部長く延びて「大斗」に至り、下部は短く地盤に畢る。これ「クラシック」建築の所謂「エンタシス」と相均しからざる所以なり。然れども更に一歩を進めて考ふれば、彼の「エンタシス」と唱ふるものは、數學の所謂「コンコイド、オブ、ニコミデス」或はハイパボラに近似の線にして、法隆寺中門の柱の輪廓も亦、これと同性質の曲線より成るものと認めて可なるものなり。只東西の人の嗜好の異るよりして、此の曲線の係數に些少の差異を生じたるに過ぎざるなり。其の他又「大斗」の下に「ネツキング」の意ある「皿斗」の一種あり。若

しそれ、以上の事實を解釋するに歴史的觀察を以てし、東西交通の結果となすは、予の曾て深く信ずるところなり。

一〇　破風

「破風」は其の形甚だ簡素にして、「反り」亦甚だ多からず。其の頭尾に於ける「增し」「長さ」と「幅」との比の如きは皆後世の意匠に由れるところならん。其の「反り」の少きは即ち「箕甲」の彎曲少き所以なり。

「破風」に關しては、吾人の特に注意すべきものあり。他なし、其の「轉び」の無きの事實これなり。蓋し「破風」をして全く鉛直ならしむるときは、其の「妻流れ」の屋根の斜線の爲めに底部を衝かれて、頭部は前方に傾き底部は後方に退くが如く見ゆるものなり。今若し「破風」をして少しく「轉び」を有してしめば、其の結果は將に非常に「轉び」を有するが如く見えんとす。只幸にして「ベルスペクチヴ」の作用に由りて、能く斯の事實を消殺するなり。憶ふに古人の單純なる嗜好は、「破風」の直立を以て美とせしと雖も、後代の人は却つてこれを美とせず、近世に至りては其の思考の複雜と嗜好の緻巧とに由りて、ます〳〵「破風」の傾斜を大ならしめ、爲めに其の「瓦割」をして互に相並行せしめずして却つて扇形をなさしめ、一方に於いては能く或る嗜好に投じ得たるも、他の一方に於いては却つて大に手法の自由を減殺せり。「懸魚」以下の細部に至りては、別に大に注意すべきものなし。只其の「鰭」無きは即ち當時の制として見るべきものとす。

「眉」は圖に示すが如く、二條を畫き其の彫法大に近世の趣あり。蓋し、これ舊式に法らずして、後代の嗜好に由りしものならざるべからず。

一一　鉤欄及び支柱

法隆寺建築細部の中に就きて其の趣味に富めるものは、「雲形肘木」に亞いで「鉤欄」あり。其の「木割」の近代のものと霄壤の差異あるのみならず、其の「組子」の卍形なるは尤も新奇とするところなり。又「地覆」を支承せる「三斗組物」の中間に、一種の異樣なる手法を用ゐたり。「束」にあらず「蟇股」にあらず、正に其の裏を析るものにして、明かに「束」より「蟇股」に至るの變遷を示す。而して其の特に奇とすべきは、即ち「鉤欄」と側柱との間隔極めて小にして、歩行の餘裕あらざることこれなり。即ち知る、「鉤欄」の全く裝飾的意匠に成れることを。乞ふ、塔婆建築第九節を參照せよ。吾人は亦上層の四隅の軒下に於いて「尾垂木」を支承せる柱を觀察すべし。蓋し、これ元祿年中大修繕の際附加せるものならん、其の手法の頗る適當なるが爲めに、此の贅物を加ふるも未だ甚だしく全體の形式を損するに至らず。

一二　妻飾

「妻飾」は必ずや中古大修繕の際に當りて、大にこれを變更せしものならざるべからず。其の「蟇股」の形式は一種の創意を示すと雖も、寧ろ煩雜にして、然も未だ善美を竭さざるものあるは、爭ふべからざるの缺點なり。

「大瓶束」は、其の輪郭入意に充たざるものありと雖も、尚、手腕の凡庸ならざるを見るべく、殊に其の「結綿」は奇古愛すべし。「懸魚」は其の形狀能く整ひて、曲線の運用亦活動し、これを金堂のものに比すれば實に一歩の長あることを覩る。「懸魚」の形式たる、もと「破風」の大さと角度とによりて規定さるゝものなり。今中門に於ける屋蓋の勾配正に其の當を得て、「破風」の形狀亦「懸魚」をして能く其の所を得せしめたり。只其の「六葉」に代ふるに「八葉」の銅板を以てしたるは、思ふに決して妥當にあらざるなり。これを要するに、「妻飾」は其の著想奇警なりと雖も、其の手法は則ち未だ到らざるものあり。吾人其の意を探りて其の形を捨てば則ち大に可なり。「妻」の壁は殆ど上層の壁と同一面にあり、これ吾人が玉蟲厨子に於いても亦觀察するところなり。其の「妻」の壁面の甚だしく外方に突出すること、近世の殿堂の如き奇醜なく、其の内方に退くこと鳳凰堂の如き奇巧はこれを缺けり。

一三　結　論

以上記述するところを總括してこれを論結すれば、中門建築は其の形式手法悉く絶倫の妙を極めたり。而して其の後代に於ける各時代の建築と相對比し、其の傳記に徴し、其の建築的性質を精査して、吾人は其の推古時代の様式を存するものなることを信ぜんと欲す、而して彼の金堂内の玉蟲厨子は、此の推測をして事實たらしむるの能力を有するなり。

只吾人の深く講究せざるべからざるものは、中門建築の形式の全然推古の式を代表すべきものなるか、或は其の一部は已に古式を失へるものなるか、其の如何なる部分に於いて舊式の存在を見るかの問題なり。而して此の問題を氷解するは極めて難く、且つ到底此の短篇を以て盡すこと能はざるなり。予は今、これを詳論するの遑あらず、姑く中門建築の大體の意匠が、能く推古の古式を存することを認めて以て足れりとせん。

第五編　塔婆建築説

緒　言

其の高さを以てすれば、則ち東寺と興福寺とに數歩を讓るなり、其の裝飾を以てすれば、則ち四天王寺と日光東照宮とに三舎を避くるなり、而して法隆寺の塔婆が獨り名聲の嘖々として他の塔婆をして後へに隘若たらしむるは果して何の故ぞや。其の形式の古奇なるが爲か。其の形式の古奇は素よりこれが價値を爲すの要素なり、然れども、其の吾人をして感歎措く能はざらしむるものは別に其の謂れあるなり。何ぞや、曰く、其の形式の變化に富み、其の手法の極めて雄健にして而も自在なるの事實これなり。乞ふ、以下これを論述せん。

一　歴史的考證

塔婆は原と梵語の「Stupa」より來る、「Stupa」は墳墓の義なり。支那人これに充つるに種々の文字を以てし、

これを譯して亦幾種の語を作れり。試みにこれを枚擧すれば、音譯して曰く窣堵波、曰く蘇偷婆、曰く抖擻婆、曰く塔婆、意譯して、曰く讃護、曰く聚相、曰く墳。而して佛塔は尤も共通の名稱にして、塔は其の尤も簡單化せる稱呼なりとす。吾人は其の他又大塔、寶塔、大寶塔、多寶塔、以下各種の稱號を用ふることあるも、素と物に於いて全く一なるのみ（現今寶塔、多寶塔の如き名稱は特種の形式を有する塔婆を代表することとなれり）。塔婆の目的に二樣あり。

甲　靈域の標として

乙　墓標として

靈域の標として塔婆を建つるに當りては、通常記念の物品を其の內に藏す。物品は或は經文なることあり、或は靈域の由緒を作せるものの遺骸の一部なることあり。塔婆の形狀は元と五輪に起り、五輪は地水火風空の五大を表するの意を示せり。其の往々七重、九重乃至十三重に及ぶもの、或は三重二重乃至單層のものあるも、元皆五輪の變形として解釋するを得べきものなりとす。釋氏要覽には立塔を解して左の如く云へり。

西域記云。立表寄歸傳云。作俱攞。皆疊塼石爲之。形如小塔。上無輪。蓋且立塔有三意。一表人勝。二令他生信。三爲報恩。而有等級。若初果一級。二果二級。三果三級。四果四級表超三界也。辟支佛十一級。表未超無明一支。故佛塔十三級。表超十二因緣。故若凡夫比丘有德行者。亦得立塔。即無級。僧祇云。持律比丘法師營事比丘有德望者皆應立塔。

法隆寺の塔婆は又往生所寺と呼ばれ、當時の伽藍制度の通則として、佛舍利を藏するの目的を以て建立されたるものなり。其の形は尤も普通なる五層なり。其の創立は自餘の各宇と共に推古の朝にあり。古今一陽集に曰く「後白河院保元二年戊寅自三月上旬至六月上旬修補於食堂金具改鑄又覆鉢新鑄（中略）後宇多院弘安六年癸未春金堂塔婆同時修補（中略）慶長年中家康公御修理（中略）元祿九年隨將軍綱吉公鈞命以幹緣寺町西面梵閣悉修補、特至寶塔者大樹公母儀從一位（諡號桂昌院殿）懇在再興美麗如新造」と。彼の元祿年中に於ける工事は決して再建にあらずして大修繕なりしことは、此の文を以てするもこれを證することを得べし。而して吾人は、其の他尙、考へざるべからざるものあり、即ち寺に傳ふるところの法隆寺流記資財帳これなり。帳中云へるあり、「塔一基五重高十六丈」と。而して今日現存するものは、其の高さ僅に十二丈に充たず、其の矛盾實に怪しむべしとす。帳中また云へることあり。

塔本肆面具攝　一具涅槃像土　一具彌勒佛像土　一具維摩詰像土　一具分舍利佛土

右和銅四年歲次辛亥寺造者

而して以上四面の像土は、今日猶依然として現存すと雖も、彼の塑像は隨意にこれを建築と分離し得べきものなるを以て、これを以て建築の年代を考證することを得べからず。翻つて今他の一方より考ふるに、彼の資財帳には、金堂及び中門の大さを記入せり、而して其の數量を見れば、恰も今日現存するものと相符合す。これに於いて吾人は、更に塔婆の高さの獨り彼此相符合せざるを怪み、進んで其の果して再建に係るや否を疑ふべきに至りたり。

然れども予は此の疑問を解釋すること極めて容易なり。予は斷じて資財帳に記するところの誤謬なることを信ずるなり、試みに思へ、其の金堂は六丈なり、其の中門は五丈に充たず、而してこれに配するに十六丈の塔婆を以てせんとす、果して其の權衡を失することなきを得るか。彼の京都東寺の金堂は九丈の高さあり、而して後始めて十八丈餘の塔婆と相應ずるにあらずや。姑く記して後の識者を俟つ。

按ずるに、塔の高さは其の伽藍境内の四至の大さと、或る關係を有するの說あり。予は今日の研究に於いて未だ其の事實を發見せざるも、塔の高さには自ら一種の制限あるものの如し。予の調査するところ及び古書に傳ふるところに由りて、試みにこれを分類すれば、

第一類　破格の高塔。

法勝寺の八角九重塔これに屬す。傳へ曰く、高さ八十四丈と、今其の大さを考ふる能はず。

第二類　所謂三十二丈と稱するもの。

これに屬するものは相國寺の七重塔、東大寺の兩塔也。七大寺日記によれば、東大寺東塔は二十二丈八寸西塔は二十三丈六尺七寸、露盤高さ各八丈八尺二寸とあり。然らば東塔は三十丈九寸にして、西塔は三十二丈四尺九寸となる。

第三類　所謂十六丈と稱するもの。

此の類に屬するもの甚だ多し。而して其の眞正の高さは必ずしも十六丈ならざるを常とす。試に其の例を示せば、

元興寺五重塔　二十四丈と稱す

按ずるに、此の塔は初重の大さ三十二丈七寸にして、東寺の塔よりやゝ大なり。恐らくは實に二十丈以上の高塔なりしならん。

東寺五重塔　十八丈八尺二寸

高野山大塔　十七丈四尺

興福寺五重塔　十七丈三寸六分

第四類　十一丈より十二丈に出入するもの。

此の種類に屬するもの特に多し。例せば、

法觀寺五重塔　十二丈一寸五分

醍醐寺五重塔　十二丈三尺四寸

藥師寺三重塔　十一丈四尺八寸六分

日光東照宮五重塔　十一丈四尺

法隆寺五重塔　十一丈七寸

第五類　八丈に出入するもの。

此の種に屬するものは三重塔に多し。例せば、

法輪寺三重塔　八丈五寸一分
法起寺三重塔　八丈一尺一寸九分
當麻寺東塔　七丈六尺七寸
同　西塔　八丈五尺四寸七分

第六類　五丈に出入するもの。（所謂五丈六尺と稱するもの）

此の種に屬するものには五重塔、三重塔及び多寶塔あり。例せば、

室生寺五重塔　五丈六尺四寸五分
淨瑠璃寺三重塔　五丈四尺五寸
白毫寺多寶塔　露盤下まで三丈二尺九寸五分（絶頂まで五丈餘）

其の他これよりも更に小なるものあり。第七類と名づくべきものこれなり。

塔の高さは多くは以上の數種類の中に屬し、其の中間に居るもの極めて稀なるは頗る興味ある現象なりとす。次に注意を要するものは、金堂と塔婆との高さの比例なり。予は往々にして金堂の高さの殆ど塔の高さの二分の一に當るの例を發見す。或はこれ當時伽藍造營の法にあらざりしか。姑く玆に疑を存す。

名稱	金堂の高さ（概略）	塔の高さ（概略）
東大寺	十・六丈	三十二丈
東寺	九丈	十八丈
法隆寺	六丈	十二丈
當麻寺	四丈	八丈

ニブラン

凡そ五重塔の「プラン」は千遍一律にして決して變化あらず、即ち中央に「中心柱」あり、これを圍みて「四天柱」あり、其の周圍には「側柱」あり。法隆寺の塔は其の他に「裳階」あるの一事を以て他に異なりとす（第三十九圖）。「裳階」に關してはこれを金堂建築説の部に詳記せり。全體は正方形にして正しく四方位に面し、高さ五尺五寸の土壇上に立つものとす。一面に三間あり、「中の間」はやゝ廣くして「脇の間」はこれより狹し、其の比は別表に示すが如く十と七との如しと雖も、而も正しく十と七との簡單なる比例をなすにあらず。二重以上は同樣の方式を反覆するものにして、後世に至りては所謂「一支落ち」と名づくる法則を墨守し、常にこれに拘泥するの嫌ありと雖も、獨り法隆寺の塔婆は起然其の以外に立ち、一種の自由なる範圍内に於いて巧みに運用の妙を極めたり。而して其の第五層に於いては三間を變じて却つて二間と作せるが如きは、蓋し其の意匠の極めて奇拔なる所以なり。

	中の間柱眞々	脇の間柱眞々	脇の間の中の門に對する比
法隆寺塔	十支	七支	○・七
醍醐寺塔	九支	七支半	○・八二二
興福寺塔	十二支	十一支	○・九一六
法觀寺塔	十一支	十支	○・九〇九
仁和寺塔	十二支	十支	○・八三三
東寺塔	十二支	十一支	○・九一六
四天王寺塔	八尺八寸三分	七尺四寸	○・八三八
日光東照宮塔	十二支	十支	○・八三三

蓋し、「中の間」と「脇の間」との廣さの比例七と十とに當るが如きは、斯の種類の建築に於いて極めて妥當なるを覺ゆ。後世の手法、殆ど常に「中の間」と「脇の間」との差を規定して、一支若くは二支に止まらしむるが

	中の間と脇の間との廣さの比	中の間の廣さと高さの比	柱太さと中の間の廣さとの比
金堂	○・六六	一・○七	五・三○
塔婆	○・七○	一・一三	四・八七
中門	○・七○	一・○○	六・七一

如きは實に解すべからざるの法則なりとす。次に、金堂、中門に就きて此の比例を比較すべし。

此の表に就きて、吾人は法隆寺の三宇の間に如何なる共通の性質あるかを知るべきなり。

塔婆の土壇は二層より成れり。世傳へて人造石を以てこれを疊むと云ふ。又曰く、人造石は百濟人の製作するところ、當時これを練石と名けたりと。今現物に就きてこれを見れば、則ちこれ一種の凝灰石にして決して人造石にあらず。此の石材は大和國の各地より產出するものにして、性質極めて脆弱なりと雖も、工作に易きを以て重力を受けざる部分にはこれを賞用して妨げなきなり。

三　垂木の制

五重塔「垂木割」の不規則なることは、猶、金堂中門に於けるが如し、一支は亦凡そ九寸にして、「垂木下端」は三寸五分より四寸に至る。「一支落ち」の法則は爰に全く行はれず、其の每層の數左の如し。

初重	二重	三重	四重	五重
五十三	四十七	四十三	三十九	三十五

而して、其の初重に於ける「柱間」と「垂木」との關係より一支の大さを求むれば左の如し。

	間隔	支數	一支
中の間	八・七五	十	八・七五
脇の間	六・二〇	七	八・八五